熊本県文化財調査報告第 345 集

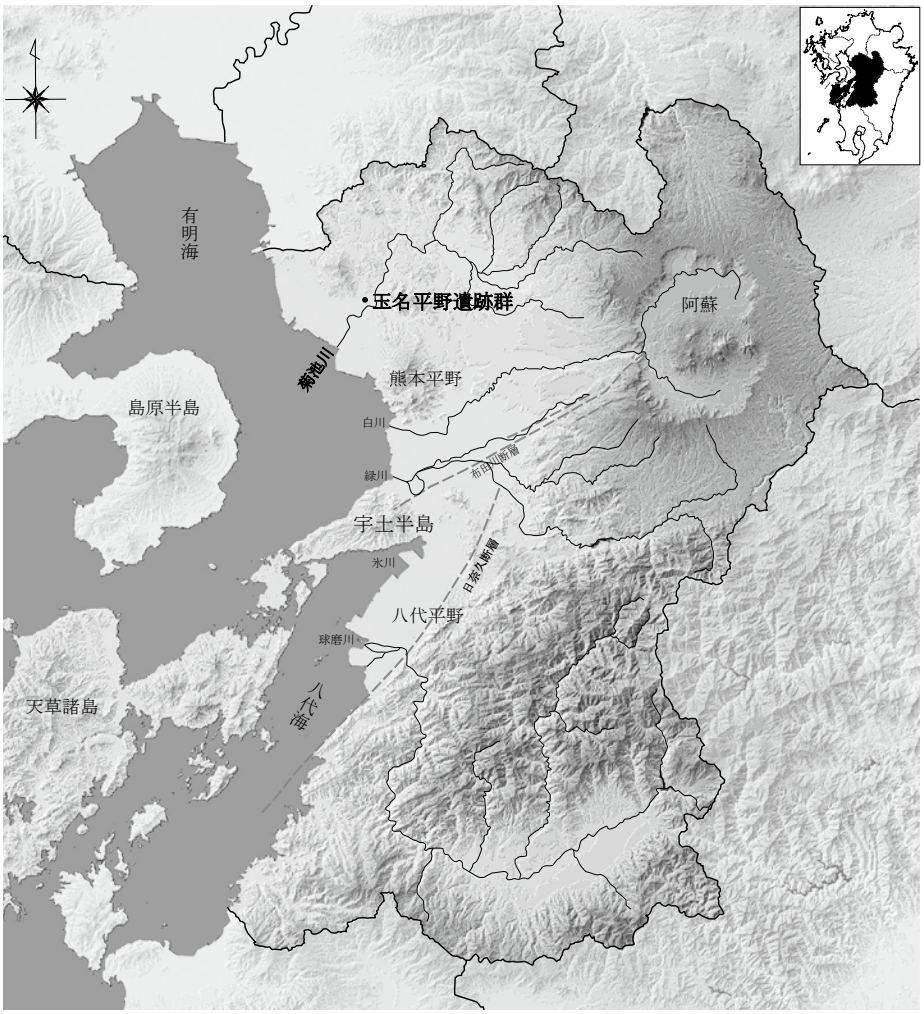
玉名平野遺跡群 1

－玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

２０２２
熊 本 県 教 育 委 員 会

玉名平野遺跡群 1

－玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－



２０２２

熊本県教育委員会

調査区遠景（北より）

調査区遠景（西より）

口絵 2

甕棺墓 SJ24

土坑墓 SK04

序　文

熊本県教育委員会は、令和２年度（２０２０年度）に、玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴い玉名平野遺跡群の発掘調査を実施しました。

玉名平野遺跡群は、熊本県北西部の熊本県玉名市河崎・秋丸地区にあります。阿蘇外輪に源を発し有明海に注ぐ菊池川の下流域右岸に位置します。

玉名平野遺跡群は、玉名平野条里跡等の生産遺跡を含む遺跡です。今回の調査においても古代以降の水田を営んだ様子を確認することができました。また、時代を遡り弥生時代の遺物を含む包含層があることや、弥生時代・古代の建物跡や墓跡等、集落の一端をうかがい知る貴重な資料が発見されました。それぞれの時代の人々の暮らしを理解する上で貴重な資料と思われます。

この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方に活用され、文化財に関する関心と理解を深めていただき、郷土の歴史理解の一助となれば、喜びに堪えません。

最後に調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂いた熊本県道路整備課ならびに貴重なご指導ご助言を頂いた諸先生に対し厚くお礼申し上げます。

令和４年３月１５日

熊本県教育長　古閑　陽一

例　　言

1　本書は、令和２年７月７日から 10 月 16 日まで（第１次調査）及び令和２年 12 月９日から令和３年１月 29 日（第２次調査）まで実施した熊本県玉名市河崎及び秋丸に所在する玉名平野遺跡群の発掘調査報告書である。

2　現地調査は、熊本県教育庁教育総務局文化課が実施し、発掘調査補助業務を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

3　遺物の実測・トレースは主に稲葉貴子が行い、唐木ひとみ、春川香子、築出直美が補助した。

4　遺物の写真撮影は写測エンジニアリング株式会社に委託した。

5　調査１区土坑墓 SK04 で出土した古人骨の整理・分析・報告を国立大学法人九州大学　舟橋京子准教授に委託した。

6　上記古人骨の ^{14}C 年代測定を株式会社古環境研究所に委託した。

7　遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。

8　本書で用いた地形図は、国土地理院発行の 45,000 分の１の地形図及び熊本県地図統合システムをもとに作成した。

9　本書の執筆は、後藤克博が行った。

10　本書の編集は、後藤が担当し、熊本県教育庁教育総務局文化課が行った。

11　本書に掲載した遺物・実測図・写真の埋蔵文化財資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　例

1　遺跡の座標は、平面直角座標第Ⅱ系（世界測地系）を使用し、方位は座標北である。

2　遺構実測は、20 分の１の縮尺で行った。

3　本書掲載の土器は３分の１を基本とし、甕と一部の土器は４分の１で掲載している。石製品及び鉄製品は挿図中のスケールを参照されたい。

4　土器実測図の断面は、須恵器が黒で塗色し、それ以外は白抜きである。

5　色調については遺構・遺物ともに『新版　標準土色帳』（1967 年　農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に従った。

玉名平野遺跡群

－玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

－ 目　次 －

口絵
序文
例言・凡例

第１章　調査の経過
第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　発掘作業の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第３節　整理作業の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３節　既往の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第３章　調査の方法と成果
第１節　１次 調査の方法と成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
１　調査の方法

第２節　１次 １区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
１　１区基本層序
２　１区遺構及び遺物
３　小結

第３節　１次２区の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
１　２区基本層序
２　２区遺構及び遺物
３　小結

第４節　２次調査の方法と成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
１　調査の方法
２　各トレンチの調査
３　小結

第４章　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第５章　総括 ・・・ 65

参考文献
写真図版
抄録

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図
第２図　周辺遺跡地図
第３図　１区基本層序
第４図　１区遺構配置図・土層断面図
第５図　１区区竪穴建物ＳＩ 01 遺構実測図
第６図　１区竪穴建物ＳＩ 01 遺物実測図－１
第７図　１区竪穴建物ＳＩ 01 遺物実測図－２
第８図　１区甕棺墓ＳＪ 24 遺構実測図
第９図　１区甕棺墓ＳＪ 24 遺物実測図
第 10 図　１区溝ＳＤ 07 遺構・遺物実測図
第 11 図　１区土坑ＳＫ 13 遺構・遺物実測図
第 12 図　１区土坑ＳＫ 18・ＳＫ 20 遺構実測図
第 13 図　１区土坑ＳＫ 18 遺物実測図
第 14 図　１区土坑ＳＫ 20 遺物実測図
第 15 図　１区不明遺構ＳＸ 23 遺構・遺物実測図
第 16 図　１区不明遺構ＳＸ 25 遺構・遺物実測図
第 17 図　１区柱穴Ｐ 26 遺構・遺物実測図
第 18 図　１区Ⅳ－２層遺物実測図－１
第 19 図　１区Ⅳ－２層遺物実測図－２
第 20 図　１区竪穴建物ＳＩ 02 遺構実測図
第 21 図　１区竪穴建物ＳＩ 02 遺物実測図
第 22 図　１区混貝土層・土坑墓ＳＫ 04 遺構実測図
第 23 図　１区混貝土層遺物実測図
第 24 図　１区土坑墓ＳＫ 04 遺物実測図
第 25 図　２区基本層序
第 26 図　２区遺構配置図・土層断面図
第 27 図　２次調査 調査区位置図
第 28 図　トレンチ土層柱状図
第 29 図　２次調査６トレンチ遺物実測図
第 30 図　１トレンチ西壁土層断面－１
第 31 図　１トレンチ西壁土層断面図－２
第 32 図　２・３－１・３－２①トレンチ西壁土層断面図
第 33 図　３－２②・３－３・４トレンチ西壁土層断面図
第 34 図　５・６①トレンチ西壁土層断面図
第 35 図　６②・７①トレンチ西壁土層断面図
第 36 図　７②・８①トレンチ西壁土層断面図
第 37 図　８②西壁土層断面図
第 38 図　９トレンチ西壁土層断面図
第 39 図　10 ①トレンチ西壁土層断面図
第 40 図　10 ②トレンチ西壁土層断面図
第 41 図　座標測地点図

表　目　次

第１表　遺跡地名表
第２表　遺物観察表
第３表　遺物観察表
第４表　遺物観察表

図　版　目　次

図版１
　１区全景
　１区竪穴建物 SI01 完掘状況
　１区甕棺墓 SJ24 検出状況
　１区甕棺墓 SJ24 人骨出土状況
図版２
　１区 SK18 遺物出土状況
　１区 SK20 遺物出土状況
　１区不明遺構 SX25 完掘状況
　１区竪穴建物 SI02 完掘状況
　１区土坑墓 SK04 土層断面
　１区土坑墓 SK04 人骨出土状況
　１区混貝土層及び土坑墓 SK04 完掘状況
図版３
　２区完掘状況
　２区畦畔状遺構検出状況
　２区水田跡検出状況
　２区溝 SD07 完掘状況
　２次調査６トレンチ遺物出土状況
図版４
　１区甕棺墓 SJ24 出土遺物
図版５
　１区竪穴建物 SI01 出土遺物
　１区溝 SD07 出土遺物
　１区土坑 SK13 出土遺物
図版６
　１区土坑 SK18 出土遺物
図版７
　１区土坑 SK20 出土遺物
　１区柱穴 P26 出土遺物
　１区不明遺構 SX23 出土遺物
図版８
　１区不明遺構 SX25 出土遺物
図版９
　１区Ⅳ－２層出土遺物
図版 10
　１区竪穴建物 SI02 出土遺物
　１区混貝土層出土遺物－①
図版 11
　１区混貝土層出土遺物－②
　１区土壙墓 SK04 出土遺物
　２区溝 SD07 出土遺物
　２次調査４トレンチ出土遺物
図版 12
　２次調査６トレンチ出土遺物－①
　２次調査６トレンチ出土遺物－②
　２次調査７トレンチ出土遺物
　２次調査９トレンチ出土遺物
　２次調査 10 トレンチ出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

１　調査に至る経緯

熊本県土木部は玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業で道路拡幅工事を計画、事業計画地が柳町遺跡・玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡等、県文化課が調査を行った遺跡に近接し、玉名平野遺跡群の範囲にあった。そこで予備調査が必要であることを連絡すると、平成 28 年 9 月 23 日付けで熊本県県北広域本部玉名地域振興局長から予備調査の依頼があった。これを受けて次のとおり予備調査を実施した。

（１）第１次　平成 30 年２月 20 日～平成 30 年２月 22 日
（２）第２次　平成 31 年１月 23 日
（３）第３次　平成 31 年３月 18 日～平成 31 年３月 19 日
（４）第４次　令和元年 12 月 13 日
（５）第５次　令和２年 11 月 20 日

調査の結果、事業予定地の全域で、遺跡の存在、広がりが確認されたため、本調査の実施が必要であることを通知した。

第２節　発掘作業の経過

１　発掘調査の概要

令和２年（２０２０年）３月２４日付け熊本県知事の発掘調査依頼を受け、調査を行うことになった。発掘調査は令和２年度に次のとおり第１次調査及び第２次調査を実施した。

調 査 地　第１次調査　熊本県玉名市河崎字長畑地内
　　第２次調査　熊本県玉名市秋丸地内
調査原因　県道６号線拡幅工事
調査期間　第１次調査　令和２年（2021 年）７月７日～令和２年（2021 年）10 月 16 日
　　第２次調査　令和２年（2021 年）12 月９日～令和３年（2022 年）１月 29 日
調査面積　第１次調査　828 ㎡
　　第２次調査　768 ㎡

２　発掘調査及び整理作業の体制

現地調査（令和２年度（2020 年度））
　調査主体　熊本県教育委員会
　調査責任者　中村誠希（文化課長）
　調査総括　　長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹（文化財調査担当））
　調査事務局　伊藤　昭（審議員）、津田光生（主幹（総務担当））、佐藤虹夏、大石ひとみ（以上主事）
　調査担当　　坂口圭太郎（主幹）、豊永結花里（学芸員）
整理作業（令和３年度（2021 年度））
　整理主体　熊本県教育委員会
　整理責任者　宮﨑公一（文化課長）
　整理総括　　長谷部善一（課長補佐）、宮崎敬士（主幹（文化財調査担当））
　整理事務局　後藤和也（課長補佐）、堀　義之（主幹（総務担当））、佐藤虹夏、大石ひとみ（以上主事）
　整理担当　　後藤克博（文化財保護主事）、稲葉貴子、唐木ひとみ、築出直美、春川香子（以上会計年度任用職員）

3　調査の内容

第１次調査及び第２次調査を実施し、下記のものを確認した。

①１次調査　令和２年７月７日～令和２年 10 月 16 日　調査面積　828㎡

１区と２区の調査区を設定して調査を行った。１区では、古代の竪穴建物１棟、土坑墓１基、弥生時代の竪穴建物１棟、土坑３基及び小型甕棺墓１基などを検出した。特に土坑墓（古代）からは保存状態の良い人骨を検出した。２区では畦畔遺構と溝状遺構を検出し水稲耕作の存在を確認した。

②２次調査　令和２年 12 月９日～令和３年１月 29 日　調査面積　768 ㎡

２次調査は玉名平野における生産遺跡（水田）の広がりを確認することを目的に実施した。本調査では総延長約 480 mに及ぶ 10 トレンチを調査した。調査の結果、複数の調査区土層断面において水田を確認した。また、古墳時代の文化層（包含層）、中世の溝と畝等を検出した。

第３節　整理作業の経過

報告書の作成は、熊本県文化財資料室で行った。令和２年度に一次整理を行い、令和３年度に二次整理を行った。令和３年度に下記のとおり、自然科学分析、図版作成、原稿執筆を行った。

（１）遺構図トレース図作成　出土遺物二次整理準備　４月～７月

（２）古人骨整理・復元・保存処理　７月～ 10 月

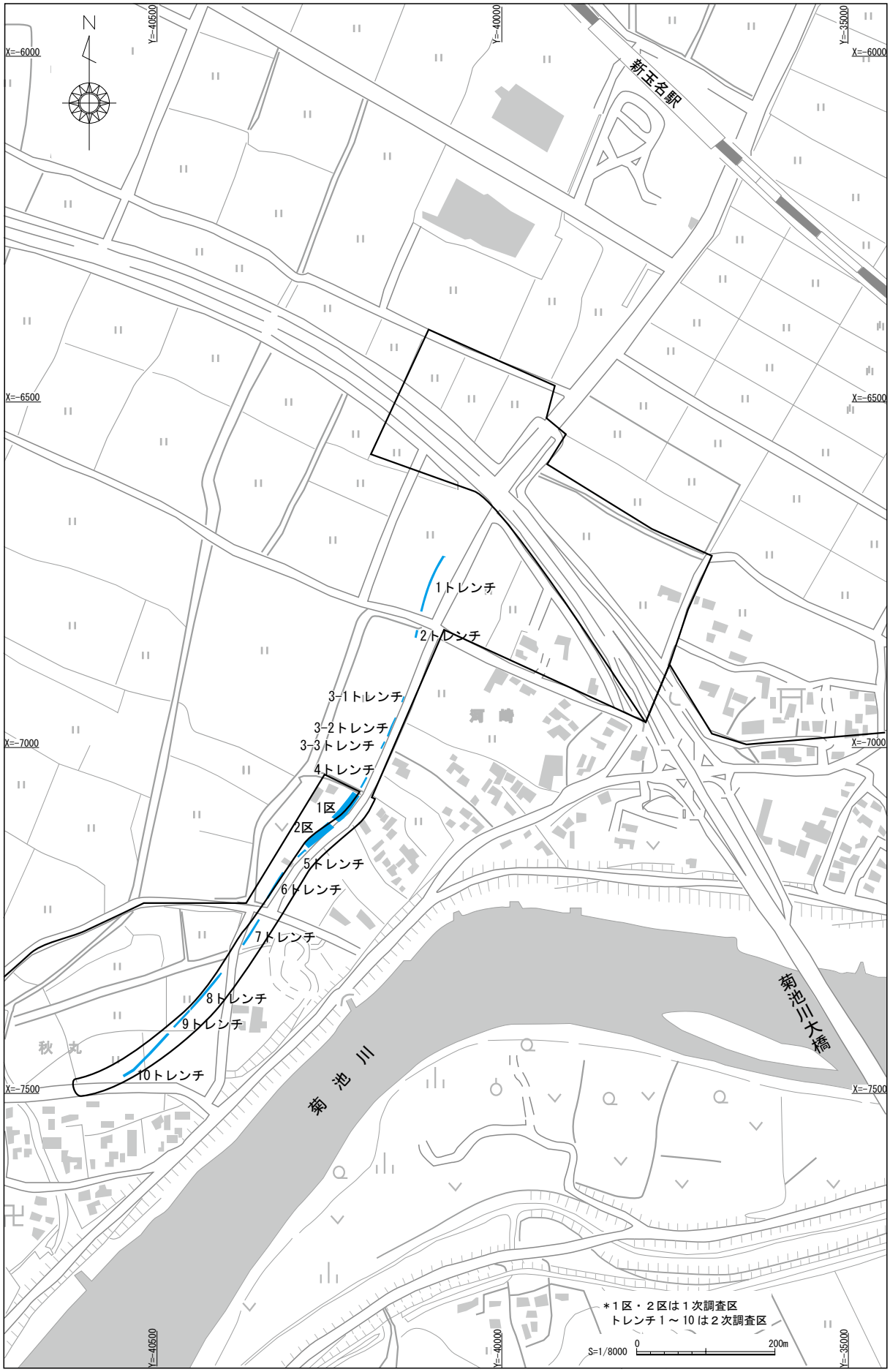
（３）古人骨 ^{14}C 年代測定　８月～９月

（４）出土遺物二次整理９月～ 11 月５日

（５）原稿作成５月～ 11 月 15 日

（６）印刷校正　令和４年１月～３月

（７）印刷　令和４年３月


N
新玉名駅
1トレンチ
2トレンチ
3-1トレンチ
3-2トレンチ
3-3トレンチ
4トレンチ
1区
2区
5トレンチ
6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
9トレンチ
10トレンチ
菊池川
菊池川大橋
秋丸
＊1区・2区は1次調査区
トレンチ1～10は2次調査区
S=1/8000
0
200m
X=-6000
X=-6500
X=-7000
X=-7500
Y=-40500
Y=-40000
Y=-35000

第１図　調査区位置図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡がある玉名市は熊本県北西部に位置する。玉名市は北側を小袋山地、北東部を臼間山地、南東部を国見山地、南側を金峰山地にコの字に囲まれる。阿蘇外輪山を源とする菊池川の下流に玉名市は位置する。菊池川が市内を貫流し有明海に注ぐ。菊池川下流の白石堰から下流方向に広がる沖積平野が玉名平野である。玉名平野の菊池川左岸には金峰山地から連なる伊倉台地が舌状にせり出し、一方菊池川右岸には小岱山の裾野に広がる洪積台地が連なる。

玉名平野遺跡群は菊池川右岸の熊本県玉名市河崎字長畑に所在する。今回調査した調査区１区・２区は玉名平野遺跡群の中でも菊池川近くに位置し、自然堤防の縁辺部に位置する。

第２節　歴史的環境

周辺の遺跡は中世の社寺に関する遺跡が点在し、菊池川左岸には弥生～中世の遺跡がみられる。また、遺跡の南側には縄文時代から近世の包蔵地が存在する。

【縄文時代】

菊池川右岸に保田木貝塚、繁根木貝塚、同左岸には百田貝塚があり、縄文時代中期の阿高式土器が出土する。さらに、菊池川上流の和水町江田に若園貝塚がある。

【弥生時代】

玉名平野遺跡群の周辺には、弥生土器の包蔵地が多く見られる。両迫間日渡遺跡は弥生・古墳時代の包蔵地である。また、両迫間川床遺跡は縄文時代から中世の包蔵地である。この遺跡のやや下流にある高瀬川底遺跡も縄文時代から中世の包蔵地である。

本遺跡から甕棺が１基出土しているが、甕棺を埋葬した遺跡として、菊池川上流の前田遺跡、玉名市安楽寺の北の崎遺跡、玉名平野条里跡（古閑前地区）がある。

玉名平野遺跡群は旧玉名平野条里跡で生産遺跡に登録される各遺跡の総称である。過去に熊本県教育員会が両迫間日渡遺跡２の調査を行った際には、弥生～中世の遺構がみられ、そのなかで水田跡が確認されている。水田は弥生時代後期から確認され、足跡等の水田に関する痕跡が検出されている。また、九州新幹線建設工事に伴う玉名平野条里跡（古閑前地区）の調査では、弥生時代後期の集落跡を確認している。

【古墳時代】

古墳時代の遺跡も周辺には多い。今回調査した遺跡の近接遺跡に柳町遺跡がある。河崎にある遺跡で、古墳時代の「田」のほか四文字分相当が見られる木製短甲付属棒状留具が出土した。また、玉名市秋永遺跡西側の洪積台地には稲荷山古墳や伝左山古墳などの古墳、北側の台地の縁には国指定史跡の大坊古墳や永安寺東古墳・永安寺西古墳など古墳が点在する。

【中世以降】

中世以降、調査区の西側にある高瀬は日明貿易の港湾、あるいは年貢米の集積地として重要な役割を果たす。（中世以降について、詳細は熊本県文化財調査報告第 247 集「祭田下遺跡」に掲載されているので、参照されたい）

第３節　既往の調査

玉名平野遺跡群の旧遺跡名を玉名平野条里跡という。この玉名平野条里跡の範囲には条里以外の遺跡もあり、別の遺跡名で報告書が刊行されている。また「玉名平野条里跡」は旧遺跡地図では７か所に存在しており、「玉名平野条里跡」という名称の遺跡が岱明町野口字河原にもあり、下記の報告書が刊行されている。

熊本県教育委員会「玉名平野条里跡」熊本県文化財調査報告第 226 集　2005

今回調査した遺跡が所在する玉名平野遺跡群（483）の範囲で調査が行われ、報告書が刊行されているものには下の７冊があげられる。

1　熊本県教育委員会「柳町遺跡Ⅰ」熊本県文化財調査報告第 200 集　2001
2　熊本県教育委員会「柳町遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第 218 集　2004
3　熊本県教育委員会「玉名平野条里跡（古閑前地区）」熊本県文化財調査報告第 261 集　2010
4　熊本県教育委員会「長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡Ⅰ」 熊本県文化財調査報告第 268 集　2012
5　熊本県教育委員会「玉名平野条里跡３・両迫間日渡遺跡２・玉名の平城跡」
　熊本県文化財調査報告第 299 集　2014

熊本県教育委員会が玉名平野遺跡群において行った調査について概要を記すと以下のとおりである。

柳町遺跡は、一般国道 208 号玉名バイパスの改築事業に伴い発掘調査が行われた。平成６年度から平成８年度にかけて行われた調査では、「弥生前期の土器」、「弥生終末から古墳時代前期にかけての竪穴建物」、「杭列」、「田の文字が見られる棒状留具」、「木甲」、「奈良時代から平安時代前期にかけての大畔」などが確認されている。

平成９年度から平成 11 年度にかけて行われた調査では、「古墳時代末期から古代初期の大溝状遺構」、「古墳時代前期の竪穴住居跡」、「井戸」が確認された。

平成 18 年玉名平野条里跡の調査が行なわれて「両迫間日渡遺跡Ⅰ」としてまとめられ、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての「敷粗朶工法を用いた畦畔」が確認された。

平成 19 年度に調査された古閑前地区の玉名平野条里跡では、「弥生時代後期の竪穴建物」、「古墳時代前期及び後期の竪穴建物」、「掘立柱建物」が確認された。古墳時代は弥生時代に対して掘立柱建物が増加していることから、米の保管機能を持った集落の可能性を示している。

平成 12 年度から平成 20 年度にかけて調査された玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡の調査の結果がまとめられたのが「玉名平野条里跡３・両迫間日渡遺跡２・玉名の平城跡」である。国道 208 号から新玉名駅へと向かう県道玉名立花線の拡幅工事に伴う調査であり、弥生時代、古墳時代、古代、中世においての水田の広がりを確認し、弥生時代の遺構では、敷粗朶工法を用いた大畦畔が確認された。

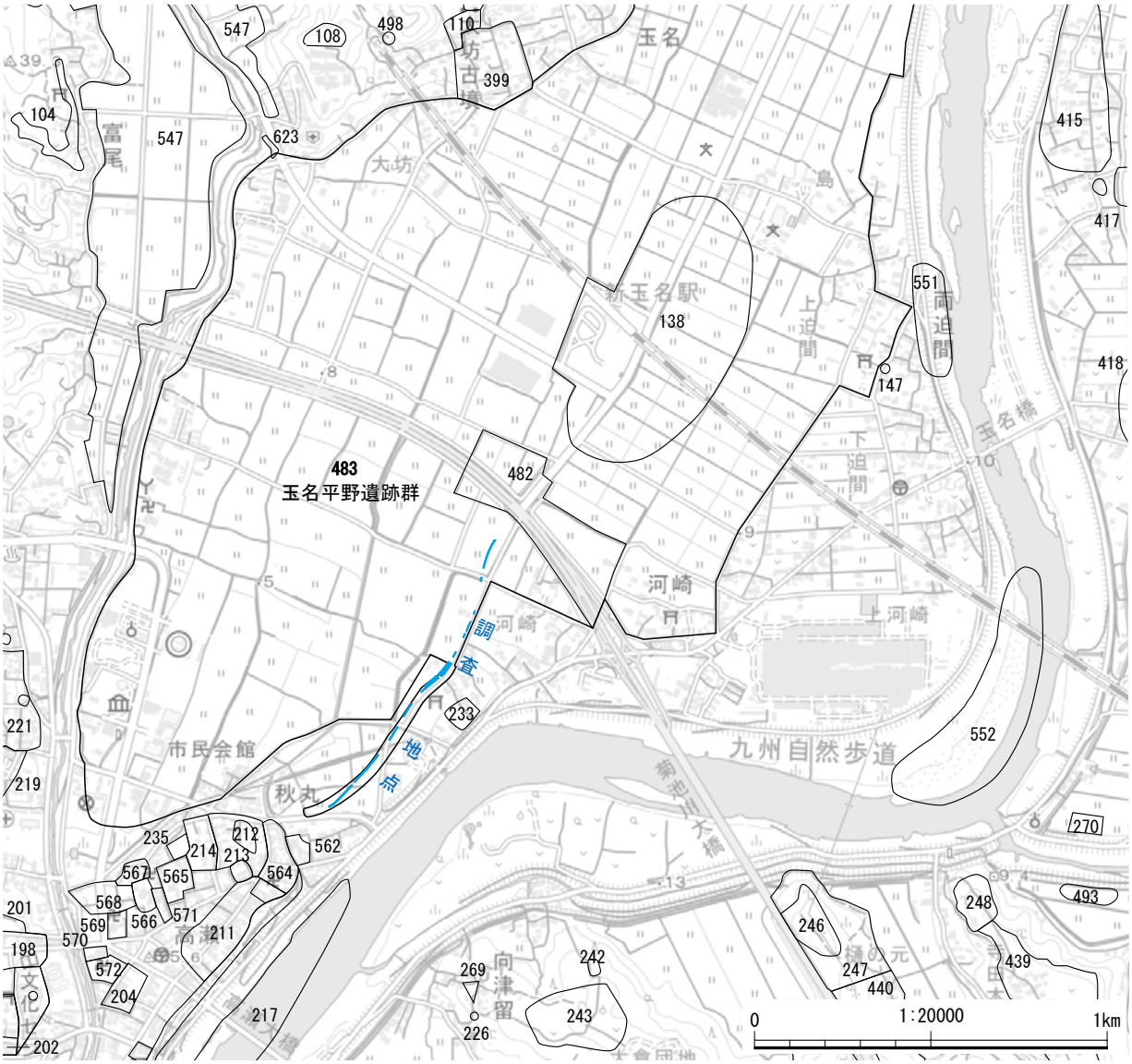
玉名平野遺跡群の範囲で熊本県教育委員会が行った調査以外では、玉名市が行った調査があり次のとおり報告書が刊行されている。

・　玉名市教育委員会「両迫間日渡遺跡」玉名市文化財調査報告第 19 集　2009
・　玉名市教育委員会「玉名平野遺跡群」玉名市文化財調査報告第 48 集　2021

平成 21 年度に刊行された「両迫間日渡遺跡」では、主な遺構･遺物としては古墳時代の祭祀遺構、土師器、須恵器、土製模造品、剣形石製品をはじめとする石製模造品などが出土している。

令和３年度に刊行された「玉名平野遺跡群」では、古代末の畦畔と水田や木橋を検出したことが報告されている。

これまで行われた調査は、玉名平野の後背湿地においての調査であった。今回行った玉名平野遺跡群の調査は菊池川に近い菊池川自然堤防である微高地と後背湿地までの調査である。玉名平野遺跡群内で県が行った埋蔵文化財発掘調査は既往の調査を含めると６次の埋蔵文化財発掘調査報告となるが、「玉名平野遺跡群」の名称を使用するのは今回が初めてであるので、報告書名は「玉名平野遺跡群１」とした。



第２図　周辺遺跡地図

第１表　遺跡地名表

遺跡番号	名称	種類	時代	遺跡番号	名称	種類	時代	遺跡番号	名称	種類	時代
104	富尾原横穴群	横穴	古墳	233	金盆山玉飯寺跡	寺社	近世・近代	493	群前遺跡	包蔵地	弥生・中世
108	西原東遺跡	古墳	古墳	235	高瀬官軍墓地	墓	近代	498	西屋敷遺跡	墓	近世・近代
110	大坊寺跡	寺社	中世	242	飯塚古墳	古墳	古墳	547	冨尾遺跡	生産	古代
138	両迫間日渡遺跡	包蔵地	弥生・古墳	243	亀頭迫遺跡	包蔵地	古墳	551	迫間船着場跡	水運	古代
147	長慶寺跡	寺社	近世	246	城ヶ辻古墳群	古墳	古墳	552	両迫間川床遺跡	包蔵地	縄文～中世
198	繁根木山寿福寺跡	寺社	中世・近世	247	城ヶ辻城跡	城館	中世	562	常安寺	寺社	近世・近代
201	繁根木遺跡群	包蔵地	弥生・古墳	248	寺田古墳	古墳	古墳	564	光尊寺	寺社	近世・近代
202	繁根木貝塚	貝塚	縄文	269	金地山松林寺跡	寺社	近世・近代	565	蒼園山願行寺	寺社	中世
204	宝成就寺跡	寺社	中世	270	津留中林遺跡	包蔵地	縄文～中世	566	西光寺	寺社	近世・近代
211	高瀬本町通遺跡	包蔵地	中世	399	大坊遺跡	包蔵地	中世	567	大覚寺	寺社	近世・近代
212	保田木貝塚	貝塚	縄文	415	下小田・下屋敷遺跡	包蔵地	弥生	568	永徳寺	寺社	近世・近代
213	保田木城跡・高瀬町奉行所跡	城館	中世・近世	417	上堂前遺跡	包蔵地	中世	569	延久寺	寺社	近世・近代
214	高瀬山清源寺跡	寺社	中世	418	古川遺跡	包蔵地	弥生・中世	570	明教寺	寺社	近世・近代
217	高瀬川床遺跡	包蔵地	縄文～中世	439	寺田本村遺跡	包蔵地	弥生・古墳	571	光浄寺	寺社	近世・近代
219	岩崎原遺跡	包蔵地	弥生・古代	440	寺田山口遺跡	包蔵地	縄文・弥生 古代・中世	572	妙法寺	寺社	近世・近代
221	岩崎城跡	城館	中世	482	柳町遺跡	集落	古代	623	船島官軍本営跡	水制	近世・近代
226	松林寺山古墳	古墳	古墳	**483**	**玉名平野遺跡群**	**包蔵地**	**縄文～近世**				

第３章　調査の方法と成果

第１節　１次 調査の方法と成果

１　調査の方法

（１）調査グリッドの設定

発掘調査はグリッド法を用いた。グリッドは平面直角座標に準じた 5m × 5m グリッドを設定し、（X，Y）＝（-7150,-40310）を基点とし、南北方向をアルファベット北から南に A ～ H を割り振り、東西方向は算用数字を用いて、西から東に 1 ～ 14 を割り振り、「アルファベット - 算用数字」をグリッド名とした。標高値は東京湾平均海面（TP）を基準として実施した。

（２）　調査区の設定と調査の手順

調査区は現道を挟むため、県道から北側を１区、南側を２区とした。まず、表土、近世以降の造成土を重機にて除去した。その後、人力による遺物包含層の掘削を行った。今回の調査では遺構面が３面予測されていたため、その３面で遺構の検出を行った。

今回の調査は水田を確認することを主目的としたので、水田遺構である畦畔状遺構の検出及び耕作土・鉄・マンガンを含む土壌を確認することを目標として調査を実施した。

（３）　記録

遺構の記録作業は、調査の各段階において実施した。実測作業のなかで、基本土層はオルソ画像から図化作業を行った。個別遺構は手実測のほかに光波測距儀を用いて行い、遺構平面図、土層断面図について縮尺 1/20 で作成した。個別の遺構実測の中には、古人骨の出土状況等必要に応じて縮尺 1/10 で実測図を作成した。

遺構名は『発掘調査のてびき』（文化庁　2010 年）に基づき下記の遺構記号を付加し、遺構記号の後にそれぞれの遺構ごとに「01」から順次遺構番号を付けて表記した。今回は１区・２区に分かれるためそれぞれの区で遺構番号を振った。遺構記号及びそれに対応する遺構の種類は以下のとおりである。

SD：溝　SI：竪穴建物　SJ：甕棺墓　SK：土坑・土坑墓　SX：不明遺構　P：柱穴・ピット

記録写真は、デジタルカメラを使用して、県調査員の指示のもと随時撮影を行った。使用した機材は「Nikon D610・810」である。写真データは RAW 形式及び JPEG 形式データ で保存した。

その他に調査の状況に応じて空中写真撮影を２回実施した。

第２節　１次１区の調査

１　１区基本層序

玉名平野遺跡群１区で古代及び弥生時代の遺構面３面の調査を実施した。近世の造成土により中世の遺構面は削平されている。１区の基本層序は第３図の層序となっているが、Ⅲ -1 層の下は場所によってはⅢ -2 層、Ⅳ -1 層、Ⅳ -2 層を確認している。調査対象は１面目のⅢ -1 層上面で遺構が不明確だったため、遺構が確認できる深さまで掘り下げて検出を行った。

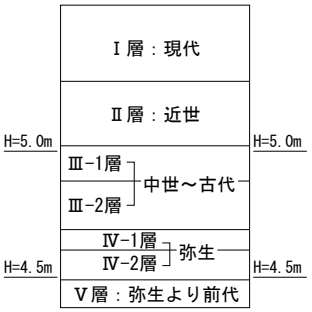
２面目はⅢ -2 層、Ⅳ -2 層上面で遺構の検出を行った。３面目はⅤ層上面で遺構の検出を行った。その結果、弥生時代の遺構は竪穴建物１棟、溝１条、土坑３基、甕棺墓１基、柱穴、小穴を複数確認した。

Ⅰ　層：暗褐色土（10YR3/3）
　　表土　現代

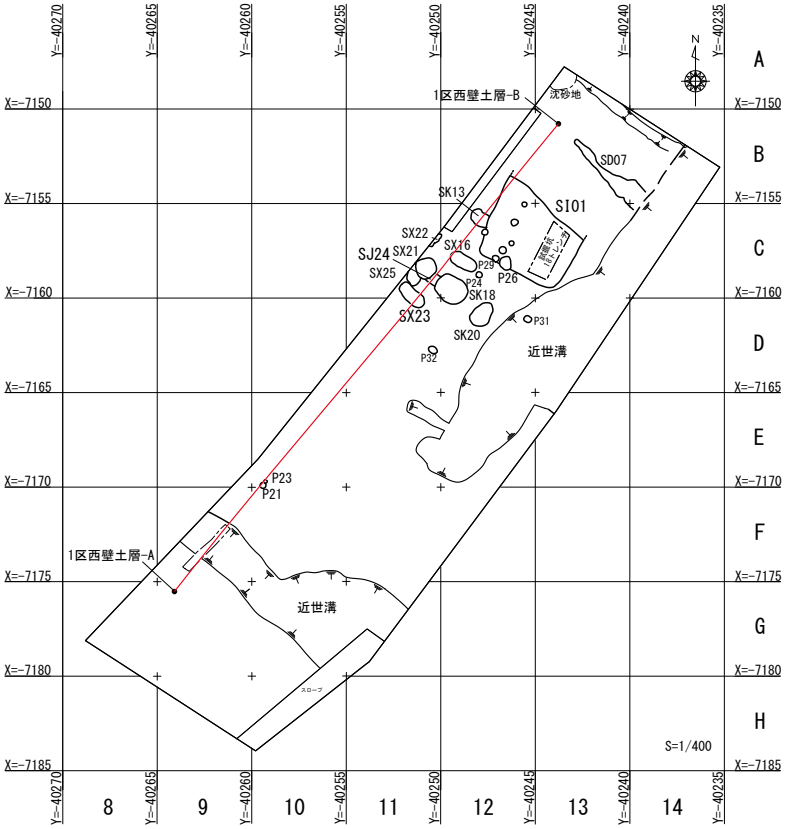
Ⅱ　層：褐色土（10YR4/6）
　　近世造成土

Ⅲ -1 層：にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）　しまりあり、粘性あり
　　古代～中世の遺物包含層

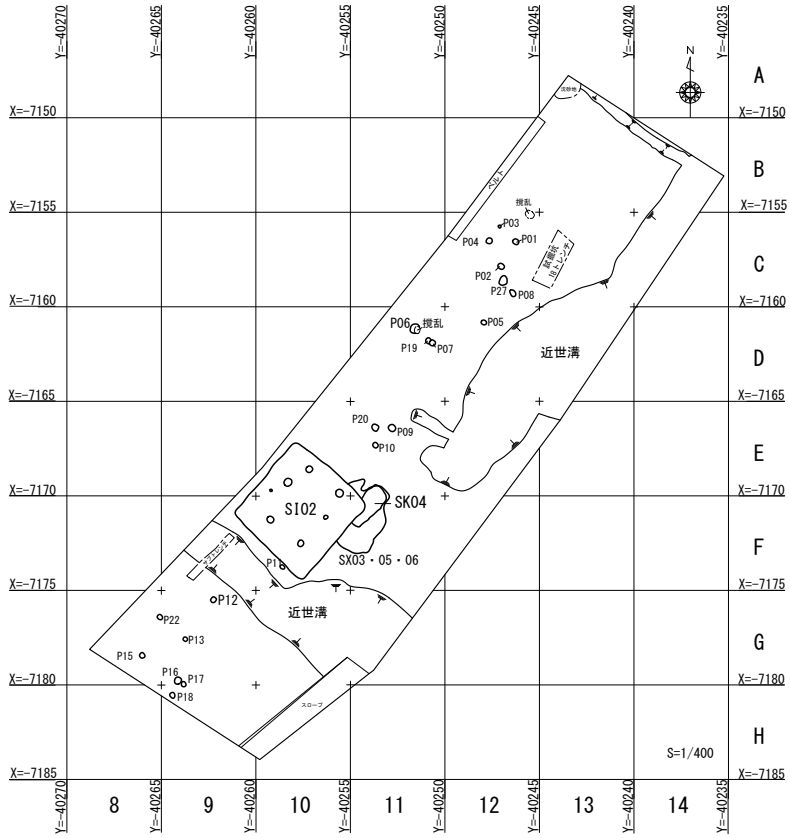
Ⅲ -2 層：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）　しまりあり、粘性あり
　　古代の遺物包含層



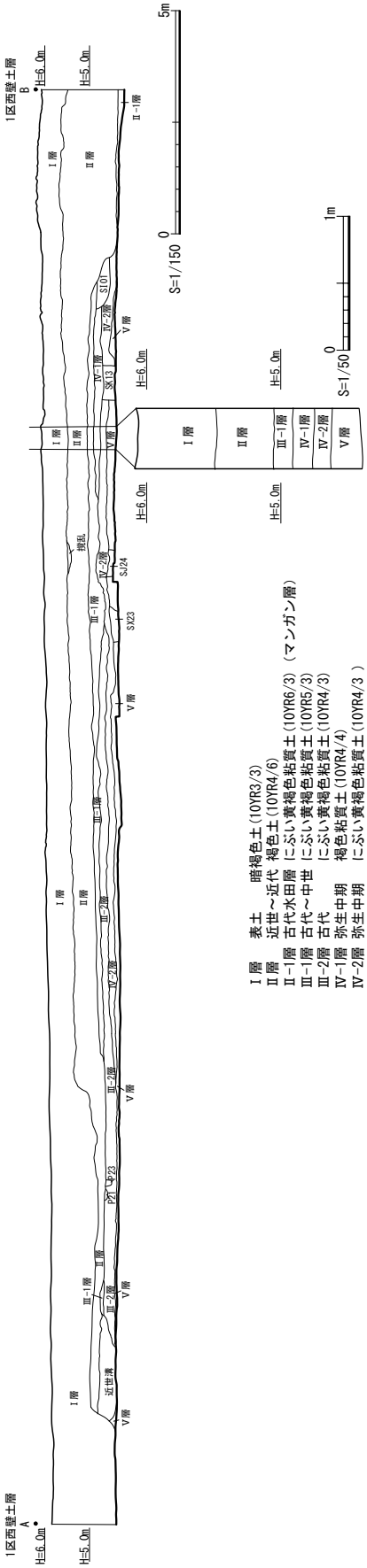
第３図　１区基本層序



玉名平野遺跡群Ⅰ区　弥生中期～後期



玉名平野遺跡群Ⅰ区　近世～古代



第４図　１区遺構配置図・土層断面図

Ⅳ-1 層：褐色粘質土（10YR4/4）　しまりあり、粘性あり
　　弥生時代中期～後期の遺物包含層
Ⅳ-2 層：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）　しまりあり、粘性あり
　　弥生時代中期の遺物包含層
Ⅴ　層：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　しまりあり、粘性あり　無遺物層

1 区の北側では土地の落ち込みがみられ、Ⅱ層の下層（Ⅱ-2 層）では鉄及びマンガンを多く含む層がわずかに残存しており近世の水田が存在していたと考えられる。1 区北側からそれ以北の 2 次調査の調査区は菊池川の後背湿地となり水田が営まれる。また、1 区南側には溝が入り、その南側の 2 区とさらに南に連なる 2 次調査 6 トレンチで水田が見られ 1 区から落ち込んだ地形になる。1 区の中央部分だけが微高地で他の調査区の土層と様相が異なる。

2　1 区遺構及び遺物

調査 1 区の地形は北側と南側が下がっており、中央部が台地状に高くなっている。その高い部分において主に弥生時代と古代の遺構が検出された。主な遺構としては古代の竪穴建物・土坑墓、並びに弥生時代の竪穴建物・甕棺墓を検出した。

【弥生時代】

竪穴建物 SI01（第 5・6・7 図）

1 区の北側で、近世の土層（Ⅱ層）が下方に落ち込む斜面に接した箇所で確認したのが竪穴建物 SI01 で、Ⅳ-1 層上面で検出した。

Ⅱ層は竪穴建物の北側で落ち込み、遺構を削平している。竪穴建物 SI01 の南側では、試掘トレンチ跡があり、柱穴の全容は不明である。南北の軸が 27°東に傾く。残存している部分での規模は長軸 4.94m、短軸（残存値）4.44m を測る。検出面から床までの深さは 0.26m を測る。

柱穴は、北側に 4 基確認しているが、うち P3 及び P4 の 2 基が主柱で、他は副柱と思われる。対になる場所は試掘トレンチで消失していたが、もとは 4 本柱と考えられる。床面上では硬化面と南西隅で深さ 0.06 mの深さで長径 1.14 m、短径 0.62 mの土器だまりを検出している。硬化面下には 0.14 mの深さの掘り方を確認した。

遺物は、Ⅳ-2 層の遺物と同時期のものが多く、土器片が多量に出土している。器種は甕が多く、高坏や器台も出土している。1 は器台である。2 は高坏の杯部で、脚部は欠損している。口縁の断面は鋤形で、丹塗りを施している。3 は高坏の脚部で、杯部が欠損している。 4・5 は黒髪式土器の甕である。口縁断面形は鋤形で、口縁下に 1 条の沈線がめぐる。4 の脚部は細く、底部は浅い上げ底である。6 は石包丁片で、竪穴建物の硬化面の下から出土した。

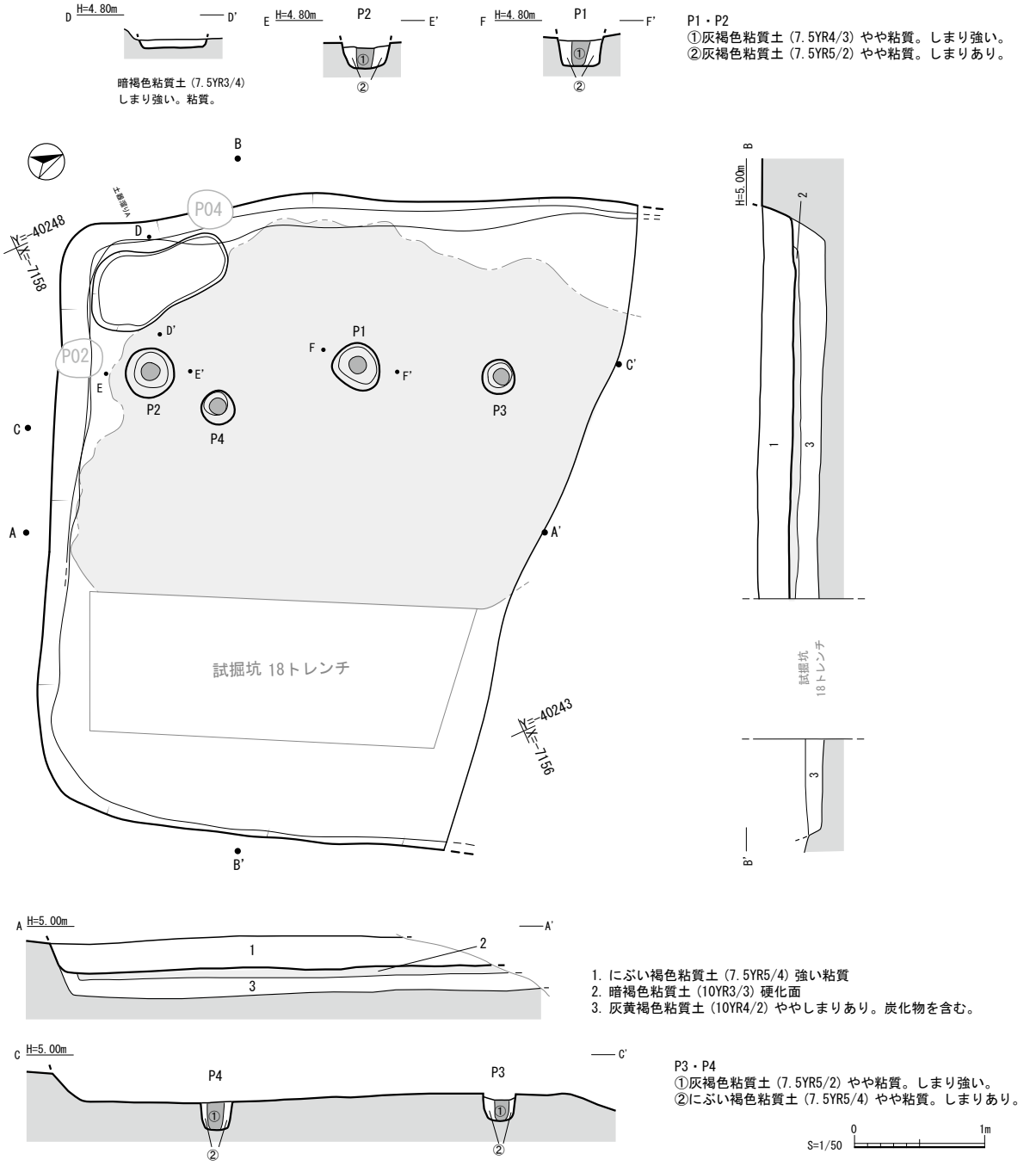
甕棺墓 SJ24（第８・９図）

1 区のⅣ-2 層下面で、土坑 SK18 北壁の底面に近い位置で検出した。また遺構北側上層には土坑 SX21 がある。竪穴建物 SI01 の南西隅から 1.8 m程西側に位置する。土坑の平面形状は遺構の切り合いで全容は不明だが下端の形状から楕円状または隅丸方形状と思われる。規模は長軸約 1.20m、短軸約 0.58m を測る。埋土は単層である。深さは 0.86 mを測る。

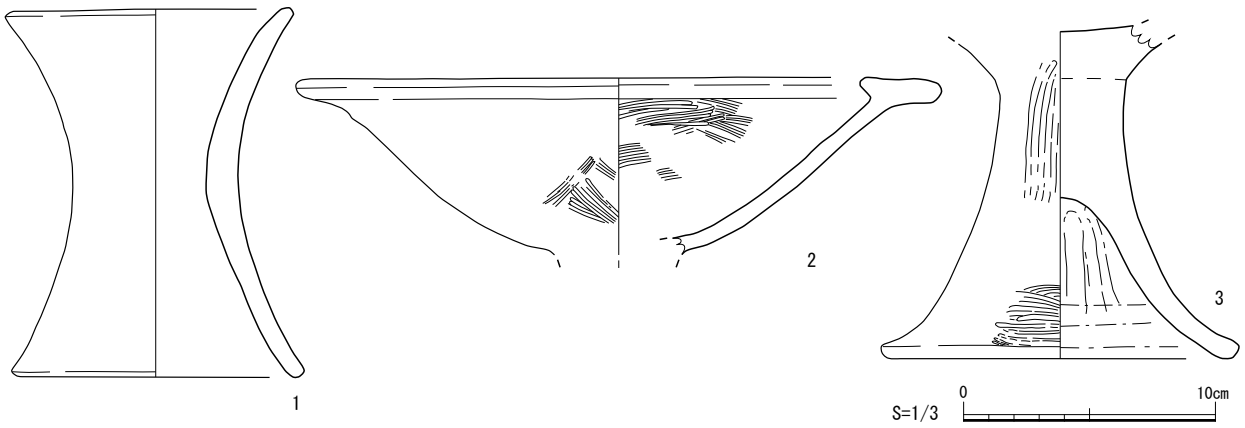
甕を合わせた甕棺で、土圧でつぶれた状態だがほぼ完形で出土した。甕棺内は埋土で満たされており、頭骨片及び四肢骨片が下甕の口縁近くで確認できた。人骨片の殆どは棺底で確認したが一部は甕棺埋土内で検出している。頭骨片が四肢骨片の近くにあり、出土状況は解剖学的位置関係を保っていない。また自然科学分析の結果、この人骨は性別不明で生後 6 ヶ月から 9 ヶ月の乳児であった。

また、 人骨以外に甕棺とは別の土器片や鳥骨が一緒に入っていた。確認した鳥骨は焼けていた。

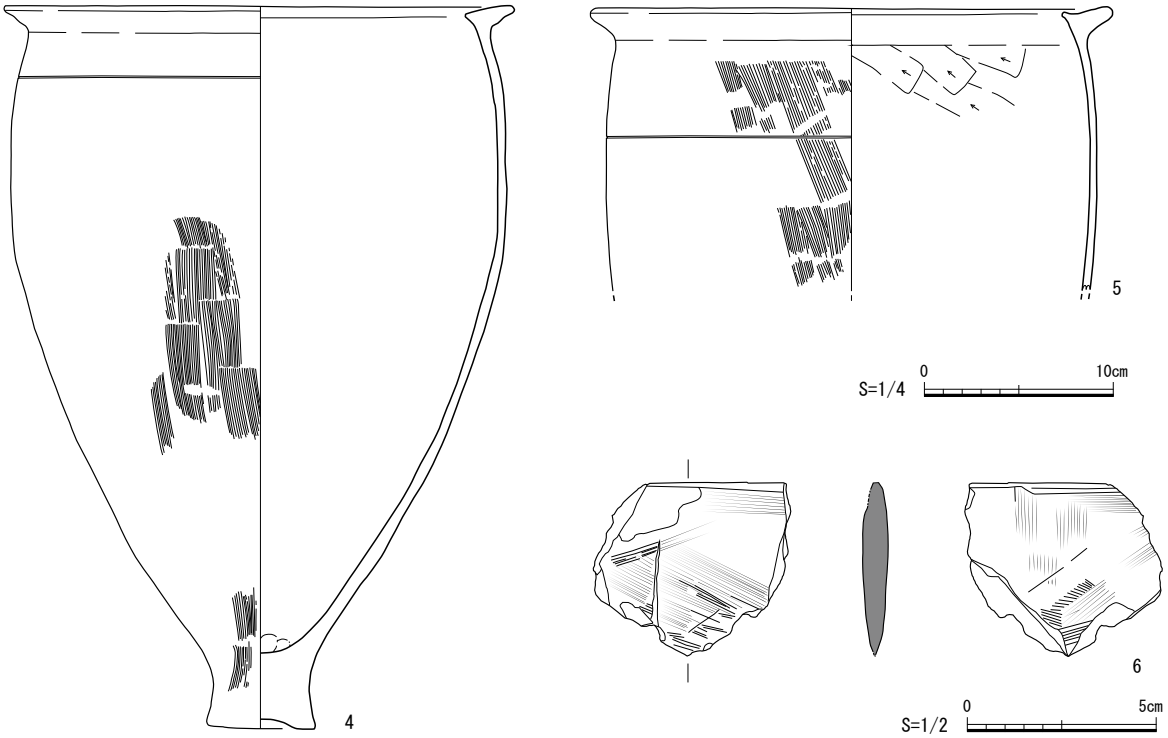
甕棺は、7 が上甕で器高 42.5cm、8 が下甕で器高 41.3cm とほぼ同じ法量の甕を合わせている。甕棺はどちらも黒髪式の土器で、口縁断面が鋤形、口縁下に 1 条の沈線が入る。脚部は細く、底部は上げ底である。



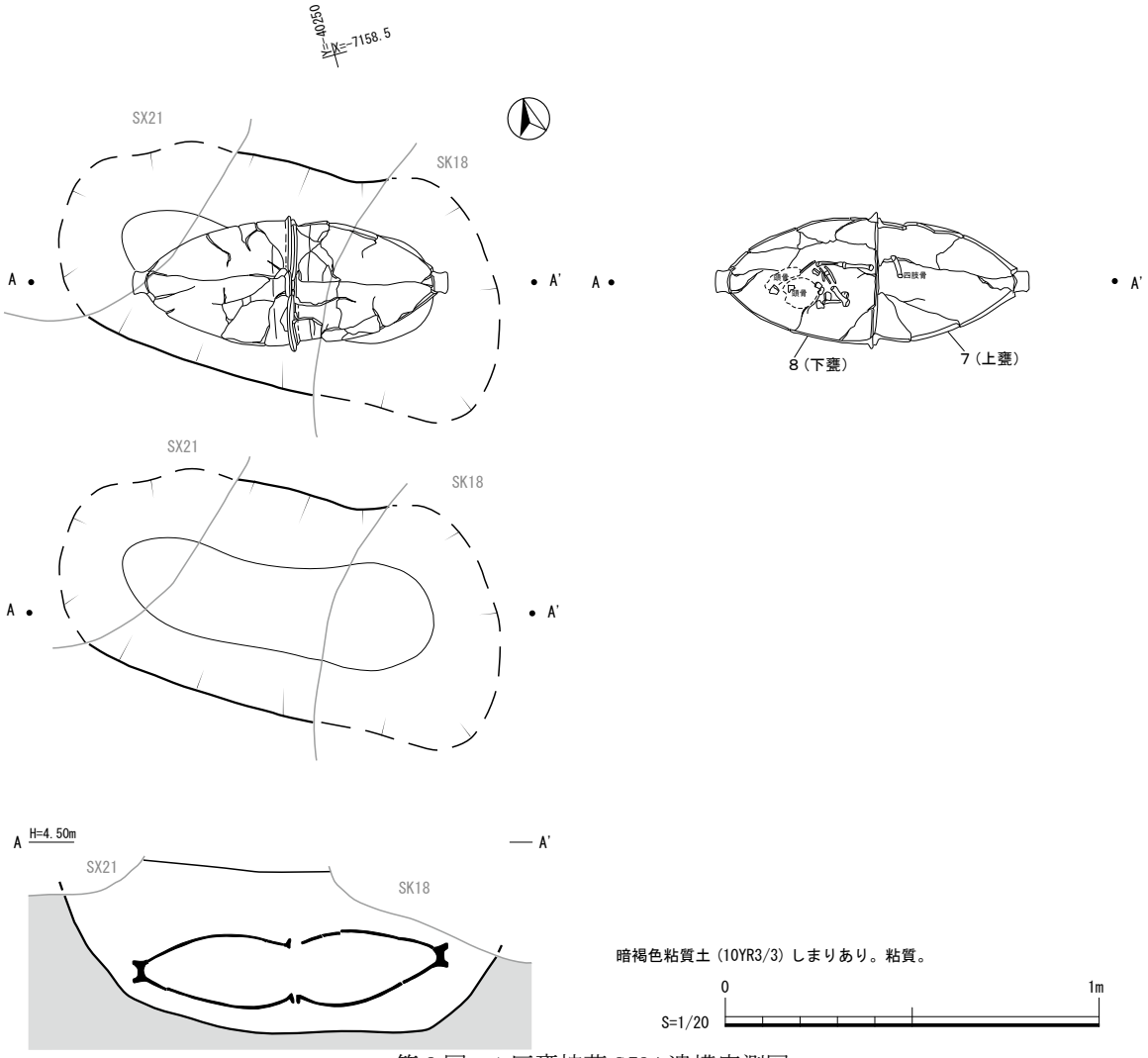
第５図　１区竪穴建物 SI01 遺構実測図



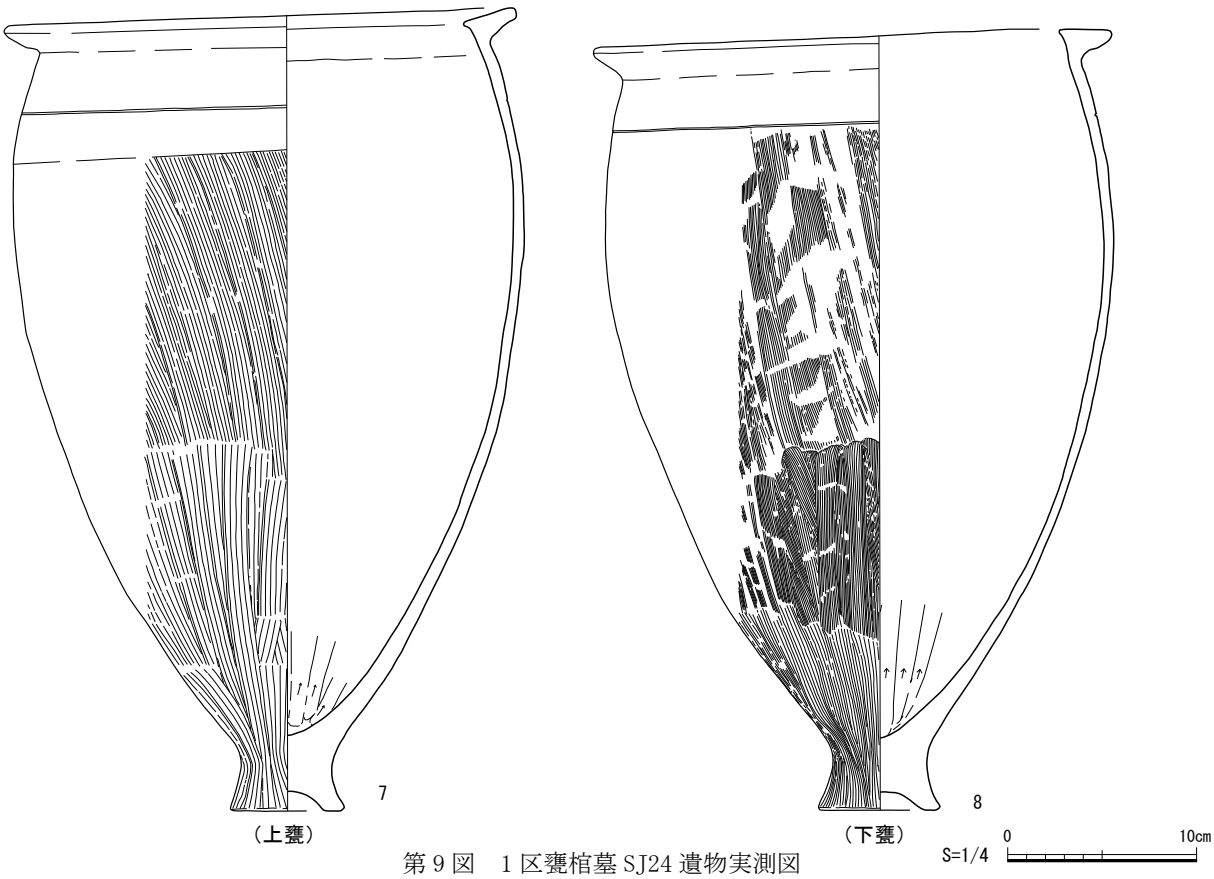
第６図　１区竪穴建物 SI01 遺物実測図 -1



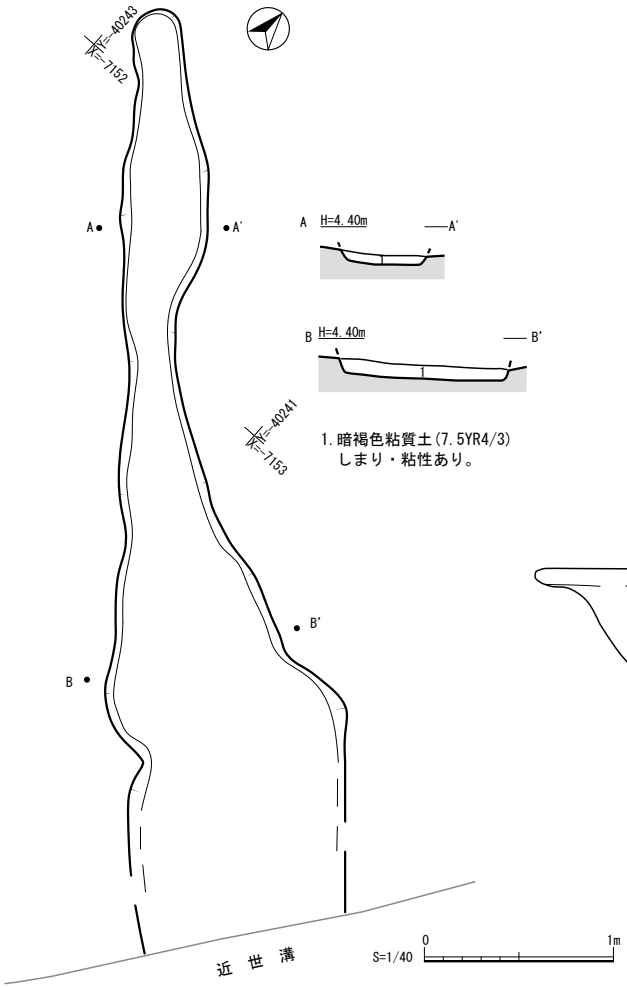
第 7 図　1 区竪穴建物 SI01 遺物実測図 -2



第 8 図　1 区甕棺墓 SJ24 遺構実測図



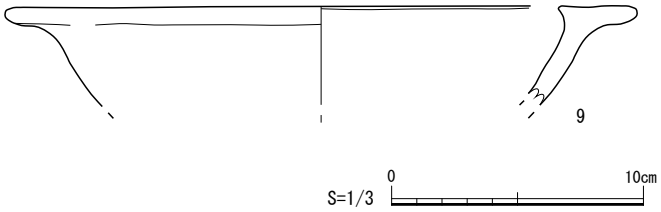
第 9 図　1 区甕棺墓 SJ24 遺物実測図



溝 SD07（第 10 図）

1 区のⅤ層上面で検出した。幅は北側で 0.37m、南側で 1.14 mを測り、南に向かって広がる。底面までの深さは北側で 0.04m、南側で 0.06m と南側が若干下がる。北から南に向かって流れていたものと思われる。

Ⅳ-2 層が弥生土器の包含層であり、SD07 の埋土にも包含層と同時期の遺物が含まれていた。9 は高坏の口縁の一部である。赤彩を施す。



第 10 図　1 区溝 SD07 遺構・遺物実測図

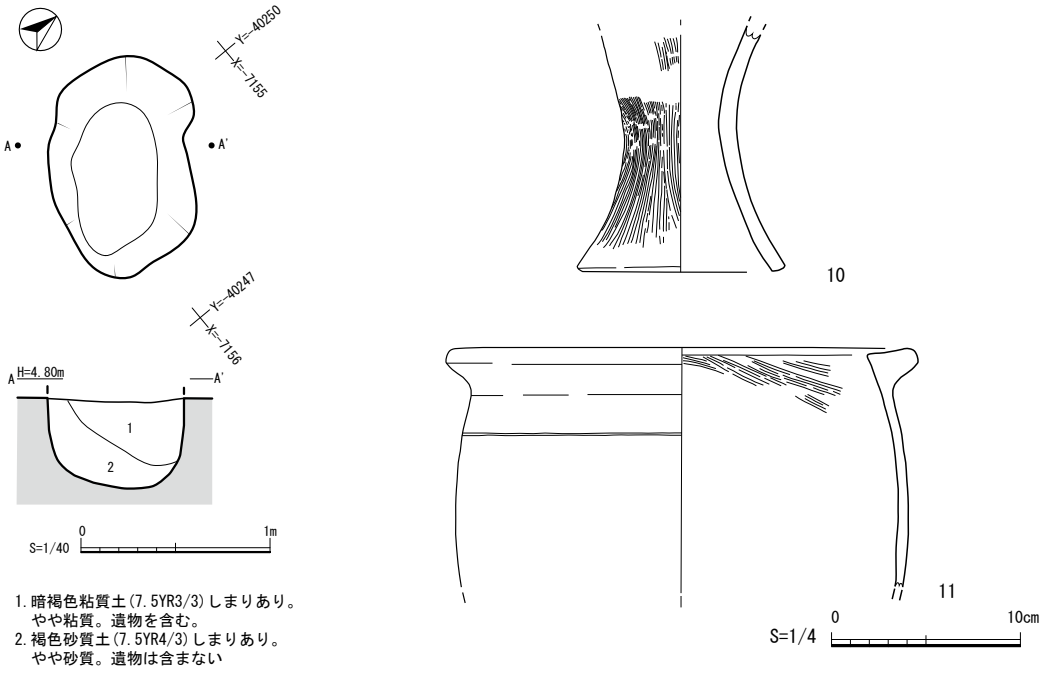
土坑 SK13、土坑 SK18、土坑 SK20（第 11・12・13・14 図）

土坑 SK13・土坑 SK18・土坑 SK20 は 1 区北側 C・D-12 グリッドで検出した。SK13 はⅣ-1 層下面で検出し、平面形状は楕円形を呈し、長径 1.16m、短径 0.74 m、深さ 0.46m を測る。SK18 と SK20 はⅣ-2 層で検出し、平面形状は楕円形を呈する。SK18 の長径は 1.72m、短径 1.3 m、深さ 0.3m を測る。SK20 の長径は 1.43m、短径 0.81m、深さ 0.25m を測る。

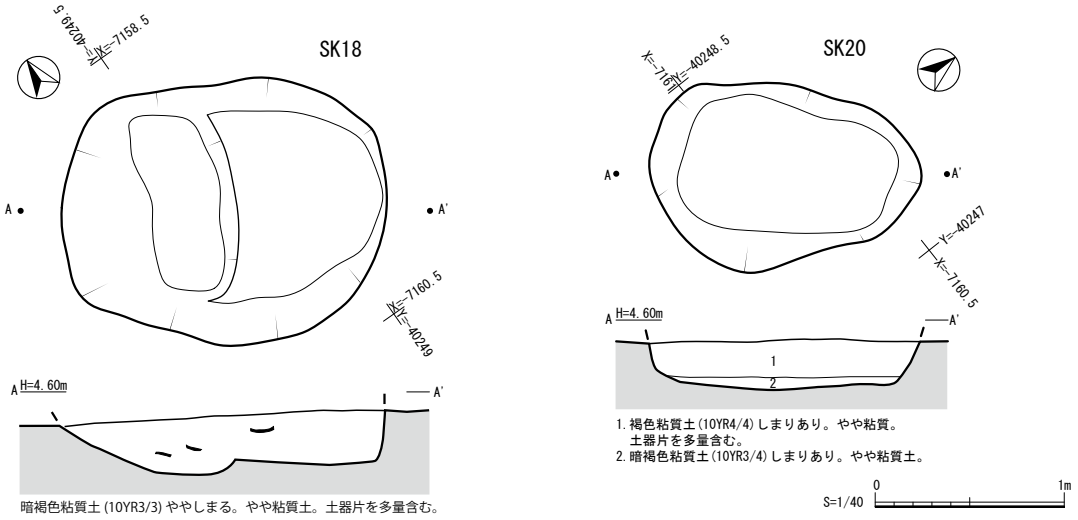
SK13 で土器片が出土しているが完形のものはない。10 は器台である。11 は甕の口縁部である。口縁は厚く、口縁下に 1 条の沈線がめぐる。

SK18 から甕や鉢が出土した。12・13・14 は鉢である。12 の胴部は丸みを帯びて立ち上がる。赤彩を施す。13 は底部が平底でやや外に開きながら立ち上がり、肩部で丸みを帯びて内傾する。口縁は欠損していて形状は不明である。14 の口縁断面は鋤形をしており、口縁部に穿孔が 4 箇所見られる。底部は平底で焼けた痕がある。15・16 は甕である。口縁部の断面形は鋤形で、口縁端部は上方にしゃくれ上がる。15 は口縁下の胴部に 1 条の沈線がめぐる。

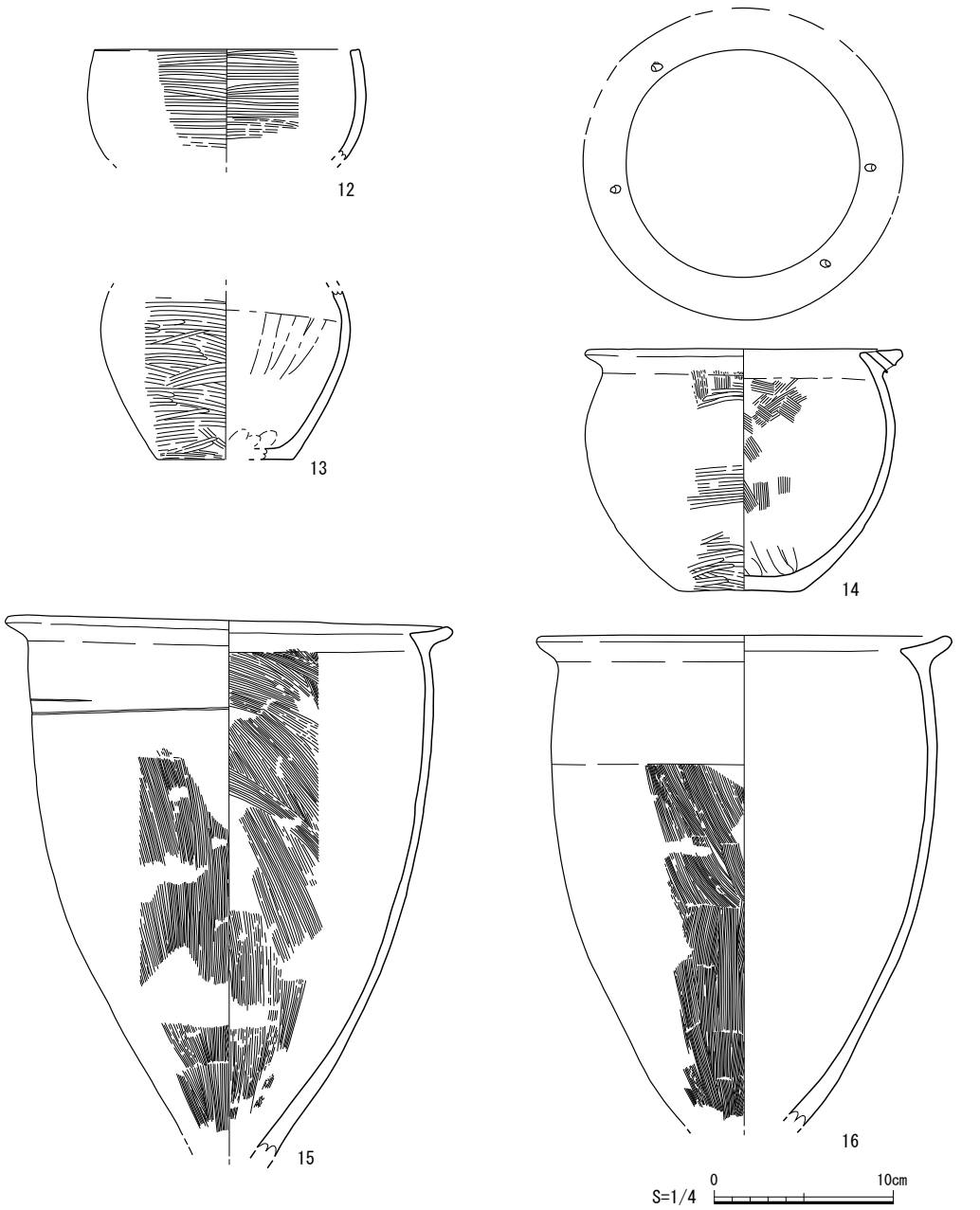
SK20 からは弥生時代の土器片が出土しているが、完形のものはない。17 ～ 19 は甕の口縁部である。口縁の断面は鋤形をしている。



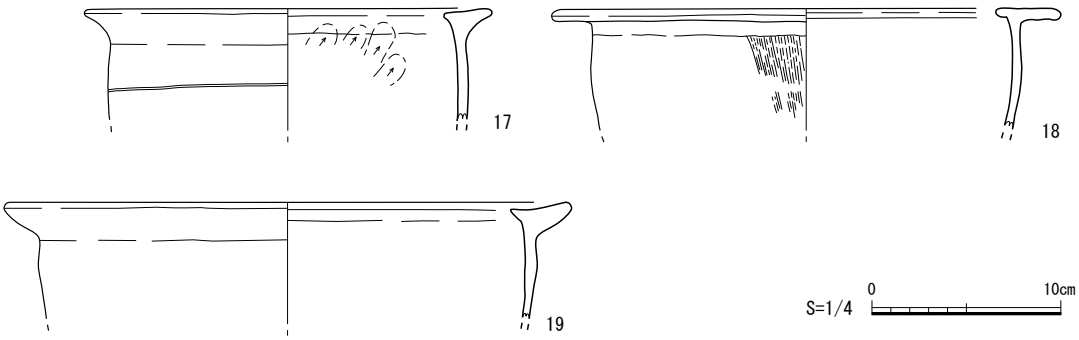
第 11 図　1 区土坑 SK13 遺構・遺物実測図



第 12 図　1 区土坑 SK18・SK20 遺構実測図



第 13 図　1 区土坑 SK18 遺物実測図

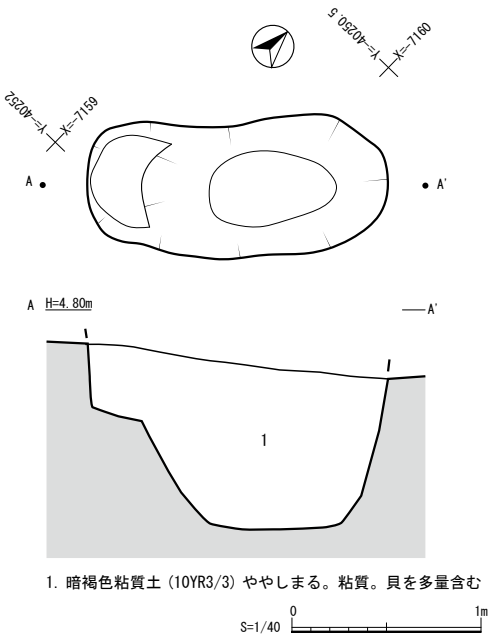


第 14 図　1 区土坑 SK20 遺物実測図

不明遺構 SX23（第 15 図）

1 区のⅣ-2 層下で検出した。甕棺墓 SJ24 の西側に位置する。長径が 1.57m、短径 0.67 mの楕円状に広がり、深さ 0.88m を測る。

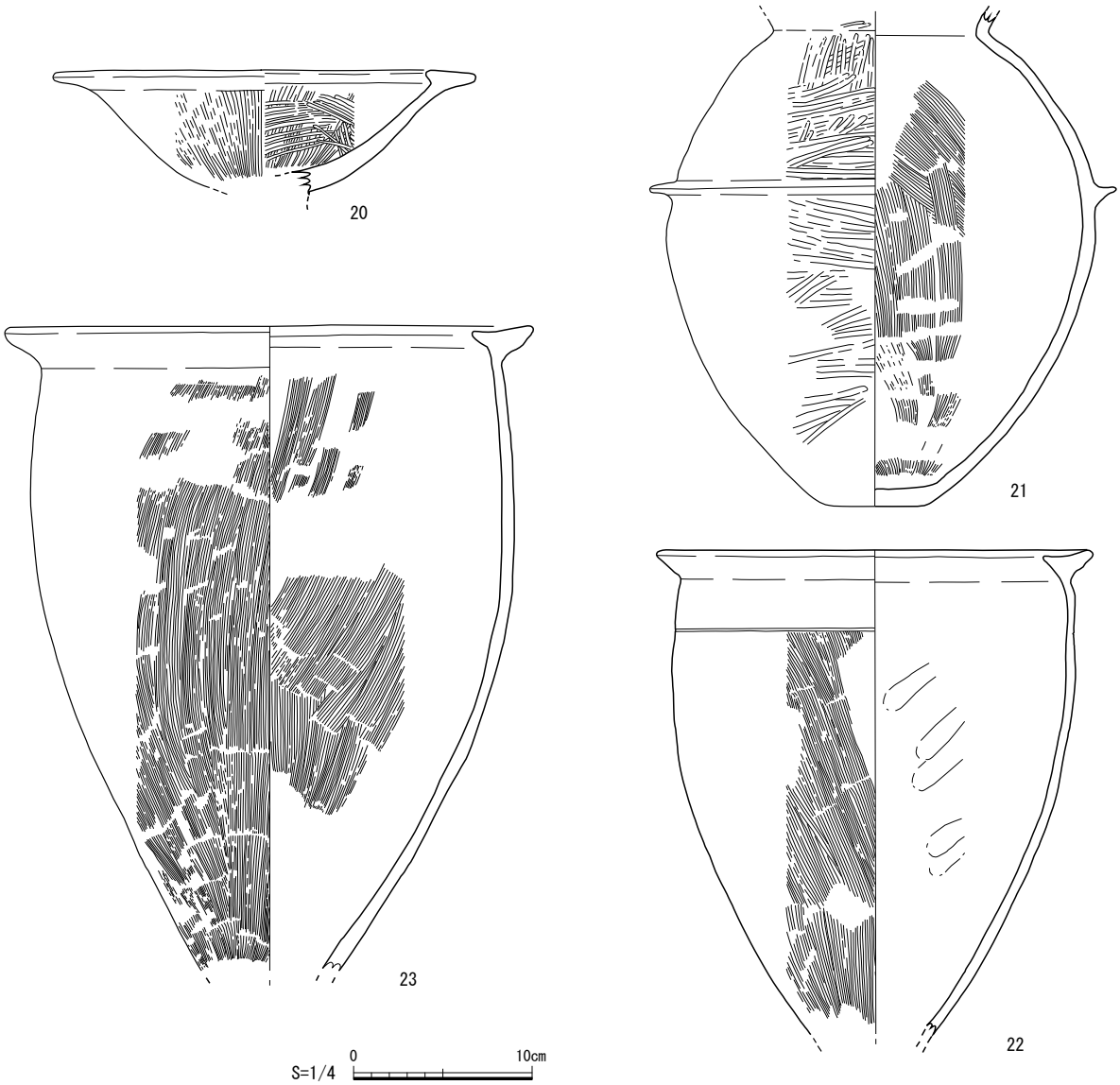
土層は混貝土を埋土とする土坑である。埋土からは、貝のほかに土坑 SK18 出土の土器片と接合する土器片が出土している。20 は高坏である。脚部は欠損していた。21 は壺である。胴部中央よりやや上部に 1 条の突帯をめぐらす。底部はやや丸みのある平底である。22 は甕で、SK18 及びⅣ-2 層出土の土器と接合した。鋤形の口縁断面で、口縁下に 1 条の沈線がめぐる。脚部は欠損している。23 も口縁断面が鋤形の甕である。沈線はなく、脚部は欠損している。



不明遺構 SX25（第 16 図）

1 区のⅣ-2 層下で検出した。SX25 は SX21、SX23 に切られた状況で検出し、遺構は調査区外に延びるため、全容は不明だが平面形状は円形状と思われる。径 1.2m、深さ 1.1 mを測る。

貝を多量に含む。弥生時代の貝は古代に比べ種類が少なく汽水か



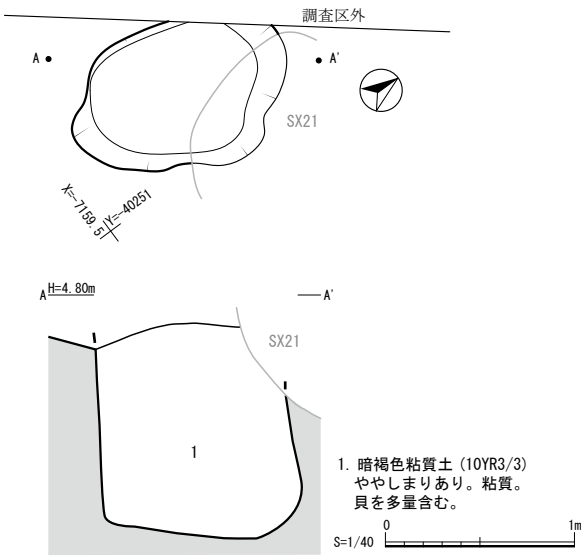
第 15 図　1 区不明遺構 SX23 遺構・遺物実測図

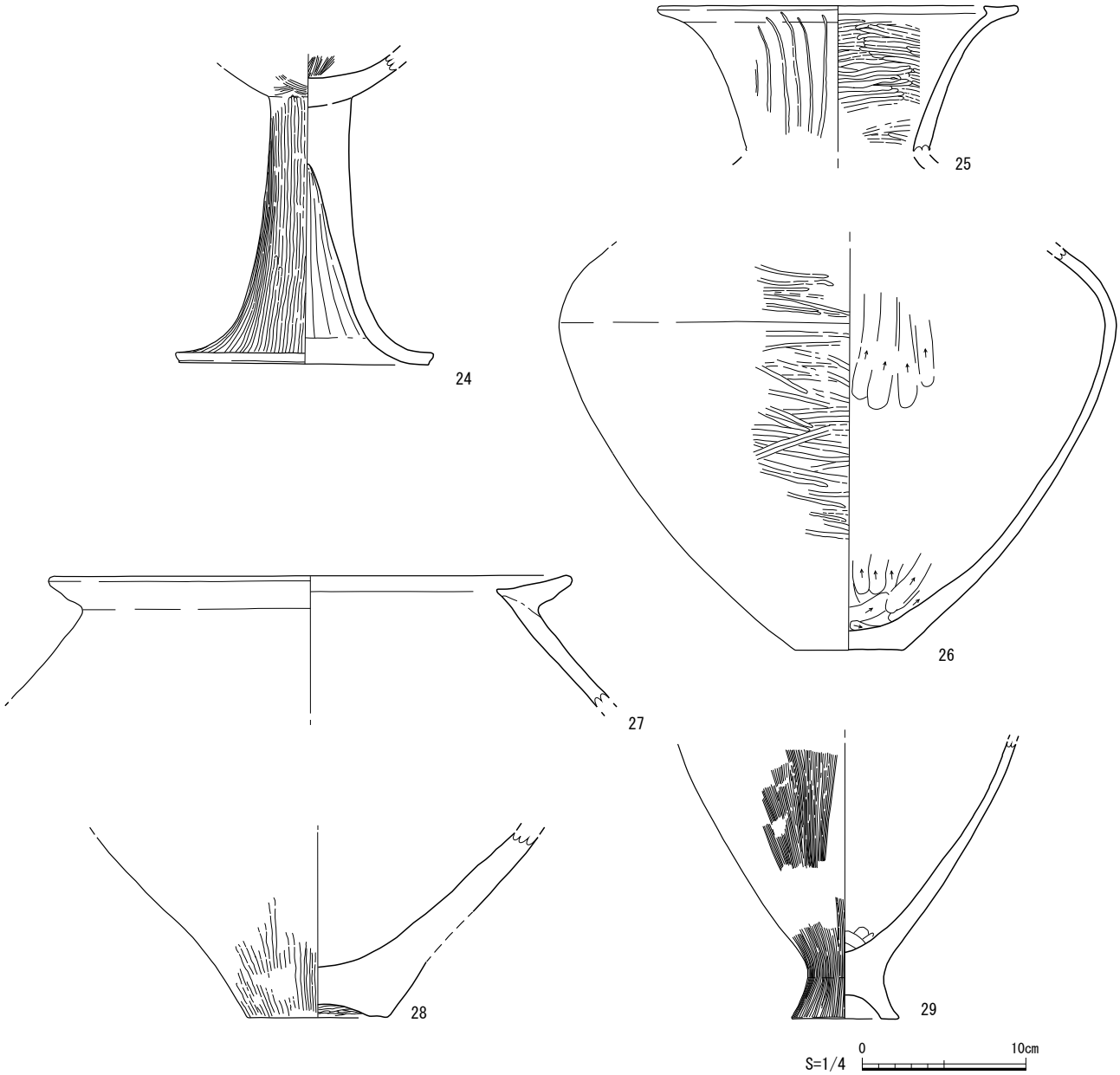
ら塩水の貝類が出土し、マガキやハイガイ、ハマグリ等の二枚貝、ウミニナやキサゴ等の巻貝が出土している。

埋土は他の遺構に比べ水分が多く、シルト質で粘性が強い。下層ほどシルト質が強く、最下面は砂質土で水が湧き出している。

下層には土器が含まれ、その上に混貝土層が堆積している。混貝土層の貝の中にはベンガラが付着した貝もある。

土器は甕、壺、高坏が含まれる。24 は高坏の脚部である。25 は壺の口縁部で、口縁断面形が鋤形をなす。26 は壺の胴部から底部で平底である。27・28 は同一個体の甕で口縁部と底部である。29 は甕の底部である。底部は浅い上げ底になっている。



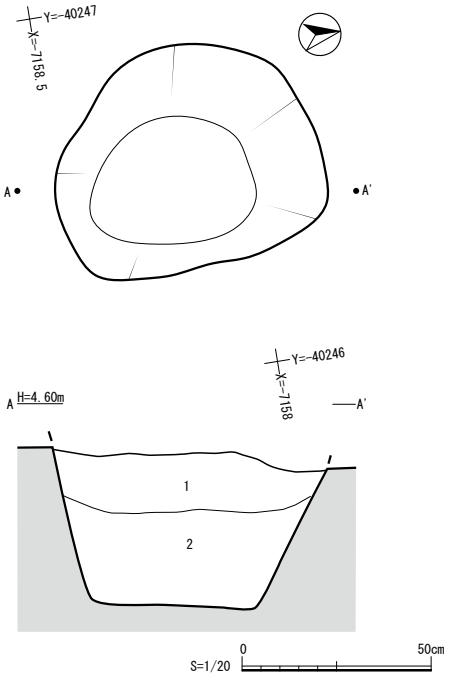


第 16 図　1 区不明遺構 SX25 遺構・遺物実測図

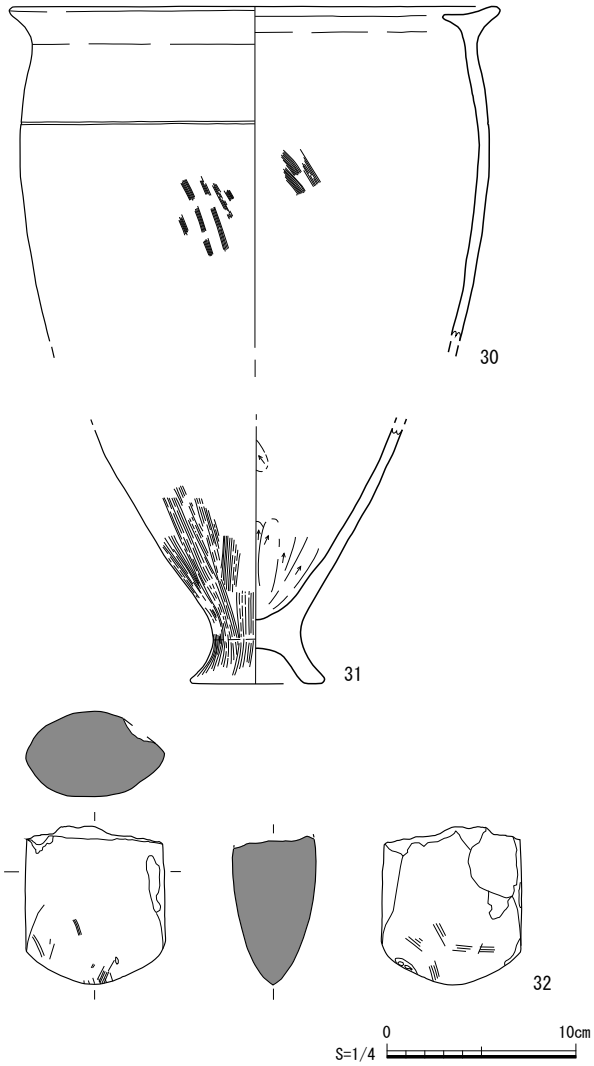
柱穴 P26（第 17 図）

1 区のⅤ層上面で検出した。

遺構内から弥生時代中期の甕が出土した。30 の口縁部は鋤形の口縁をしていて、口縁下に 1 条の沈線がめぐる。31 は底部で脚は細く、浅い上げ底である。32 は磨製石斧の刃部である。



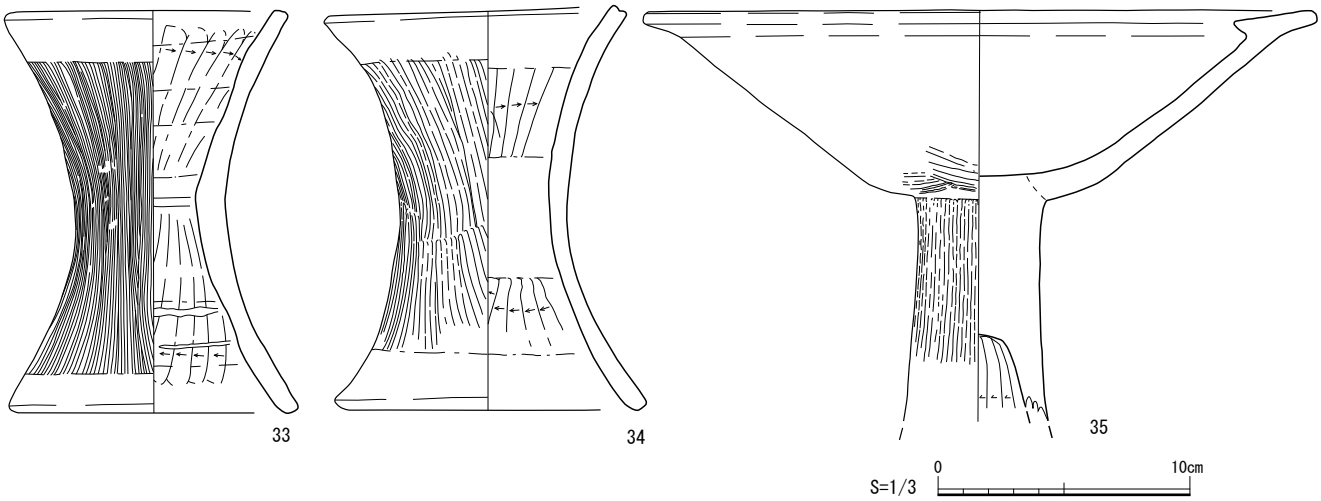
1. 暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。やや粘質土。
土器片含む
2. 暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり強い。粘質。
床面で遺物出土。



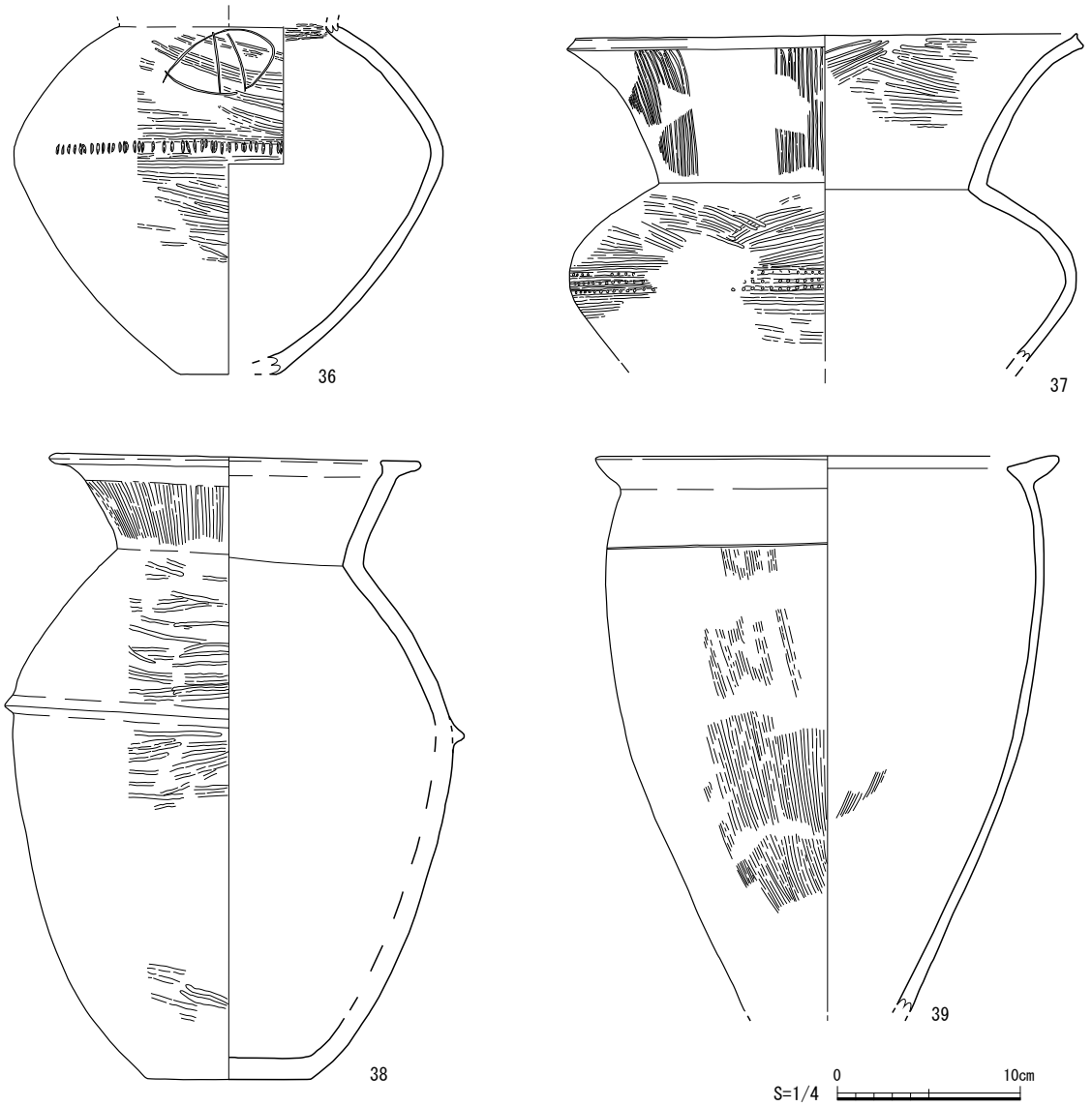
第 17 図　1 区柱穴 P26 遺構・遺物実測図

1 区Ⅳ -2 層（第 18・19 図）

1 区Ⅳ -2 層は弥生土器の包含層で、多量の弥生土器が出土する。



第 18 図　1 区Ⅳ -2 層遺物実測図 -1



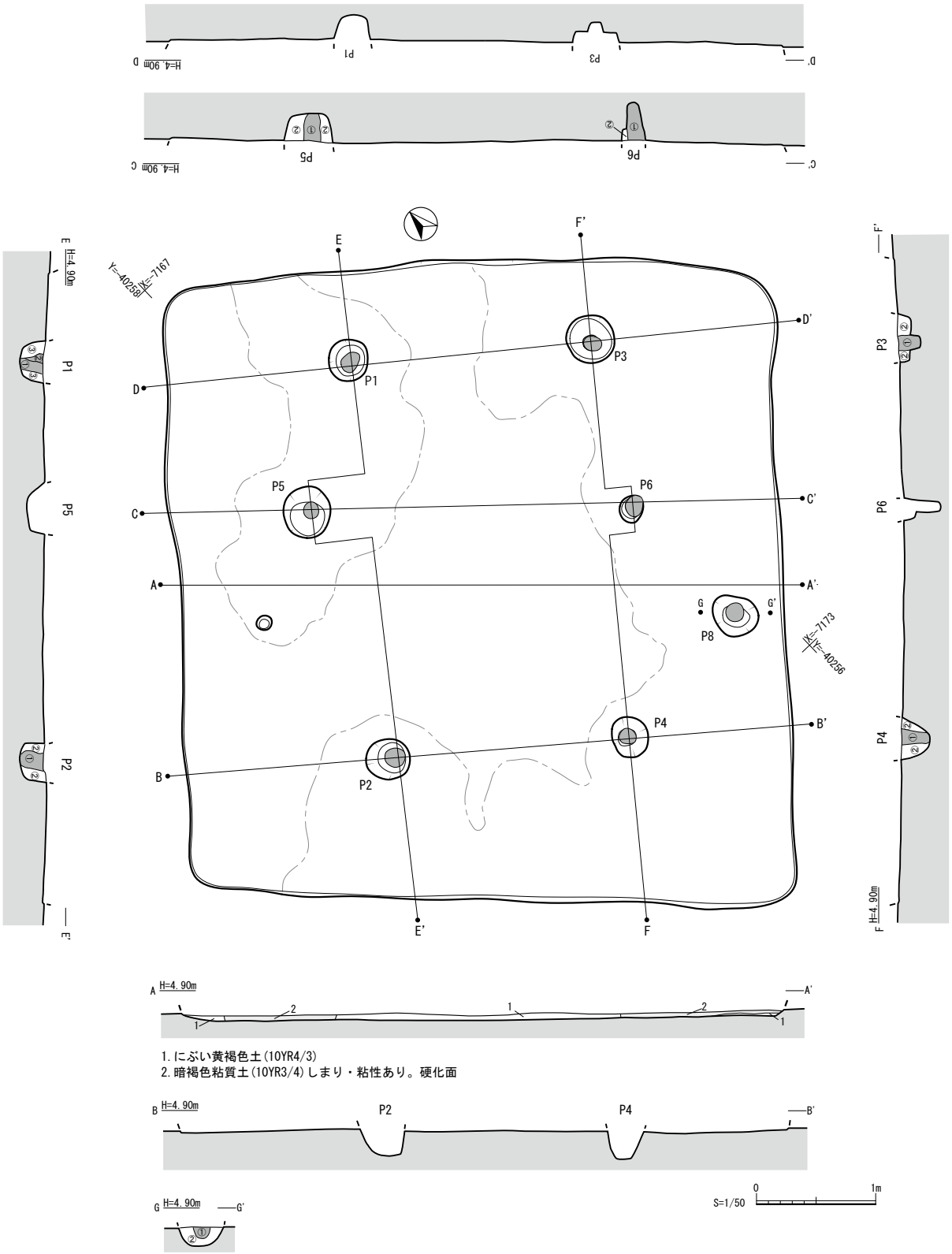
第 19 図　1 区Ⅳ -2 層遺物実測図 -2

【古代】

竪穴建物 SI02（第 20・21 図）

1 区 E・F-10 グリッドのⅢ-1 層上面で検出した。竪穴建物は近世の削平により遺構のほとんどが消失しており、硬化面及び柱穴から竪穴建物と推定している。残存していた竪穴建物の深さは 0.03 ～ 0.04m と浅かった。平面形は正方形を呈し、規模は長軸 5.35m、短軸 5.06m を測る。柱穴は 8 基で長軸側に 4 本の柱穴を 2 列に配置する。主柱となる 4 本の柱穴の深さはそれぞれ、0.2m（P1）、0.22m（P2）、0.18m（P3）、0.24m（P4）であった。炉跡は確認できなかった。

遺物は土師器の杯、須恵器の杯、壺等が出土している。残存具合の良好なものはない。40 は土師器の杯である。41 ～ 45 は須恵器である。杯の底部はいずれもヘラ切り離しである。41 は杯で、底部から口縁に向かって大きく開く。42 の内・外面には火襷が入る。42 は後述する他の遺構の混貝土層、土坑墓 SK04 から出土した土器と接合する。43・44 は杯で高台が付く。44 は竪穴建物の柱穴 P3 から出土している。45 は須恵器の壺で、底部外面に同心円紋のタタキ痕がある。内外面が赤みを帯びている。



P1 ①にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)しまり強い。粘性あり
②暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり・粘性あり。
③褐色粘質土(10YR4/4)しまり・粘性あり

P2 ①暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。粘性あり。
②暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり・粘性あり

P3 ①暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。粘性あり。一部貝を含む。
②暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり強い。粘性あり。一部貝を含む。

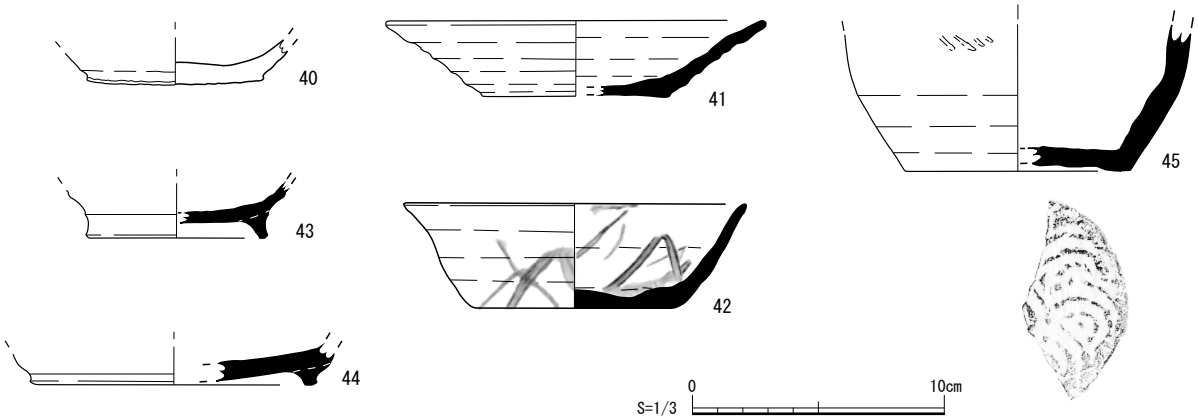
P4 ①暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。粘性あり。
②暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり・粘性あり

P5 ①暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。粘性あり。
②暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり・粘性あり

P6 ①暗褐色粘質土(10YR3/4)しまり強い。粘性あり。
②暗褐色粘質土(10YR3/3)しまり・粘性あり

P8 ①灰褐色粘質土(7.5YR4/2)しまりあり。やや粘性。
②にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)しまり・粘性あり

第 20 図　1 区竪穴建物 SI02 遺構実測図



第 21 図　1 区竪穴建物 SI02 遺物実測図

混貝土層（第 22・23 図）

混貝土層を土坑墓 SK04 の上位で検出した。平面は南側に開いた馬蹄形で南北方向に 3.8 m、東西方向に約 2.86 mを測る。西側と東側に貝が多く見られる箇所がある。

混貝土層の出土遺物では土師器と須恵器の杯が出土した。混貝土層の東側から出土した土器に 46・47・48 がある。46 は土師器の杯で、底部に高台が付き、胴部から口縁まで直線的に外に広がる。器高は低い。47・48 は須恵器の杯である。47 の底部には板状圧痕が認められ、底部はほぼ未調整である。48 には火襷の痕跡が残る。

混貝土層の西側から出土した土器に 49・50 がある。49 は須恵器の杯で、50 は須恵器の椀である。

混貝土層の貝類はマガキ、ハマグリが主要なもので、キサゴやウミニナ等の巻貝も多い。貝類以外では、ウシの骨を混貝土層の最下部で確認している。

土坑墓 SK04（第 22・24 図）

土坑墓 SK04 は 1 区のⅣ-1 層下面で検出した混貝土層部の直下から検出した。人骨が残存していた土坑の平面形状は長方形を呈し、規模は長軸 1.74 m、短軸 0.43 m、深さ 0.32m を測る。

土坑墓の中には人骨が残存し、ほぼ全身骨が出土している。頭頂部が上方向を向き、顔面は南西側を向いた仰臥伸展葬の埋葬姿勢であった。自然科学分析の結果、被葬者は年齢が 20 代前半の男性で、身長が 159.1 ㎝であった。

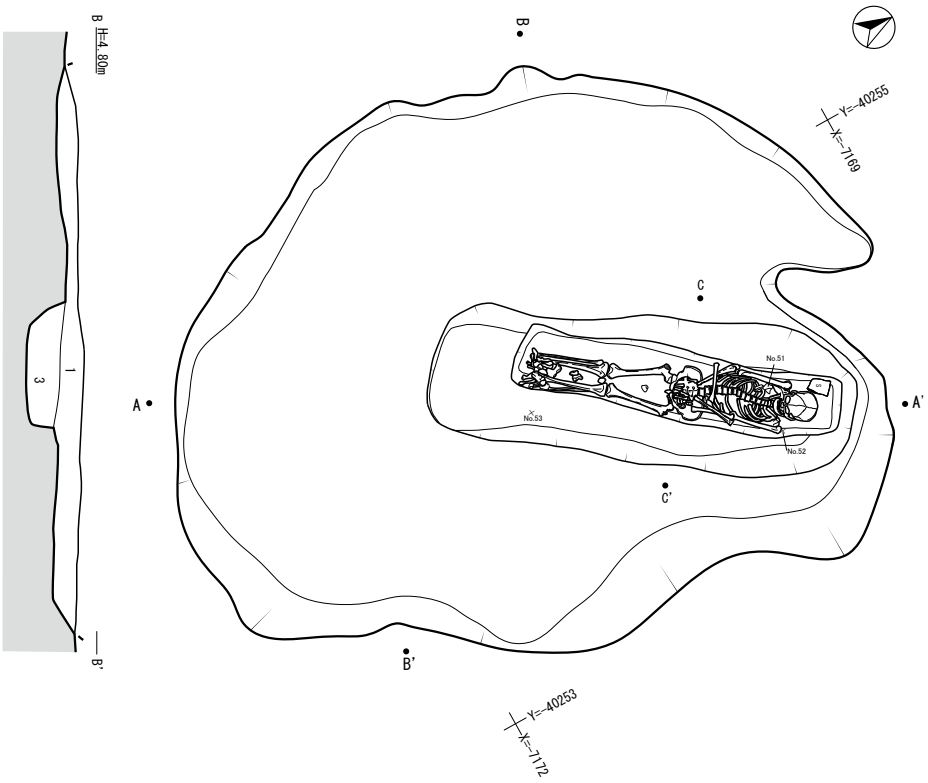
特徴的であったのが、右上腕の近位が顔面部の右横に位置し回内していて、左肩甲骨が顔面部の左側に関節窩を上にして出土している等の上半身の状態である。自然科学分析の結果、上半身を筵などで縛った状況で木棺に埋葬された可能性があることが指摘された。

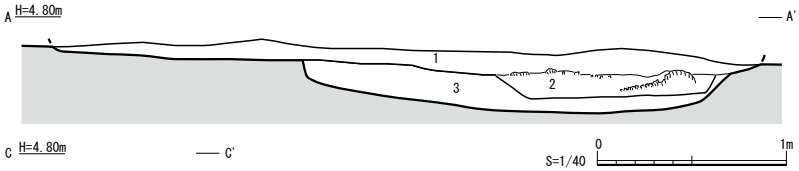
人骨の出土状態及び形態的特徴については、第 4 章自然科学分析に詳しく報告しているので参照していただきたい。

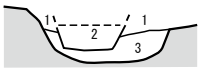
土坑墓で出土した人骨の放射性炭素年代測定を実施した。助骨 2 点を測定し、8 世紀後半～ 10 世紀後半（821-981 cal AD (88.23%)）、と 7 世紀中頃～ 8 世紀後半（658-774 cal AD (95.45%)）の暦年代を得ている。

遺物は右上腕骨付近から須恵器の杯片 51 が出土し、左右大腿骨の間から土師器小片が出土した。51 は底部ヘラ切りで丸みを帯びて立ち上がる坏である。また、L 字に折れた断面方形の釘状の鉄製品が 2 点（52・53）が出土している。52 は左肩近くの上腕骨より 10cm ほど低い位置（L=4.39 m）から出土し、53 は左足から外側に 10cm ほど離れた位置で 52 よりも 15cm ほど高いレベル（L=4.54 m）で出土した。人骨頭部の右上には方形の石が出土した。

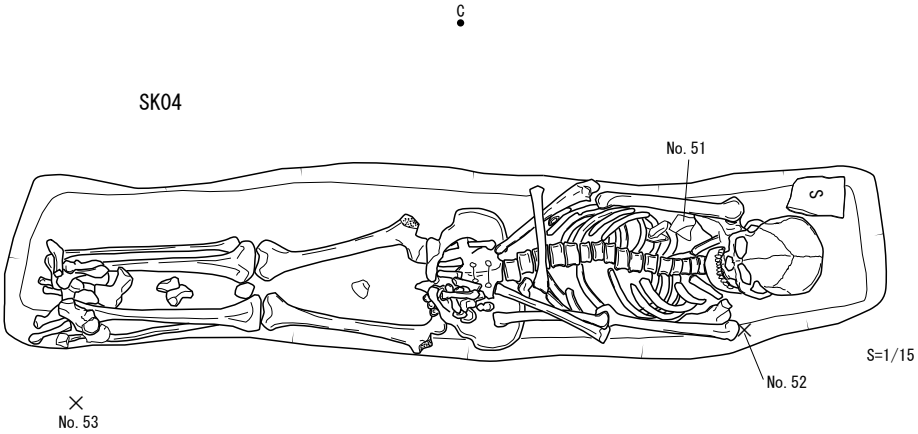
発掘調査の段階で木棺の存在の可能性があるとの指摘をうけ木棺に使われる木製品や土層面での痕跡を調査したが、木棺の痕跡は確認できなかった。



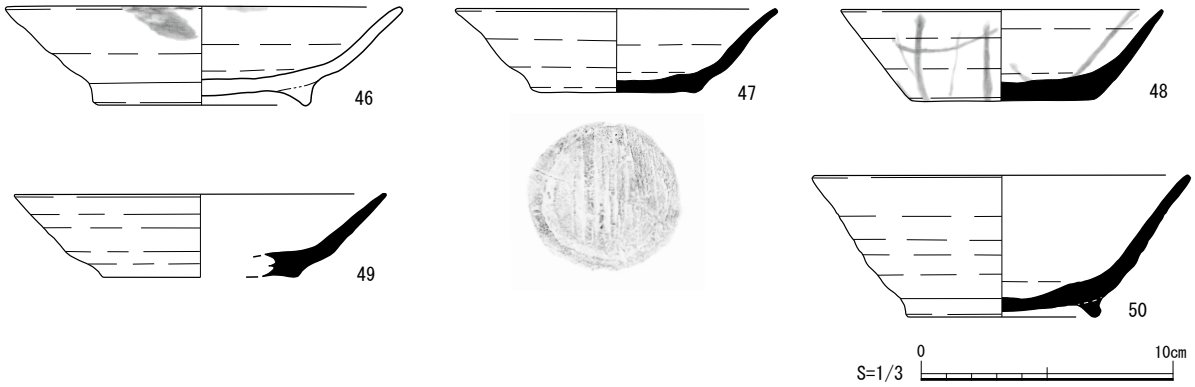




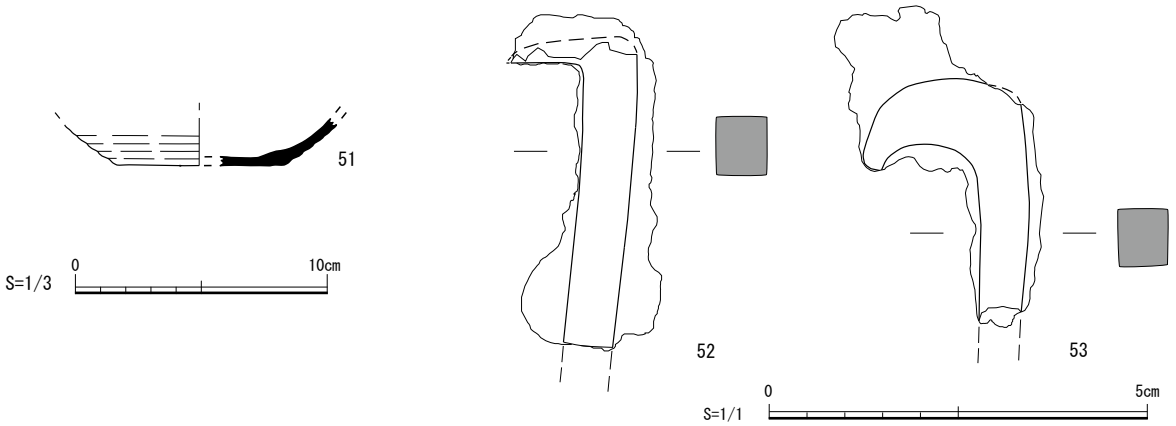
1. 褐灰色粘質土（10YR6/1）しまりなし。やや粘質。（貝層）
2. 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）ややしまりあり。粘質。
3. 褐色粘質土（10YR4/4）ややしまりあり。粘質。１mm程度の炭化ブロックが混じる。（掘り方）



第22図　1区混貝土層・土坑墓SK04遺構実測図



第 23 図　混貝土層遺物実測図



第 24 図　1 区土坑墓 SK04 遺物実測図

3　小結

1 区の調査において、弥生時代の竪穴建物 1 棟、甕棺墓 1 基を確認した。竪穴建物から甕、器台、丹塗りの高坏が出土しており、これら土器群は黒髪式土器で弥生時代中期に比定できる。甕棺墓でも弥生時代中期の黒髪式の小甕 2 基が使用されていた。出土人骨は乳児であった。

古代の遺構としては、竪穴建物 1 棟、土坑墓 1 基を確認した。

竪穴建物は削平を受け、残存部は薄かった。須恵器の杯類が出土しており、9 世紀中葉から 10 世紀前半～中葉のものと考えられる。

土坑墓では残存状態のよい人骨が残っており、20 代前半の男性との所見を頂いている。埋葬施設は木材は確認できなかったが、鉄製品が土坑墓内で発見されていることや貝の流入の状態から木棺墓であった可能性がある。人骨の放射性炭素年代測定を行った結果、7 世紀中頃～ 10 世紀後半の暦年代の範囲に入ることが分かった。

調査 1 区の北側は大きく削平を受けているが、近世の造成土の下層（Ⅱ-1 層）で鉄分やマンガンを含む土壌を確認しており、古代の水田と考えられる。

第３節　１次２区の調査

１　２区の基本層序

（１）２区基本層序

２区は調査区内の表土下に現代の旧耕作土（Ⅰ層）が深さ約 1m まで確認し、その下層で近世の造成土（Ⅱ層）がみられた。Ⅱ層より下位には中世の水田層と古代の水田層を確認した。

Ⅲ-①層では、わずかにマンガンを含む層が残る。この層内では中世の遺物が出土している。

Ⅲ-②～⑨層では、古代の水田層を２面確認した。１面目が（Ⅲ-②～⑤層）、2 面目が（Ⅲ-⑦～⑨層）。また、2 面目の水田層では、畦畔（⑥）を確認している。

Ⅰ層　：暗褐色土（10YR3/3）１～４層に分層される　表土

Ⅱ層　：褐色土（10YR4/6）２層に分層される　近世造成土

Ⅲ層　：水田層（①～⑨）

①層　：黄褐色粘質土（10YR5/6）しまりあり、粘性あり　鉄分を多く含む
中世の水田

②～④層：灰白色粘質土（5Y7/1）しまりあり、粘性あり
古代の水田１

⑤層　：黄褐色粘質土（10YR5/6）しまりあり、粘性あり　鉄分を多く含む
古代の水田１

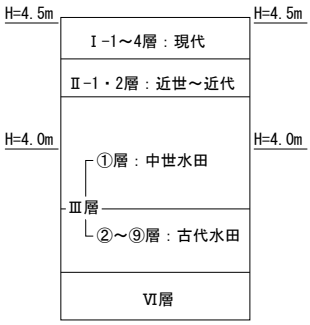
⑥　　：にぶい黄褐色粘質土（10YR6/3）しまりあり、粘性あり
畦畔

⑦層　：明青灰色粘質土（5B7/1）　しまりあり、粘性あり
古代の水田２

⑧層　：黄褐色粘質土（10YR5/6）しまりあり、粘性あり　鉄分を多く含む
古代の水田２

⑨層　：にぶい黄褐色粘質土（10YR6/3）しまりあり、粘性あり　マンガンを多く含む
古代の水田２

Ⅵ層　：にぶい黄褐色砂質土（10YR6/4）　しまりややなし、 粘性なし



第 25 図　２区基本層序

２　２区遺構及び遺物

２区の遺構では溝４条、土坑５基、不明遺構７基、畦畔２条、水田跡を確認した。

２区は１区に隣接した南側にあたるが、１区と異なり集落に関連する遺構は確認できなかった。２区は１区からすると地形が下がった位置にあり、水田に使用されたことが確認できた。

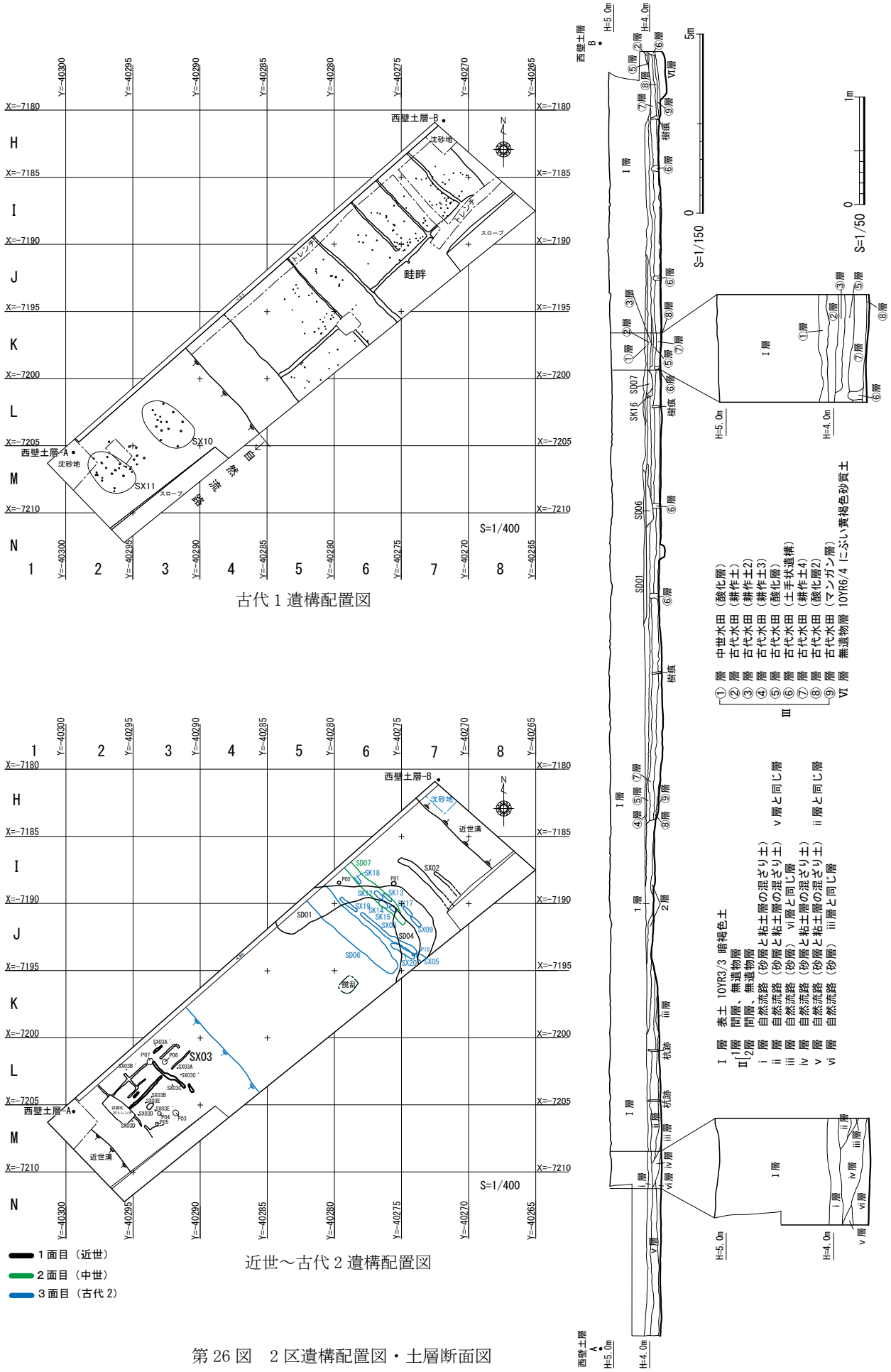
【古代】（第 26 図　古代１遺構配置図）

畦畔

調査区の北側に位置し、Ⅲ-⑤層下面で検出した畦畔は、南北幅約 21 m、東西幅約 9m に及ぶ範囲で確認した。西から東に５条並び、北から南に１条延びているのが確認できた。畦畔は第 26 図の断面図ではⅢ-⑥にあたり、Ⅲ-⑦⑧⑨層（水田）を区切っていた。水田は１区南側の自然流路から２区に向かい水田の高さが下がり、２区の北端では南側に向かって水田の高さが下がっていた。水田の耕作土面では丸味のある粘土の痕跡が多く見つかった。

自然流路

Ⅲ-⑤層上面で検出した。調査区の南側で確認し、北から南に落ち込む。２区の３分の１の広さで確認したが、南側はさらに調査区外に広がる。埋土は上位に砂層と粘土層との混じった土、下位に砂質土が見られた。砂質土を検出した面では、多くの粘土痕を確認した。その中でも杭跡と思われる平面形が円形または角形の粘土痕を２ヵ所（SX10、SX11）で確認した。



古代 1 遺構配置図

近世～古代 2 遺構配置図

第 26 図　2 区遺構配置図・土層断面図

溝 SD06（以下、第 26 図 近世～古代２遺構配置図）

Ⅲ - ④層上面で検出した。確認した溝は、長さ 8.25m、幅 1.8m、深さ 0.18m を測る。溝は北西方向に延び、掘り方は段状を呈する。

【中世】

溝 SD01・SD04

北側のⅢ - ①層上面で検出した溝である。調査区の中央で SD01 は北東側に張り出して彎曲する。SD04 は北側を SD01 に切られ、南側は調査区外に延びる。SD01 の最大幅は 2.25m、最少幅は 0.75 m、深さ 0.08m を測る。SD04 は幅 1.5 m、深さ 0.1m を測る。近世の削平により深さは浅く、西から東にかけて地形が落ち込む。埋土に鉄分、マンガンを含む。

溝 SD07

Ⅲ - ①層下面で検出した溝である。長さ 5m、最大幅 1.18m、最小幅 0.38m、深さ 0.15m を測る。南東に向かって伸び、幅も南東に向かって広くなる。南東部で近世の溝で削平を受ける。遺構内から青磁片（図版 11）が出土している。

畦畔 SX02・SX03

SX02 は 2 区北側 I-7 グリッドに見らる畦畔で 2 列をなす。4.5m ほどの長さが残っていた。

SX03 も畦畔で、2 区南側のⅢ - ①層上面で検出した。調査区の南側に位置し、南北側、東西側それぞれに 3 列の畦畔がみられた。畦畔は近世に削平されており、わずかに残るものが多い。遺構の下では鉄分が多く含まれ、さらにその下位にはマンガンが多く見られた。

3　小結

1 区よりも低い土地にあり、近世～現代にかけての削平が強く影響を及ぼしているが、中世の水田及び古代の水田を確認することができた。中世の水田がⅢ - ①層で、中世以前の水田は大きく上層（Ⅲ - ②③④⑤層）と下層（Ⅲ - ⑦⑧⑨層）とが確認できた。古代の下層の水田面においては畦畔（Ⅲ - ⑥）を確認した。

第４節　２次調査の方法と成果

１　調査の方法

（1）座標設定

発掘調査を行うにあたり、基準点測量及び水準測量を実施した。発掘調査は平面直角座標グリッド法を用いた。標高値は東京湾平均海面（TP）を基準とした。

（2）調査

調査区は事業予定地内に設定した 10 ヶ所のトレンチとした。調査の手法は重機による掘削後、人力で壁面精査を行った。トレンチ番号は北から南に向かって、1 から 10 まで設定した。

このトレンチ調査は玉名平野における条里の区画を確認することを目的に行った。また調査の経過で遺構を検出した際には、出来る限り平面及び土層の記録を行った。水田の有無については畦畔や水田層にできるグライ化した土壌または鉄分・マンガンを多く含む層を確認できることを条件として調査を実施した。

（3）記録

記録作業は、トレンチ配置図、土層断面の実測、平面遺構、遺物出土地点の記録を行った。土層断面の記録は手実測で行い、トレンチ配置図、平面遺構、遺物出土地点の記録は光波測距儀を用いた。遺構平面図及び土層断面図については縮尺 1/10 または 1/20 で作成した。

遺構名は柱穴を P、それ以外の遺構については SX を用いて「1」から順次番号を付けて表記した。今回は事業者の工程進歩の順位により調査の順番がトレンチ順ではないため、各トレンチで遺構番号を振り、SX 番号及び P 番号に分けて行った。

記録写真は、デジタルカメラを使用して、県調査員の指示のもと随時撮影を行った。使用した機材はデジタルカメラ「Nikon D610」である。撮影したデータは RAW 及び JPEG データ形式で保存した。

発掘調査における土層断面図、写真記録、遺物の取上げなどはすべてトレンチ名に基づいて行った。

２　各トレンチの調査

調査したトレンチは北から南に向かって 1 から順に番号を付した。1 トレンチから 4 トレンチまでが 1 次調査 1 区の北側に並び、5 トレンチから 10 トレンチまでが 1 次調査 2 区の南に並ぶ。

玉名平野遺跡群の 1 トレンチから 10 トレンチの調査を行い、水田の場所や過去に起きた水害の痕跡を確認した結果、主に中世から近世で、一部は古代と考えられる水田を検出した。

以下各トレンチについて、報告する。

1 トレンチ

1 トレンチは延長約 70m のトレンチで、土層は 16 層に分層される。水田を確認した層は 7・8 層で近世の水田層、10 ～ 12 層で中世の水田層、13 層で古代の水田層を確認している。

明確な畦畔状遺構は確認できず、土層の堆積状況及び土質の状況から中世の 10・11 層で SX1、SX8、古代の 13 層で SX4、SX5、SX6 の畦畔と考えられる高まりを検出している。また、古代の水田層内には横木と考えられる杭跡（SX3）を確認している。他の遺構では中世のピット状遺構、中世、近世の溝状遺構を検出している。

遺物は土師器と須恵器の小破片が 1 点ずつ 7 層に混じるくらいでほとんど出土していない。

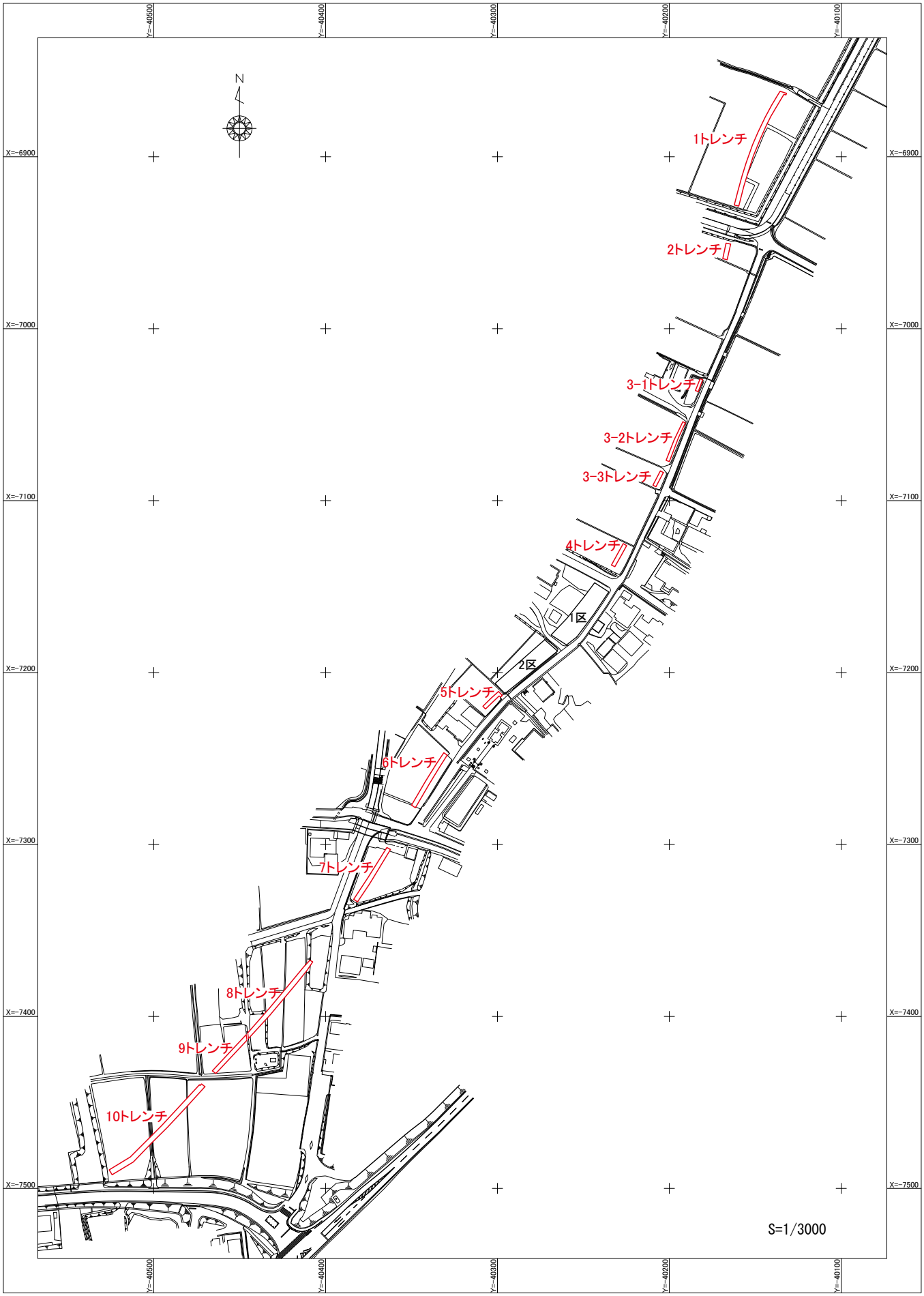
2 トレンチ

2 トレンチは延長約 8m のトレンチで、土層は 11 層に分層される。水田層を確認した 3 層は近世で、6 層が中世と考えられる。

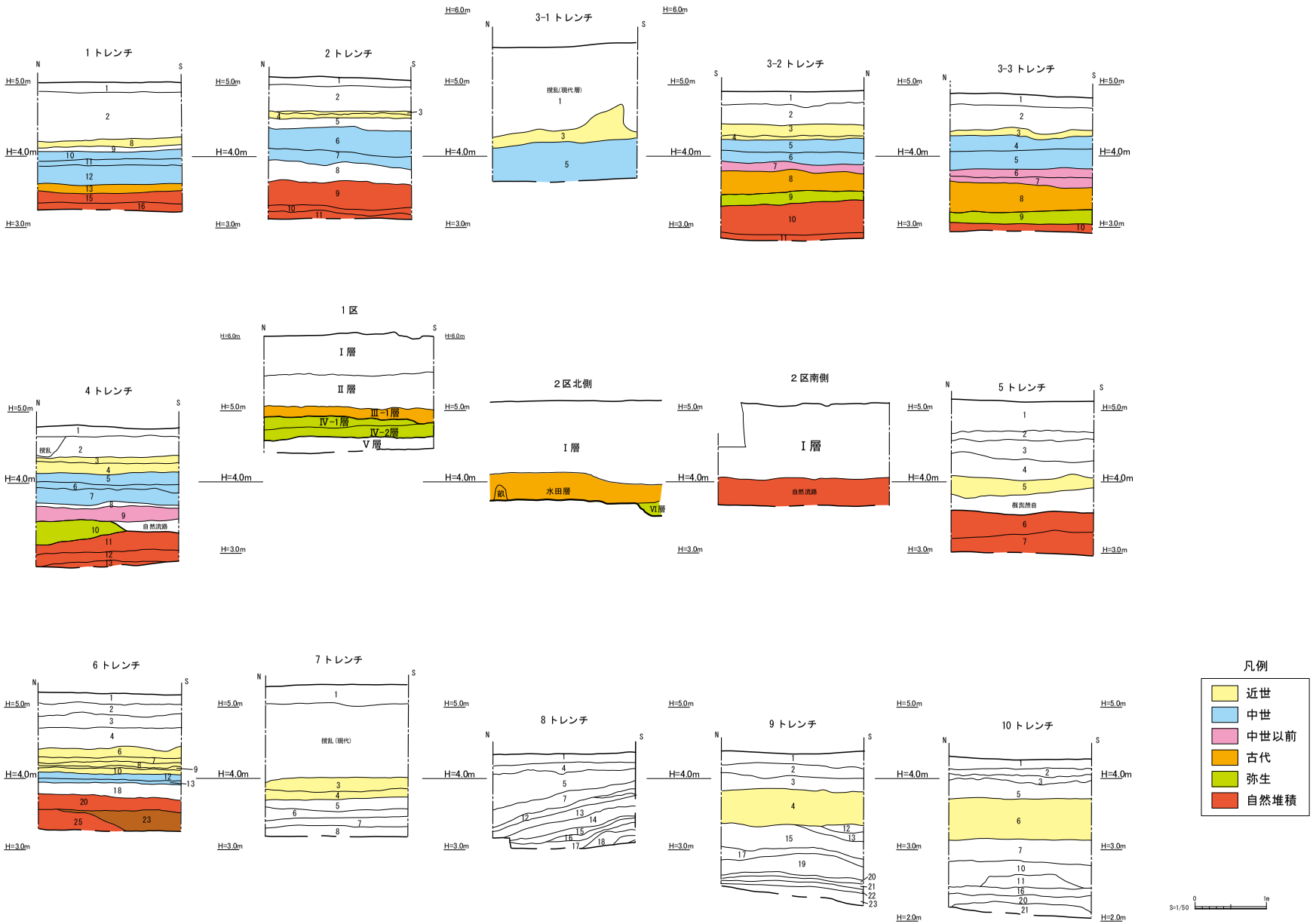
遺物はトレンチ一括で染付小片が 1 点のみ出土している。

3 トレンチ

3 トレンチは住宅や田畑への進入口の確保、汚水管が調査区を横断しているため、3 トレンチを北から 3-1、3-2、3-3 に分けて調査を実施した。



第 27 図　2 次調査 調査区位置図



第 28 図　トレンチ土層柱状図

3-1 トレンチ

3-1 トレンチは延長約 7.8m のトレンチで、土層は 5 層に分層される。トレンチは住宅建築等に伴う撹乱が表土下約 1.4m まで影響を受けている。

3-2 トレンチの土層と比較した結果、3 層は近世、5 層は中世の水田層と考えられる。遺物は出土していない。

3-2 トレンチ

3-2 トレンチは延長約 22m のトレンチで、土層は 11 層に分層される。

水田を確認した層は 3 ～ 7 層で中世から近世の水田層を確認している。SX2・SX3・SX8 の畦畔と考えられる高まりを検出している。他の遺構としては、柱穴（P1・P2）、溝（SX1・SX4）、土坑（SX5・SX6) を検出しているが、正確な時期は不明である。

遺物は 3 層から染付小片 1 点、陶器小片 1 点が出土している。また、摩耗しているが 8 層から古代の須恵器小片 1 点及び 9 層から弥生土器小片が出土している。

3-3 トレンチ

3-3 トレンチは延長約 8.6m のトレンチで、土層は 10 層に分層される。水田を確認した層は 3 ～ 7 層である。SX1 の畦畔と考えられる高まりを検出している。他の遺構では柱穴（P1･P2）、溝（SX2）を検出しているが、遺物を共伴しないため正確な時期は不明である。出土遺物から 8 層は古代、9 層は弥生時代の包含層である。

4 トレンチ

4 トレンチは 1 次調査 1 区の北側に近接する。延長 11.4m のトレンチで、土層は 13 層に分層される。水田を確認した層は 3 ～ 9 層で確認しているが、ほとんど遺物を伴わない。

1 区北側では近世包含層が急激に落ち込み、近世の包含層（Ⅱ層）が下位から確認されている。その標高と一致しているのが今回確認した 4 層で、土質も同じである。このことから 4 層は近世と考えられる。

また、4 層の下位にも水田層を確認している。4 トレンチの 5・6・7 層は、北側の 3-3 トレンチ 4・5 層及び 3-2 トレンチ 5 ・6 の層序と同様のため中世の水田層の可能性が考えられる。明確な畝等の遺構は確認できていない。

弥生時代の包含層を切る自然流路を確認している。遺物は 8 層から甕の口縁部、10 層から器台のどちらも弥生時代の土器片が出土している。

5 トレンチ

5 トレンチは延長約 10.5m のトレンチで、土層は 7 層に分層される。水田層は確認していない。

1 次調査 2 区の南側で検出した近世の溝状遺構及び自然流路の続きを確認している。5 トレンチの 5 層が近世の土層でそれよりも下位は自然流路及び砂層であった。良好な遺物はなく、土師器小片が 4 層に含まれていた。

6 トレンチ

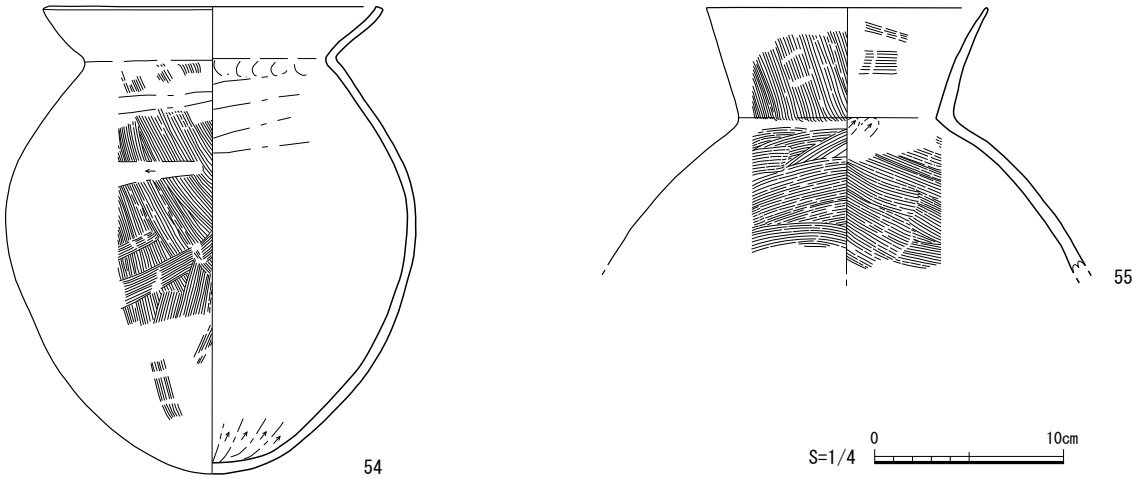
6 トレンチは延長 33.3m のトレンチで、土層は 25 層に分層される。6 ～ 11 層で近世、12 ～ 14 層で中世の水田層を確認している。近世の 9 層で畦畔（SX2）と考えられる遺構を検出している。他には近世の柱穴（P3)、近世以降の溝（SX1）を検出している。

遺物は近世の磁器小片が 8 層及び 9 層から中世の青磁小片が 12 層から、それに古墳時代の甕 1 個（54)、壷 1 個 (55) が、23 層から出土している。54 は古墳時代前期の布留系の甕である。また、14 層から 25 層にかけては水成堆積が見られた。

7 トレンチ

7 トレンチは延長約 33.8m のトレンチで、土層は 8 層に分層される。水田を確認した層は 2 ～ 4 層で、近世の水田層と考えられる。明確な畦畔状遺構は確認していない。近世の水田層は現代の撹乱に削平され、水田層はわずかに残存している。また、近世以前は粗砂を含む砂層であり、河川堆積層と考えられる。

遺物はほとんどなく、近世の水田層（4 層）から磁器小片 1 点が出土している。



第 29 図　2 次調査 6 トレンチ遺物実測図

8 トレンチ

8 トレンチは延長約 52.7m のトレンチで、土層は 25 層に分層される。水田は確認できていない。近世以前は砂地のみの堆積層で河川と考えられる。

水田以外の遺構では近世と考えられる溝（SX1）を検出している。溝状遺構は長い期間水が流れていた可能性が高く、上層は粘土質だが下層はシルト質で最下層は水の影響で堆積した砂層が残り、水の中に鉄分が多く含まれていたかは定かではないが砂層下は鉄分の沈殿層で硬化している。

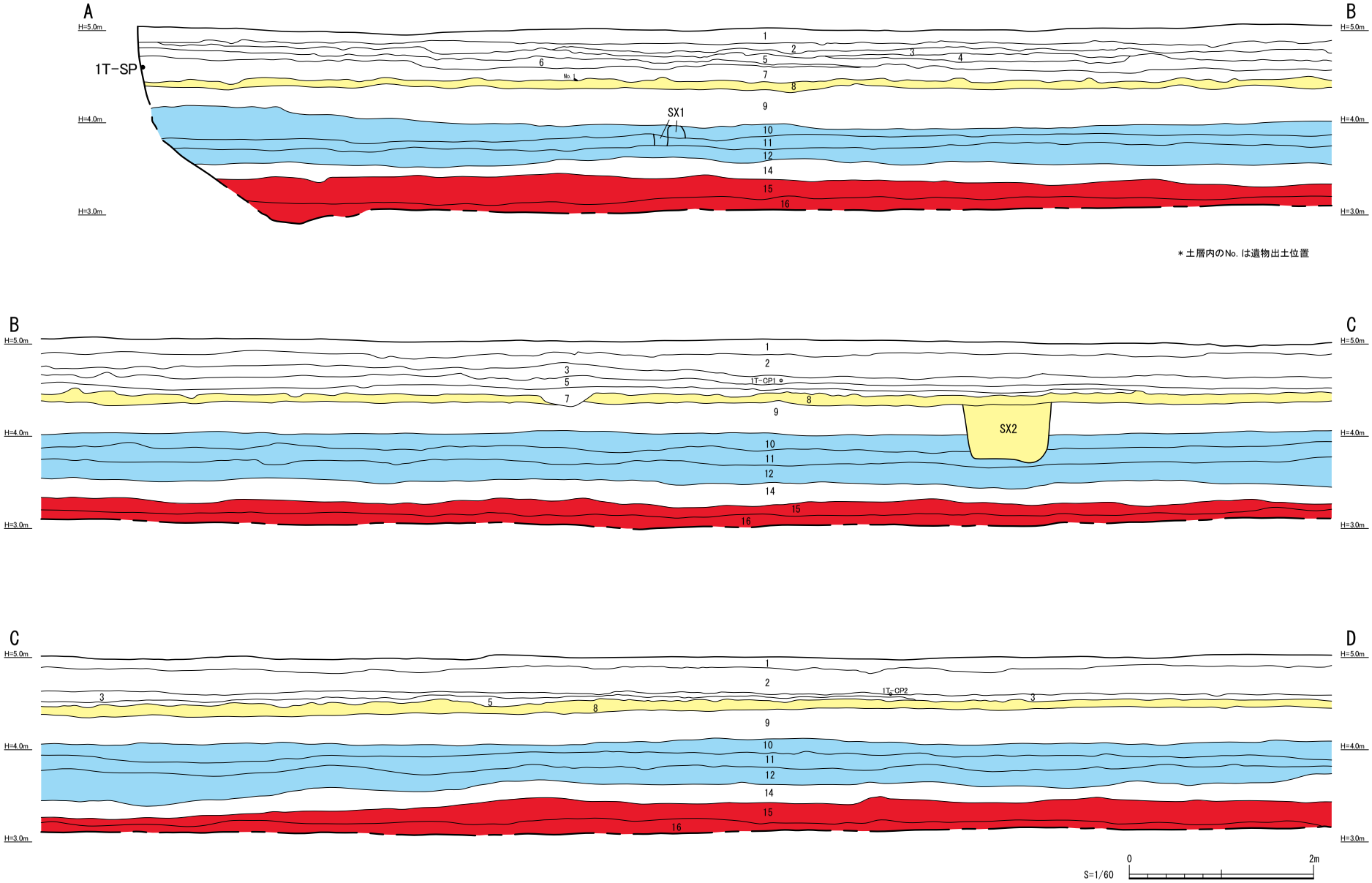
9 トレンチ

9 トレンチは延長約 28.4m のトレンチで、土層は 23 層に分層される。水田は確認できていない。層の大半は 8 トレンチと同様に砂層または川砂層を確認している。近世の遺物を伴う包含層を確認しており、これは 1 次調査の 1・2 区の近世包含層と一致する。

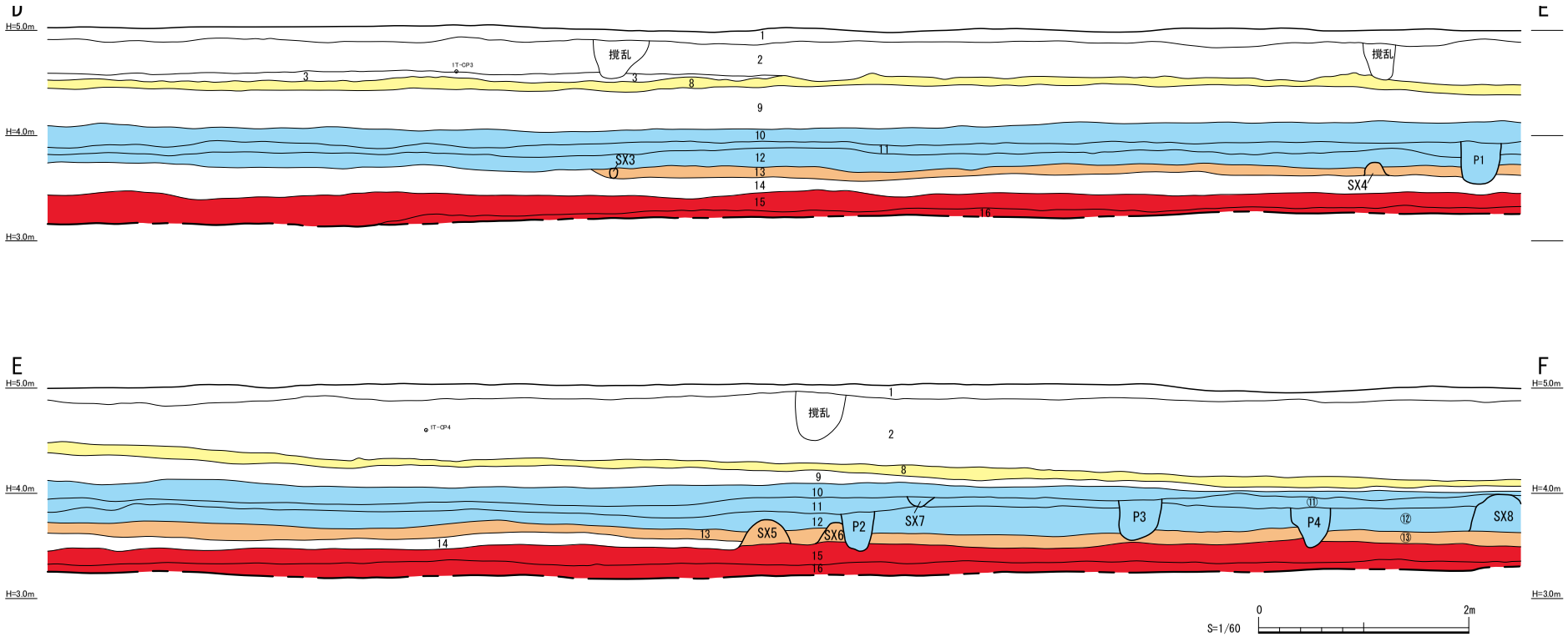
遺構は壁面土層（2 層) から盛土状の高まり（SX1）を検出した。SX1 周囲の層は砂層または川砂層（7 層・9 層・17 層・21 層・23 層）であった。遺物は 4 層から陶器の底部が出土している。見込みには 4 か所胎土目が残る。

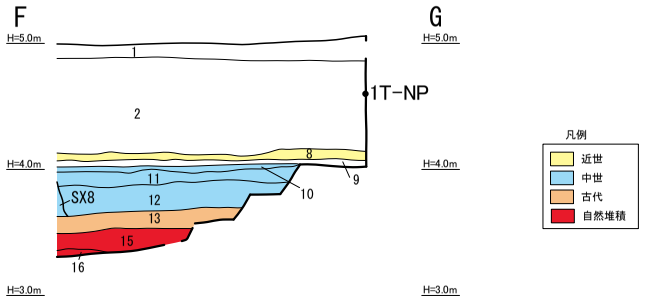
10 トレンチ

10 トレンチは延長約 71.2m のトレンチで、土層は 21 層に分層される。水田は確認できていない。層の大半は砂層を確認し、間に砂利層が堆積している。表土下 1m では水質の影響がある堆積層（15 層）を確認したが下層に黒色の堆積層が部分的に見られ、これは植物等の腐食層が溜まった層と考えられる。また、この層は 9 トレンチで立ち上がりを確認しているため、この周囲は水田ではなく沼地や湖の可能性がある。このため、15 層内から縄文土器や敲石（図版 12）が出土しているが、流れ込みと考えられる。



第 30 図　1 トレンチ西壁土層断面図 -1



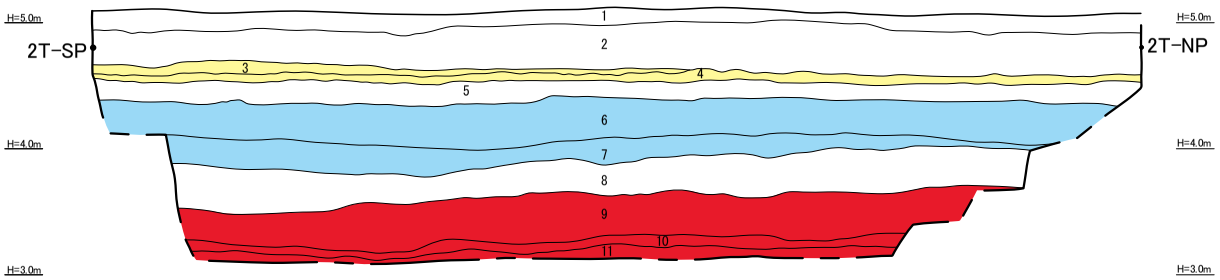


1 トレンチ

1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰黄色土（2.5Y7/2）しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。
3層	暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）しまりあり、粘性あり。マンガンを含む。
4層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。
5層	③層と同じ。
6層	④層と同じ。
7層	にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。
	遺物出土。近世頃の水田層か。
8層	褐灰色粘質土（10YR5/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。
	砂が層内に混じる。近世頃の水田層か。
9層	灰黄褐色粘質土（10YR5/2）しまりあり、粘性強い。マンガン・鉄分を含む。
10層	灰白色粘質土（N7/0）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
	近世以前の水田層か。
11層	灰色粘質土（N6/0）しまりあり、粘性強い。マンガンを含む。
	⑩層に比べ鉄分を多く含む。近世以前の水田層か。
12層	灰色粘質土（7.5YR6/1）しまりあり、粘性強い。マンガンを多く含む。鉄分を含む。
	近世以前の水田層か。
13層	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。近世以前の水田層か。
14層	⑩層と同じ。
15層	灰白色粘質土（7.5Y7/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
16層	暗青灰色粘質土（5B4/1）しまりややあり、粘性強い。

SX1	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）しまりあり、粘性あり。鉄分を多く含む。(畝状遺構か)。
SX2	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を多く含む。(溝状遺構か)。
SX3	灰白色粘質土（N8/0）しまりあり、粘性強い。杭の痕跡と思われる。
	また杭が腐食し粘土化する。
SX4	灰色粘質土（5Y5/1）よくしまる、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。(畝状遺構か)。
SX5	灰色粘質土（5Y5/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。(畝状遺構か)。
SX6	灰色粘質土（5Y5/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。(畝状遺構か)。
SX7	灰色土（7.5Y6/1）しまりあり、粘性ややあり。鉄分を含む。(溝状遺構か)。
SX8	灰色粘質土（5Y5/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。(畝状遺構か)。
P1	灰色粘質土（7.5Y5/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。(ピットか)。
P2	灰色粘質土（7.5Y5/1）よくしまる、粘性あり。鉄分を含む。(柱穴か)。
P3	灰色粘質土（7.5Y5/1）よくしまる、粘性あり。鉄分を含む。(柱穴か)。
P4	灰色粘質土（7.5Y5/1）よくしまる、粘性あり。鉄分を含む。(柱穴か)。

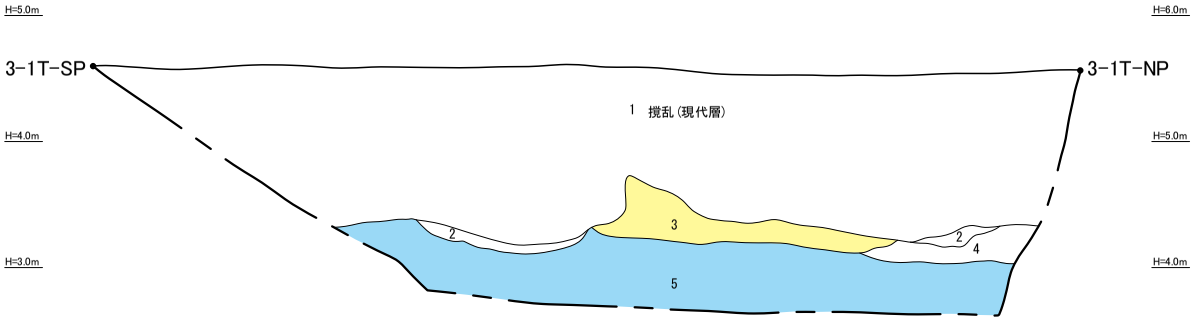
第31図　1トレンチ西壁土層断面図 -2



2トレンチ

2トレンチ

1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。
3層	褐灰色粘質土（10YR5/1）しまりややあり、粘性あり。近世の水田層か。
4層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややなし。マンガンを含む。 鉄分を多く含む。近世の水田層か。
5層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりややあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。
6層	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。 近世以前の水田層か。
7層	黄灰色粘質土（2.5Y6/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。
8層	⑥層と同じ。
9層	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性強い。マンガン・鉄分を含む。
10層	灰白色粘質土（N7/0）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
11層	灰白色粘質土（N7/0）しまりあり、粘性強い。 ⑩層に比べ鉄分を多く含む。シルト質。



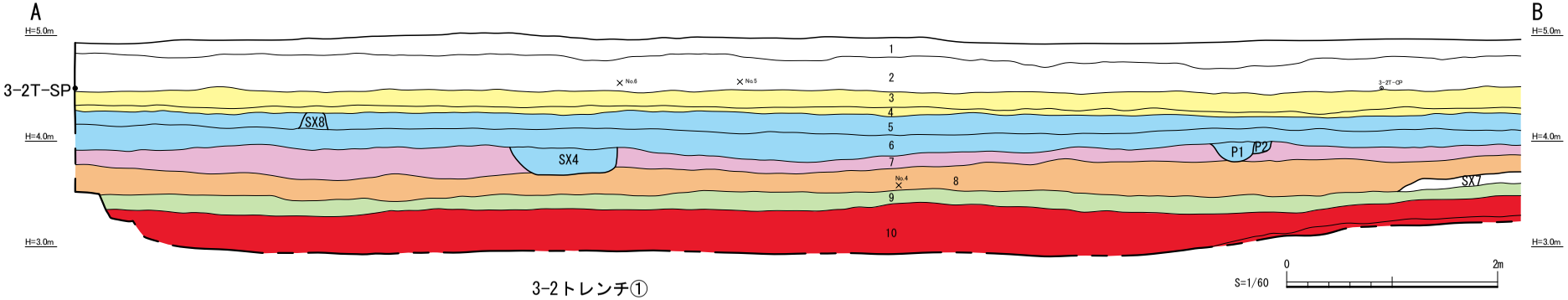
3-1トレンチ

3-1トレンチ

1層	灰黄褐色砂質土（10YR5/2）しまりなし、粘性なし。客土。
2層	灰色粘質土（5Y4/1）しまりあり、粘性ややあり。
3層	灰黄色土（2.5Y7/2）しまりあり、粘性ややなし。鉄分・炭化物を含む。 砂が層内に混じる。
4層	暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）しまりあり、粘性なし。
5層	灰色土（5Y6/1）しまりややあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。 砂が層内に混じる。

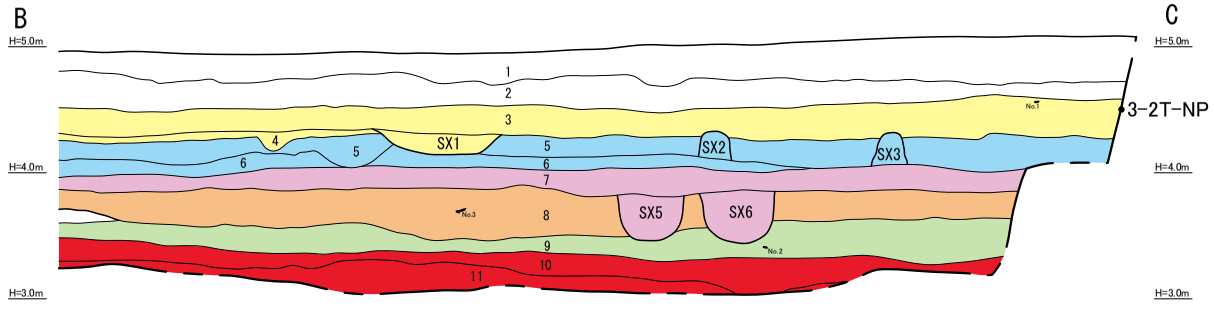
凡例

- 近世
- 中世
- 中世以前
- 古代
- 弥生
- 自然堆積



3-2トレンチ①

第32図　2・3-1・3-2①トレンチ西壁土層断面図

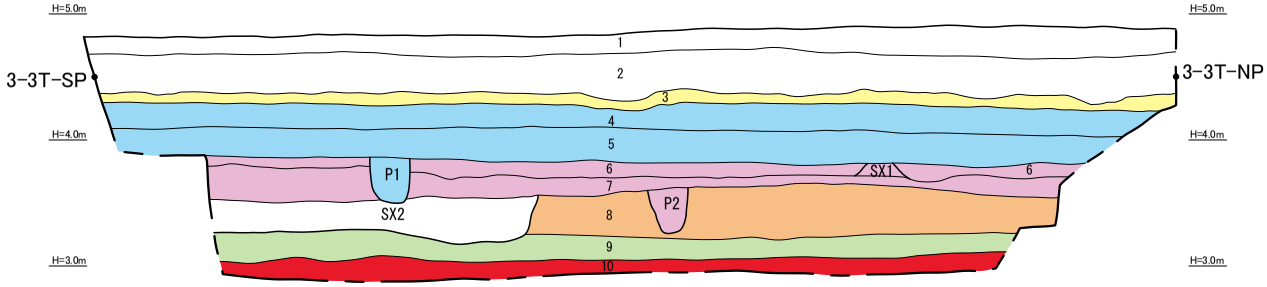


＊土層内のNo. は遺物出土位置

3-2トレンチ②

3-2 トレンチ

1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰黄色粘質土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。 砂が層内に混じる。遺物出土。
3層	灰黄色土（2.5Y7/2）しまりあり、粘性ややなし。鉄分・炭化物を含む。 砂が層内に混じる。遺物出土。
4層	にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまりややあり、粘性ややなし。鉄分を多く含む。 砂が層内に混じる。水田層か。
5層	灰色土（5Y6/1）しまりややあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。 砂が層内に混じる。
6層	灰色土（5Y6/1）しまりややあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。 砂が層内に混じる。⑤層に比べ粘性がある。
7層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。
8層	灰黄色粘質土（2.5Y7/2）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。遺物出土(古代)。
9層	黄灰色粘質土（2.5Y6/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。遺物出土(弥生)。
10層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
11層	灰色粘質土（7.5Y5/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。層内に木片や植物片 を含みややシルト質の部分も見られることから旧沼地または旧湖の可能性がある。
SX1	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。(溝状遺構か)。
SX2	にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3）しまりあり、粘性あり。鉄分を多く含む。砂が層内に混じる。(畝状遺構か)。
SX3	にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3）しまりあり、粘性あり。鉄分を多く含む。砂が層内に混じる。(畝状遺構か)。
SX4	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。(溝状遺構か)。
SX5	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。(土坑か)。
SX6	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。(土坑か)。
SX7	灰黄色砂質土（2.5Y7/2）しまりあり、粘性なし。鉄分を含む。
SX8	にぶい黄橙色粘質土（10YR7/3）しまりあり、粘性あり。鉄分を多く含む。砂が層内に混じる。(畝状遺構か)。
P1	黄灰色粘質土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。断面で検出した遺構のまわりに鉄分が沈殿する。(ピットか
P2	黄灰色粘質土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。断面で検出した遺構のまわりに鉄分が沈殿する。(ピットか



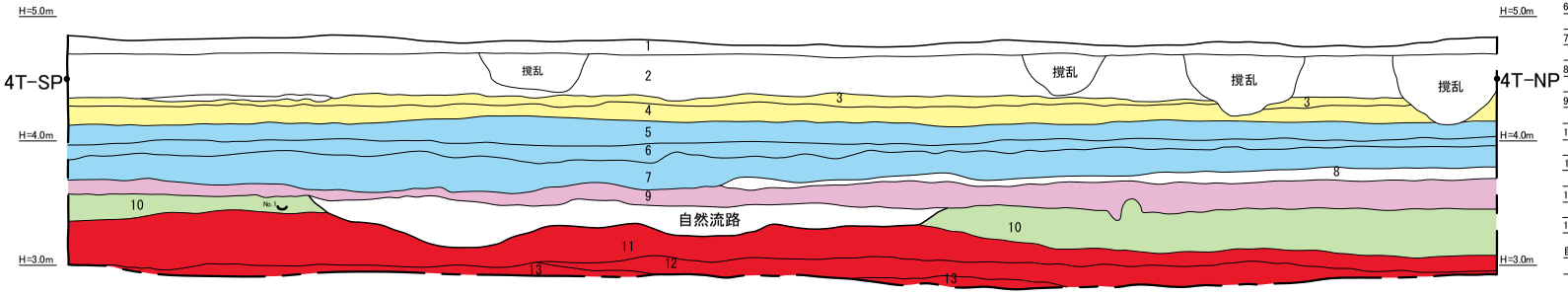
3-3トレンチ

3-3 トレンチ

1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰黄色粘質土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。 砂が層内に混じる。遺物出土。
3層	にぶい黄色土（2.5Y6/3）しまりややあり、粘性ややなし。鉄分を多く含む。砂が層内に混じる。水田層か。
4層	暗灰黄色土（2.5Y5/2）しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。
5層	灰黄色粘質土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。
6層	黄灰色土（2.5Y6/1）しまりややあり、粘性ややなし。
7層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりあり、粘性あり。
8層	灰色粘質土（5Y5/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
9層	黄灰色粘質土（2.5Y6/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
10層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。
SX1	褐色土（10YR4/6）しまりややあり、粘性ややなし。鉄分を多く含む。(畝状遺構か)。
SX2	暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）しまりあり、粘性あり。マンガンを多く含む。(溝状遺構か)。
P1	灰黄褐色粘質土（10YR5/2）しまりあり、粘性あり。鉄分を含む。(ピットか)。
P2	灰色粘質土（5Y6/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。(ピットか)。

凡例

- 近世
- 中世
- 中世以前
- 古代
- 弥生
- 自然堆積



4トレンチ

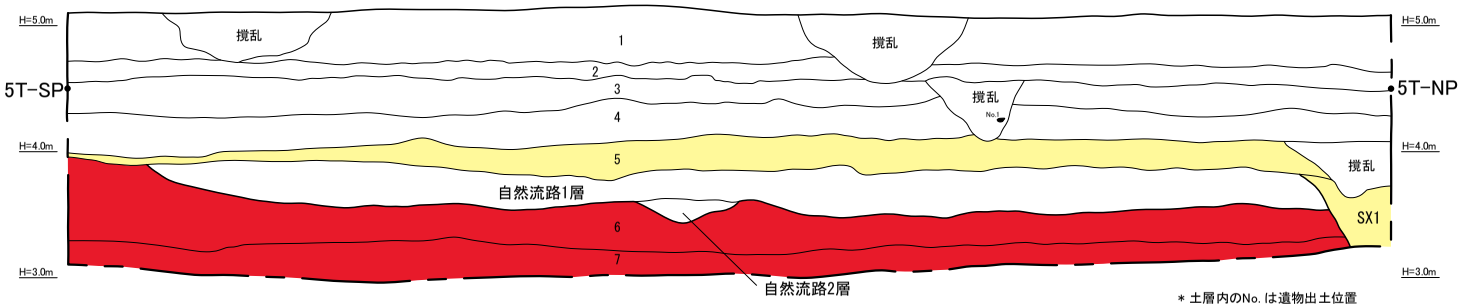
＊土層内のNo. は遺物出土位置

S=1/60　0　2m

4 トレンチ

1層	にぶい黄褐色土（10YR4/3）表土。
2層	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）しまりあり、粘性あ 砂が混じる。鉄分を含む。
3層	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）しまりあり、 粘性ややあり。マンガンを含む。 鉄分を多く含む。
4層	②-2層と同じ。
5層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりあり、粘性あり。 マンガン・鉄分を含む。
6層	灰黄褐色粘質土（10Y5/2）しまりあり、粘性あり。 鉄分を含む。
7層	褐灰色粘質土（10YR6/1）しまりあり、粘性あり。 マンガン・鉄分を含む。
8層	灰黄褐色粘質土（10YR6/2）しまりあり、粘性あり。 マンガン・鉄分を含む。
9層	灰白色粘質土（10YR7/1）しまりあり、粘性あり。 マンガンを含む。遺物出土。
10層	灰白色土（10YR7/1）しまりややあり、粘性ややなし。 マンガン・鉄分を含む。遺物出土(弥生)。
11層	灰白色土（10YR7/1）しまりややあり、粘性ややあり。 砂層と粘土層の混ざり土。
12層	灰白色砂質土（2.5Y7/1）しまりなし、粘性なし。 細かな砂層の 堆積土。遺物出土。
13層	砂層（川砂）。 砂粒、小石、炭化物、軽石を多く含む。
自然流路	灰白色粘質土（10YR7/1）しまりあり、粘性強い。 鉄分を含む。 弥生時代より新しい流路。

第 33 図　3-2 ②・3-3・4 トレンチ西壁土層断面図

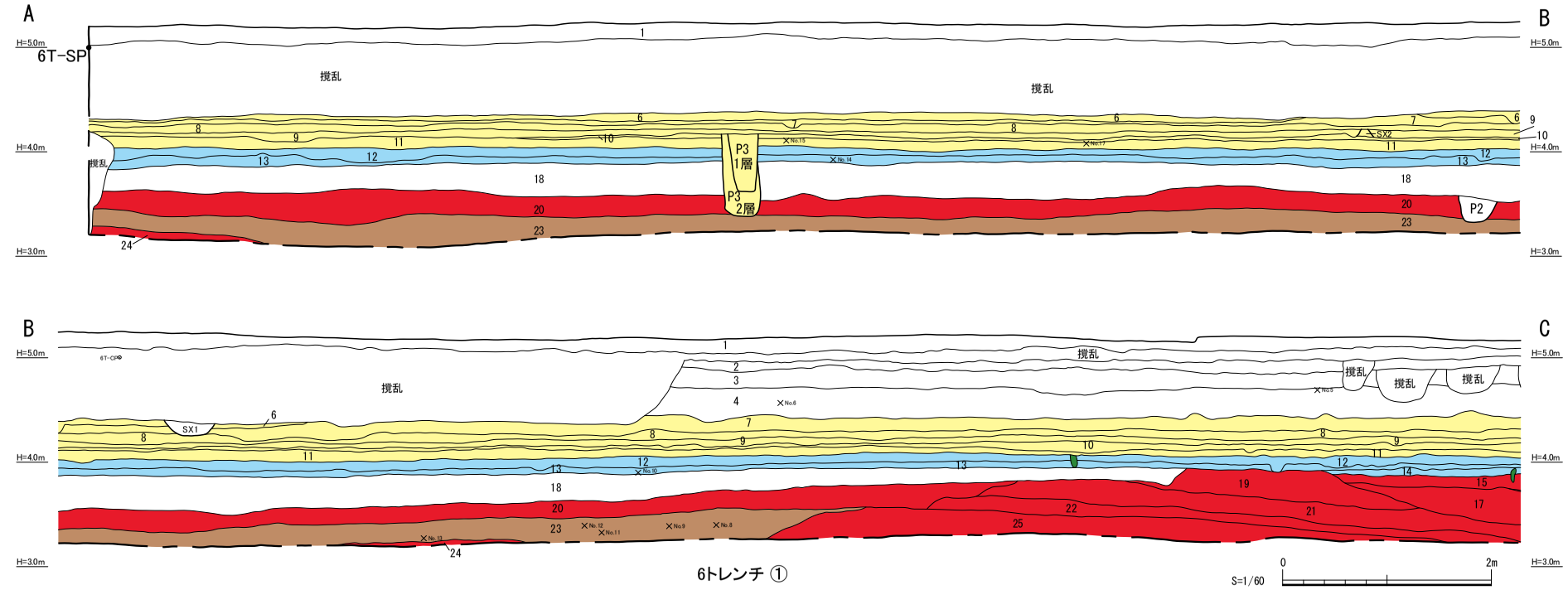


5トレンチ

5トレンチ

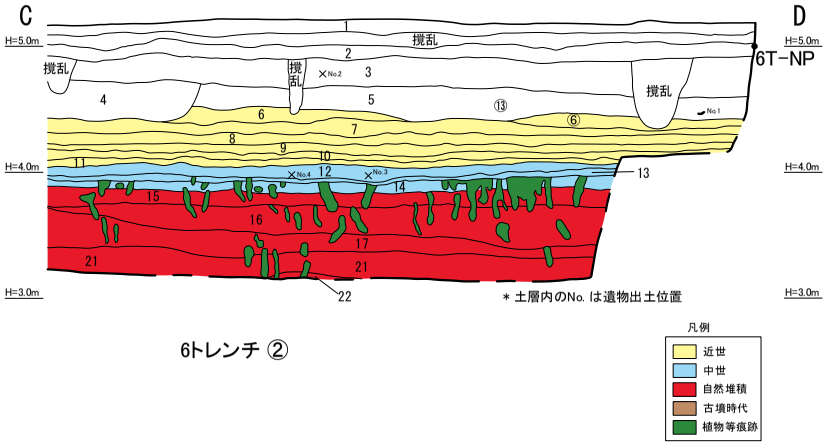
1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰色粘質土（10Y5/1）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。
	近現代の水田層か。
3層	にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）しまりややなし、粘性あり。
4層	灰黄褐色粘質土（10YR5/2）しまりあり、粘性あり。マンガンを含む。遺物出土。
5層	にぶい黄橙色粘質土（10YR7/2）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。
6層	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）しまりあり、粘性ややあり。鉄分を多く含む。
	脆弱地盤で水がしみ出す。
7層	灰黄褐色砂質土（10YR6/2）しまりなし、粘性ややなし。マンガンを含む。
SX1	青灰色粘質土（5B5/1）しまりあり、粘性あり。
自然流路1層	灰白色粘質土（10Y7/1）しまりあり、粘性あり。マンガン・鉄分を含む。
自然流路2層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりなし、粘性ややなし。

凡例
- 近世
- 中世
- 自然堆積
- 古墳時代



6トレンチ ①

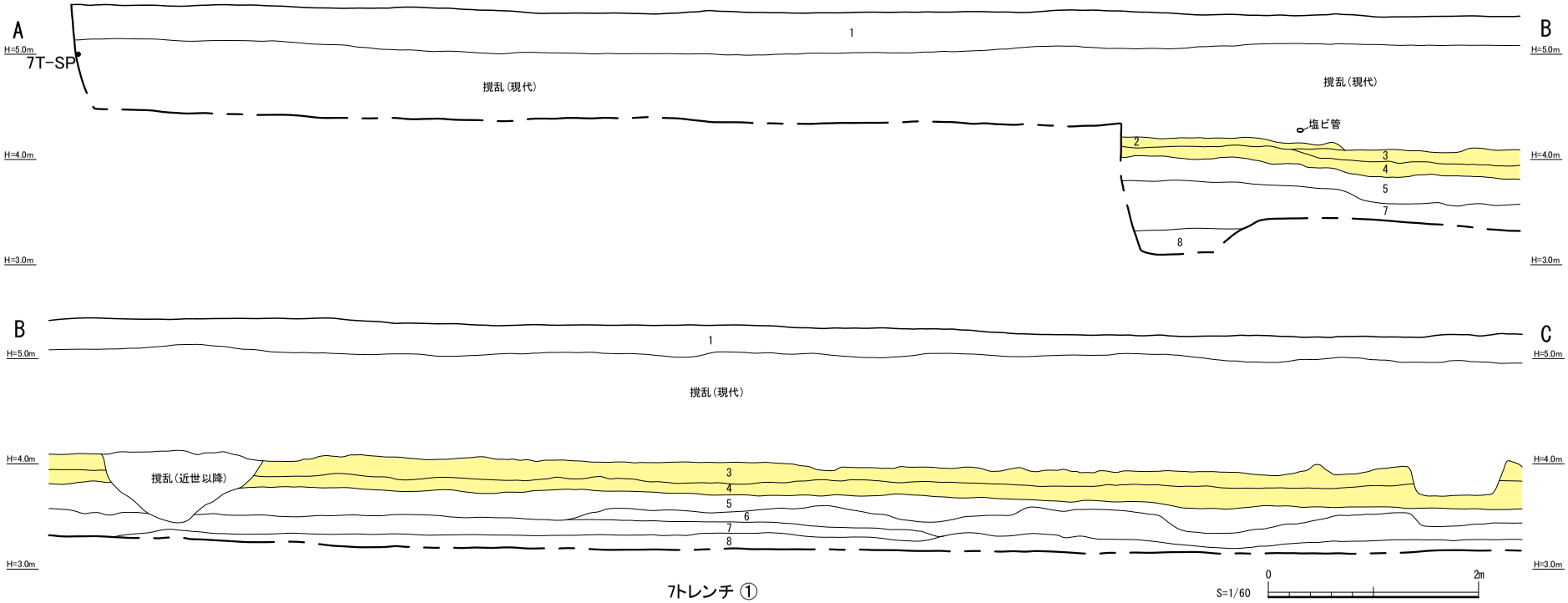
第34図　5・6①トレンチ西壁土層断面図



6トレンチ ②

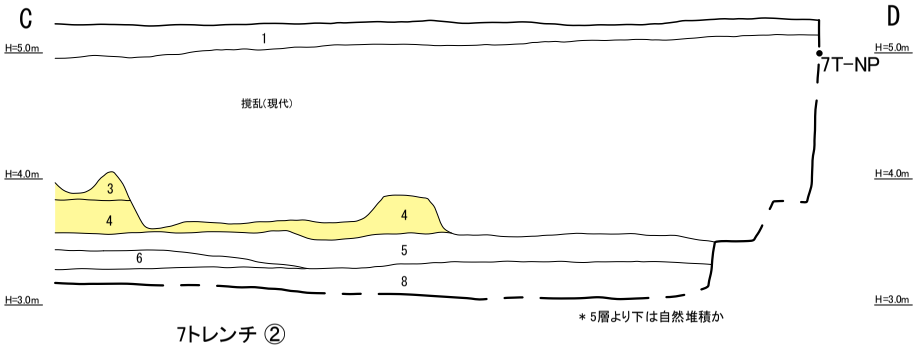
6 トレンチ

1層	暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまりあり、粘性ややあり。
	小石を含む。上層が真砂土を入れ込んでいたため、層内に真砂土混入する。
2層	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややなし。小石を含む。
3層	にぶい黄色土 (2.5Y6/3) しまりあり、粘性ややなし。
	小石、土器の小片、炭化物を含む。遺物出土。③～⑤層は近現代の耕作土か。
4層	黄褐色土 (2.5Y5/3) しまりあり、粘性ややなし。小石、鉄分を含む。
	③～⑤層は近現代の耕作土か。
5層	暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまりあり、粘性ややあり。鉄分を含む。
	③～⑤層は近現代の耕作土か。
6層	黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) しまりあり、粘性ややあり。鉄分を含む。近世水田層1面目。
7層	にぶい黄色土 (2.5Y6/4) しまりあり、粘性ややなし。鉄分を多く含む。近世水田層1面目。
8層	にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまりあり、粘性ややなし。マンガンを含む。近世水田層1面目。
9層	⑥層と同じ。近世水田層2面目。
10層	灰黄色土 (2.5Y7/2) しまりあり、粘性ややなし。鉄分を多く含む。近世水田層2面目。
11層	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややなし。マンガンを含む。近世水田層2面目。
12層	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。
	遺物出土(中世)。中世水田層。
13層	⑩層と同じ。中世水田層。層内に植物の樹痕または動物の巣穴の痕跡が残る。
14層	灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややあり。マンガンの粒を多く含む。
	中世水田層。層内に植物の樹痕または動物の巣穴の痕跡が残る。
15層	灰オリーブ色粘質土 (5Y6/2) しまりあり、粘性ややあり。マンガンの粒を含む。
	層内に植物の樹痕または動物の巣穴の痕跡が残る。
16層	灰白色粘質土 (5Y7/2) しまりあり、粘性あり。マンガンの粒を含む。
	層内に植物の樹痕または動物の巣穴の痕跡が残る。
17層	灰白色土 (10Y7/1) しまりあり、粘性ややなし。層内に砂が混じる。
	マンガンを含む。層内に植物の樹痕または動物の巣穴の痕跡が残る。
18層	⑮層と同じ。
19層	褐色砂質土 (10YR4/4) しまりややなし、粘性なし。上層にマンガンの堆積層がある。
20層	灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性あり。マンガンを含む。層内に砂が混じる。
21層	灰白色砂質土 (5Y7/2) しまりややあり、粘性なし。マンガンを含む。
22層	灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) しまりややなし、粘性なし。下層に川砂層がある。旧河床か。
23層	暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) しまりややあり、粘性あり。マンガンを含む。
	遺物出土。古墳時代の遺物がまとまって出土している場所もあるが
	遺構は確認できず、層内に部分的に古墳時代の遺物を含むことから
	当時代の包含層が残存する可能性がある。
24層	灰色粘質土 (5Y6/1) しまりあり、粘性あり。
25層	㉒層と同じ。
SX1	暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまりあり、粘性ややなし。マンガンを含む。
	(近世以降の溝状遺構か)。
SX2	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。(畝状遺構か)。
P2	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややなし。マンガン・鉄分を含む。(ピット)。
P3 1層	灰黄色粘質土 (2.5Y7/2) しまりあり、粘性あり。
	赤鉄が部分的に混入する。(近世頃のピットか)。
P3 2層	灰オリーブ粘質土 (5Y6/2) しまりあり、粘性あり。1層に比べ赤鉄の量が少ない。
	(近世頃のピットか)。



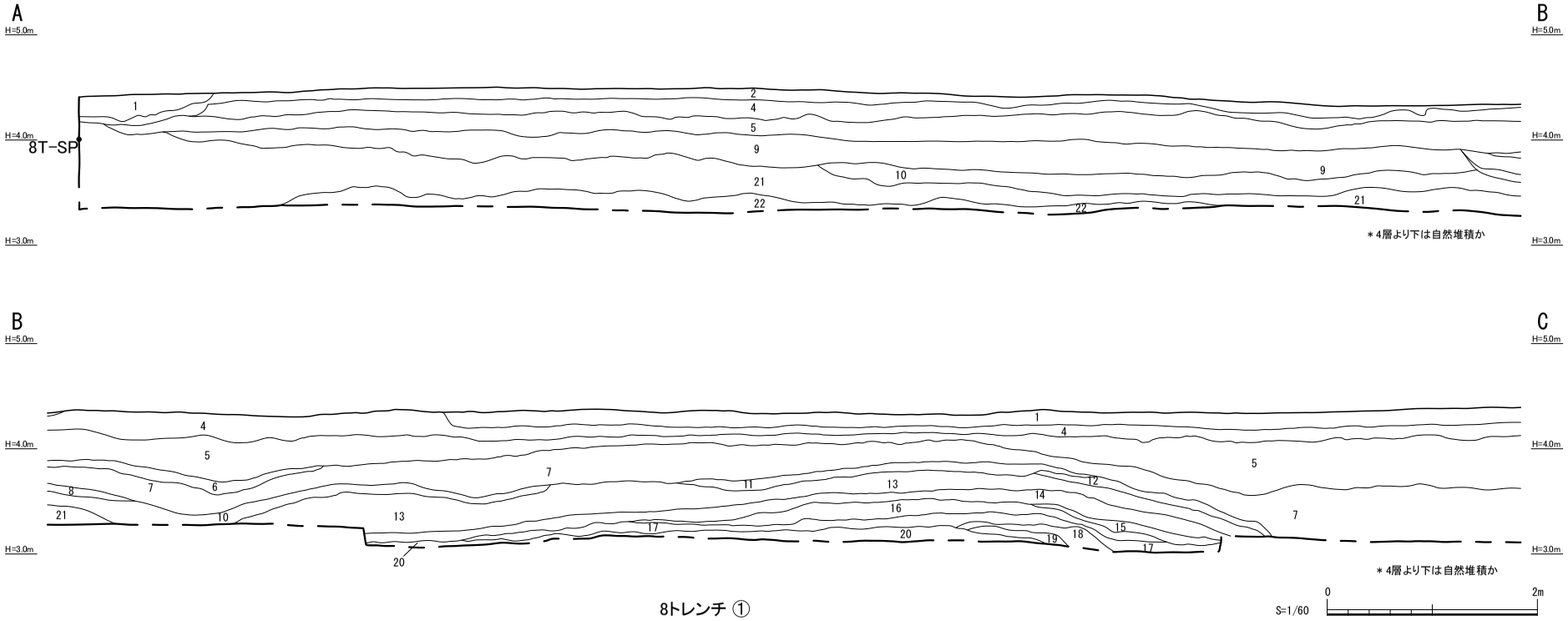
7トレンチ ①

第 35 図　6 ②・7 ①トレンチ西壁土層断面図

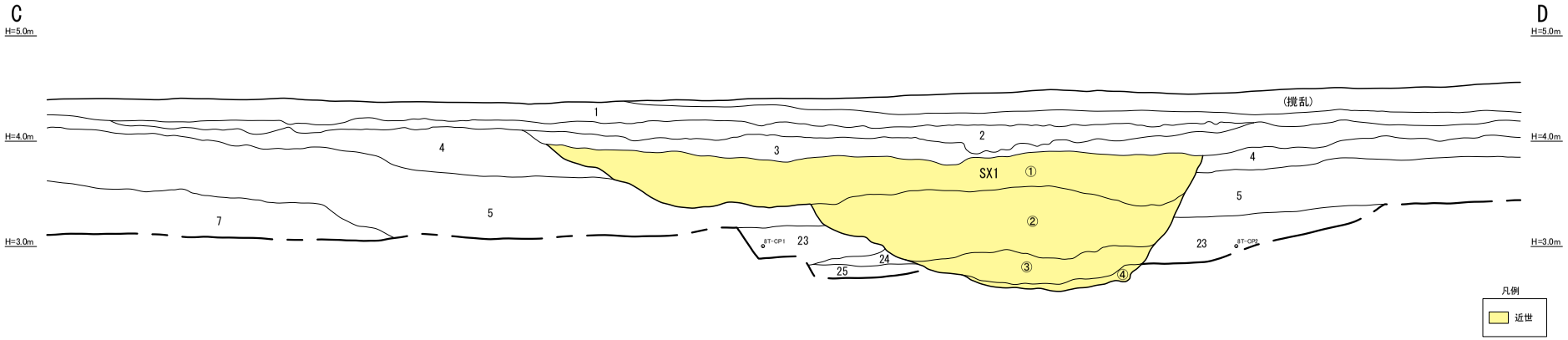


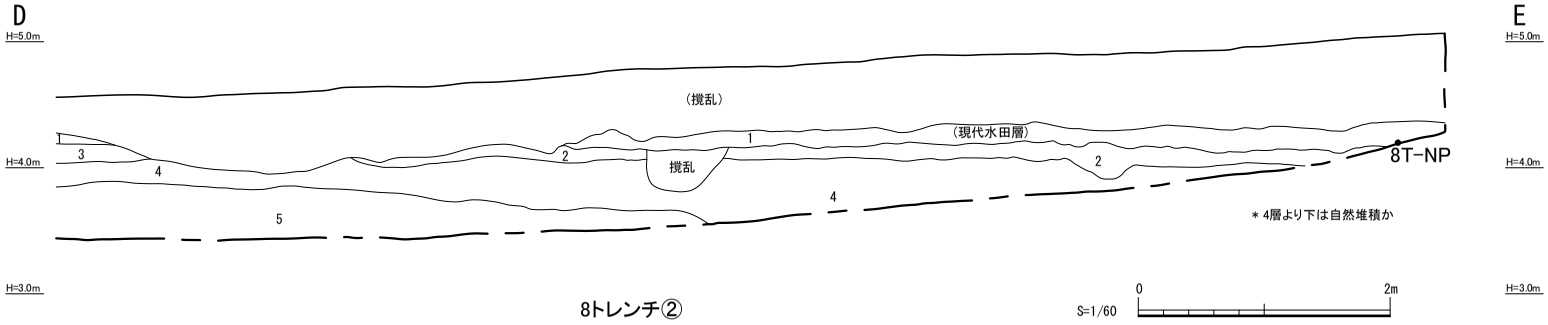
7トレンチ

1層	暗灰黄色土（2.5Y5/2）しまりあり、粘性ややあり。小石を含む。
2層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりややあり、粘性ややあり。鉄分を含む。(近世の水田層か)。
3層	灰黄褐色土（10YR5/2）しまりなし、粘性ややなし。鉄分を含む。(近世の水田層か)。
4層	にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりややあり、粘性あり。鉄分を含む。遺物出土(近世)。
5層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりややあり、粘性なし。粗い粒を含む砂層。(氾濫層)。
6層	暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）しまりなし、粘性なし。細かな粒を含む砂層。(氾濫層)。
7層	にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）しまりあり、粘性あり。
8層	黄灰色粘質土（2.5Y5/1）しまりあり、粘性強い。鉄分を含む。



第 36 図　7 ②・8 ①トレンチ西壁土層断面図





8トレンチ②

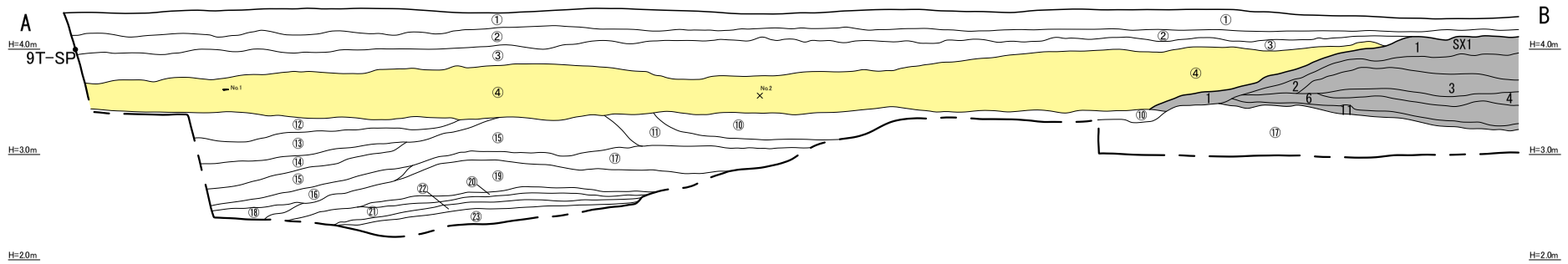
8 トレンチ

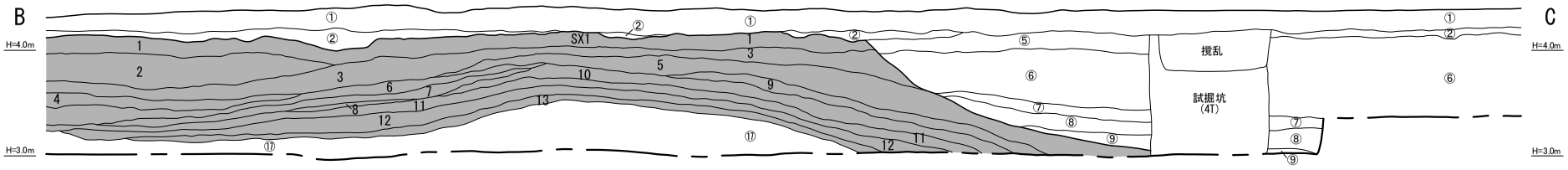
1層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
2層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。
3層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりあり、粘性なし。小石を含む。
4層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりあり、粘性なし。
5層	にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり、粘性ややなし。
6層	にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）しまりあり、粘性なし。
7層	川砂層（氾濫堆積層）。
8層	褐色土（10YR4/4）しまりややあり、粘性ややあり。
9層	にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり、粘性ややあり。
10層	褐色土（10YR4/4）しまりややあり、粘性ややあり。
11層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりあり、粘性なし。
12層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりなし、粘性なし。
13層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりややなし、粘性なし。
14層	⑫層と同じ。
15層	⑪層と同じ。
16層	川砂層（氾濫堆積層）。
17層	褐色土（10YR4/4）しまりややあり、粘性ややあり。
18層	⑬層と同じ。
19層	⑰層と同じ。
20層	川砂層（氾濫堆積層）。
21層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりややあり、粘性なし。
22層	川砂層（氾濫堆積層）。
23層	⑤層と同じ。黒粒を多く含む。
24層	灰色粘質土（7.5Y5/1）しまりややあり、粘性あり。鉄分を含む。
25層	にぶい黄褐色砂質土（Hue10YR5/4）。しまりなし、粘性なし。鉄分を含む。

SX1

①層	褐色粘質土（10YR4/4）しまりあり、粘性あり。
②層	灰色粘質土（7.5Y5/1）しまりあり、粘性あり。砂粒・鉄分を含む。
③層	緑灰色粘質土（5G5/1）しまりあり、粘性強い。
④層	オリーブ灰色砂質土（2.5GY5/1）しまりなし、粘性なし。
	下層に鉄分の堆積層がみられる。

第 37 図　8 ②トレンチ西壁土層断面図





凡例

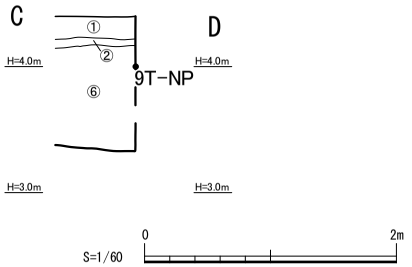
近世

近世以前

＊土層内のNo. は遺物出土位置

＊⑤層より下は自然堆積か

9トレンチ



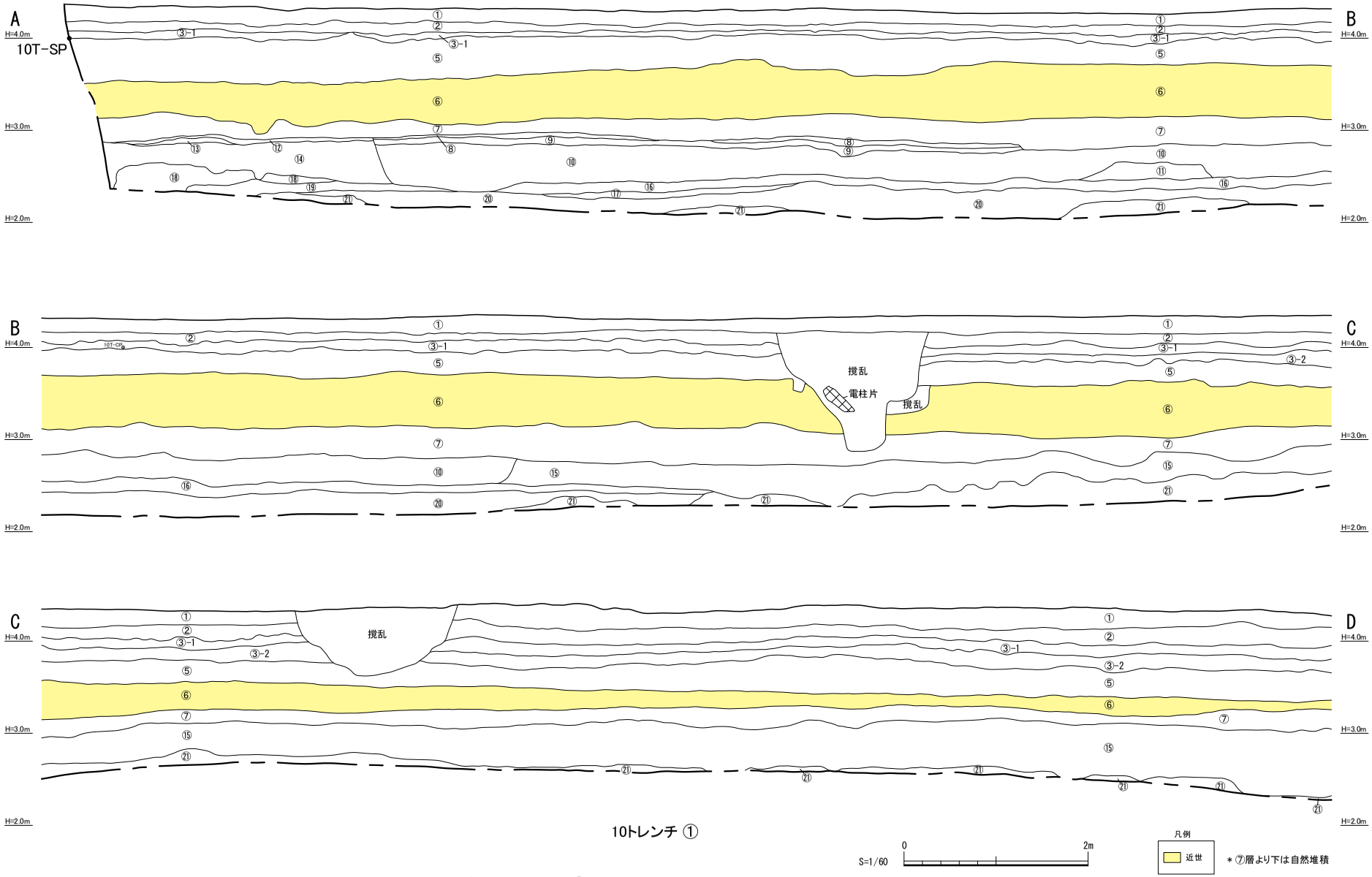
9 トレンチ

① 層	褐灰色粘質土（10YR5/1）表土。
② 層	灰黄色土（2.5Y6/2）しまりあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。
③ 層	褐色土（10YR4/4）しまりあり、粘性ややなし。
④ 層	にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）しまりあり、粘性あり。遺物出土(近世包含層)。
⑤ 層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）しまりややあり、粘性なし。
⑥ 層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりややあり、粘性なし。
⑦ 層	川砂層（氾濫堆積層）。
⑧ 層	⑥層と同じ。
⑨ 層	⑦層と同じ。
⑩ 層	にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）しまりなし、粘性なし。粒の細かい砂層。
⑪ 層	にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）しまりあり、粘性あり。
⑫ 層	灰色粘質土（7.5Y5/1）しまりややあり、粘性あり。マンガンを含む。
⑬ 層	灰色砂質土（7.5Y5/1）しまりなし、粘性なし。
⑭ 層	灰オリーブ色粘質土（5Y5/2）しまりややあり、粘性強い。
⑮ 層	灰オリーブ色砂質土（5Y5/2）しまりなし、粘性なし。
⑯ 層	⑭層と同じ。
⑰ 層	⑦層と同じ。
⑱ 層	暗青灰色粘質土（5B4/1）しまりややあり、粘性強い。有明海の潟土。
⑲ 層	暗灰色砂質土（2.5Y5/2）しまりなし、粘性なし。粒の細かい砂層。
⑳ 層	黄褐色粘質土（2.5Y5/3）しまりあり、粘性あり。粒の細かい砂層。
㉑ 層	⑦層と同じ。
㉒ 層	⑮層と同じ。
㉓ 層	⑦層と同じ。

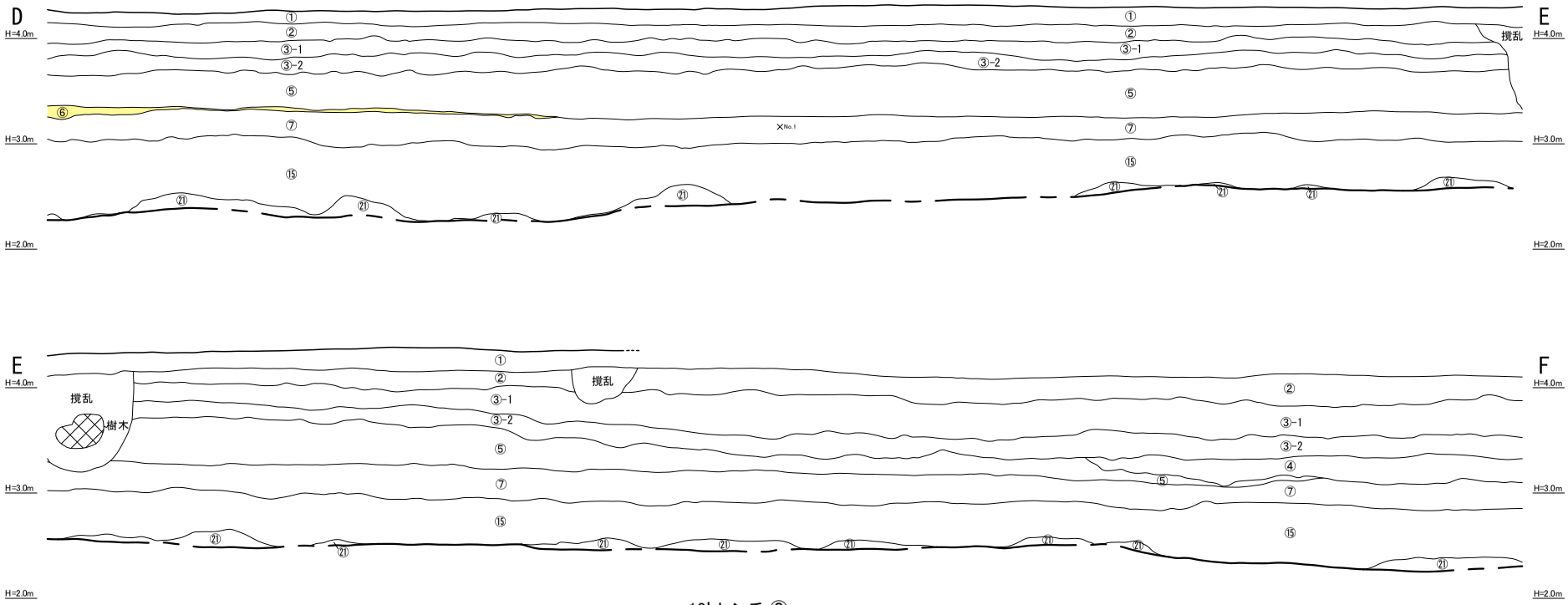
SX1

1 層	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）しまりあり、粘性なし。人為的にしめた砂層。
2 層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりあり、粘性なし。人為的にしめた砂層。
3 層	砂層(粗い砂層)。しまりなし、粘性なし。ただし、土手状の範囲のみ人為的にしめた層。
4 層	にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）しまりなし、粘性なし。
5 層	褐色砂質土（10YR4/4）しまりややあり、粘性なし。
6 層	3層と同じ。
7 層	暗褐色土（10YR3/3）しまりややあり、粘性ややなし。人為的の盛土。
8 層	3層と同じ。
9 層	褐色土（10YR4/4）しまりややあり、粘性ややなし。人為的の盛土。
10 層	3層と同じ。
11 層	4層と同じ。
12 層	3層と同じ。
13 層	4層と同じ。

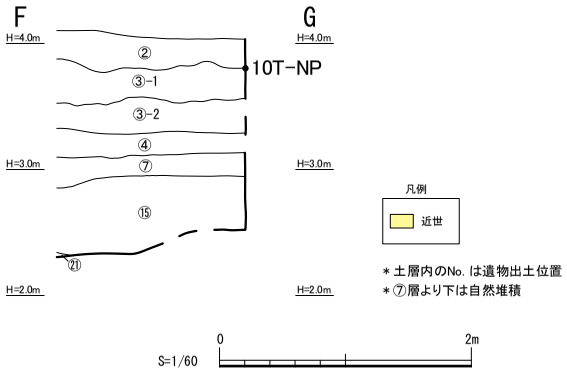
第 38 図　9 トレンチ西壁土層断面図



第 39 図　10 ①トレンチ西壁土層断面図



10トレンチ ②



10 トレンチ

① 層	褐灰色粘質土 (10YR5/1) 表土。
② 層	灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性ややあり。マンガン・鉄分を含む。
③-1 層	褐色土 (10YR4/4) しまりあり、粘性ややなし。
③-2 層	褐色砂質土 (10YR4/4) しまりややあり、粘性なし。
④ 層	灰色砂質土 (7.5Y6/1) しまりなし、粘性なし。鉄分・軽石を含む。
⑤ 層	川砂層 (氾濫堆積層)。
⑥ 層	にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) しまりあり、粘性あり。遺物出土(近世)。
⑦ 層	灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) しまりあり、粘性あり。砂が層内に混じる。
⑧ 層	灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) しまりあり、粘性あり。
⑨ 層	灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) しまりなし、粘性なし。
⑩ 層	にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) しまりややあり、粘性あり。
⑪ 層	灰黄色粘質土 (2.5Y6/2) しまりややあり、粘性あり。鉄分を含む。
⑫ 層	黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) しまりややなし、粘性あり。
⑬ 層	⑦層と同じ。
⑭ 層	⑪層と同じ。
⑮ 層	灰色粘質土 (7.5Y6/1) しまりややなし、粘性強い。鉄分を含む。遺物出土(縄文)。
	㉑層直上で植物の腐食堆積した層がみられる。
⑯ 層	灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) しまりなし、粘性なし。
⑰ 層	⑩層と同じ。
⑱ 層	暗青灰色粘質土 (5B4/1) しまりややあり、粘性強い。潟土。
⑲ 層	灰黄色粘質土 (H2.5Y6/2) しまりややあり、粘性あり。鉄分を含む。砂が層内に混じる。
⑳ 層	⑪層と同じ。
㉑ 層	⑱層と同じ。

第 40 図　10 ②トレンチ西壁土層断面図

３　小結

２次調査では水田の有無及び条里の区画を確認することを目的として 10 ヶ所のトレンチ調査を行った。水田は１トレンチから４トレンチ、６トレンチで確認した。鉄分が沈殿して溜まった層及びマンガンを多く含む層を水田と認めている。

時代別に水田が確認できたトレンチを記すと次のようになる。

近世の水田：１トレンチ・２トレンチ・３トレンチ・４トレンチ・６トレンチ

中世の水田：１トレンチ・２トレンチ・３トレンチ・４トレンチ・６トレンチ

古代の水田：１トレンチ

２次調査で中世の水田層を標高４ｍ前後で確認した。このことから、中世にはこの周辺がほぼ平坦な地形を成し、その場所で水田を行っていたと考えられる。

１次調査で確認した水田では、調査１区北側の最下層（Ⅱ-1 層）で確認した水田層が古代の水田層である。１次調査２区では、Ⅲ-2 層からⅢ-9 層までで古代の水田を検出した。古代の水田を確認できたのは、１次調査１区の一部、調査２区、２次調査１トレンチとなり、局所的であった。

５トレンチは水田層を確認していない。砂層及び自然流路が見られた。７～ 10 トレンチは水田層がほとんどなく、砂層や砂利層、潟土等を確認している。７トレンチから 10 トレンチの範囲は河川や沼地である。

以上のことから、１次調査及び２次調査では６トレンチを南限とする範囲に近世及び中世の水田が確認された。また、古代と考えられる水田は局所的であることが確認された。一方で７トレンチ以南では砂層や砂利層が検出され、流路であると判断される。

第２表　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	種別	器種	法量(cm) 口径	残存高	最大胴径	底径	色調 外面	内面	調整 外器面	内器面	胎土	備考
1	6	5	1	SI01		弥生土器	器台	11.5	14.6	—	11.5	橙 5Y7/6	橙 5Y7/6	ナデ	ナデ	石英．角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒	摩滅が著しい
2			1	SI01		弥生土器	高杯	25.6	7.0	—	—	赤褐 2.5YR4/8	赤褐 2.5YR4/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	石英．雲母．砂粒	摩滅が著しい
3			1	SI01		弥生土器	高杯	—	13.2	—	14.2	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	ヘラミガキ	ナデ．指ナデ	長石．石英．雲母．砂粒	摩滅が著しい
4	7		1	SI01		弥生土器	甕	(27.0)	38.2	(26.3)	5.8	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR6/4	ナデ．ハケ目	ナデ	長石．角閃石．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線 底部内器面に指頭圧痕 摩滅が著しい
5			1	SI01		弥生土器	甕	(27.6)	15.0	—	—	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 5YR7/4	ナデ．ハケ目	ナデ ヘラケズリ	長石．石英．角閃石．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線
7	9	4	1	SJ24		弥生土器	甕	27.2	42.5	27.0	6.0	灰黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/4	ナデ．ハケ目	ナデ．指ナデ	石英．雲母．砂粒	（上棺）胴部上位に１条の沈線
8			1	SJ24		弥生土器	甕	27.4	41.3	26.9	6.4	灰黄 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y5/1	ナデ．ハケ目	ナデ．指ナデ	石英．雲母．砂粒	（下棺）胴部上位に１条の沈線
9	10	5	1	SD07	1	弥生土器	高杯	(25.0)	3.9	—	—	橙 5Y6/8	橙 5Y6/8	ナデ	ナデ	石英．雲母．砂粒	摩滅が著しい
10	11	5	1	SK13		弥生土器	器台	—	13.0	—	11.0	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	ハケ目	ナデ	石英．角閃石．雲母．砂粒	
11			1	SK13	3	弥生土器	甕	(25.0)	12.6	(23.9)	—	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	ハケ目	長石．石英．角閃石．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線 摩滅が著しい
12	13	6	1	SK18		弥生土器	鉢	(14.7)	6.1	—	—	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	石英．雲母．砂粒	
13			1	SK18	97.111	弥生土器	小型甕	—	9.4	(13.9)	(7.8)	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	ヘラミガキ．ナデ	ナデ	石英．雲母．砂粒	底部内器面に指頭圧痕
14			1	SK18	13.24 36.105	弥生土器	小型甕	17.8	13.5	(17.3)	8.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	ナデ．ハケ目後 ヘラミガキ	ナデ．ハケ目 指ナデ	石英．角閃石．雲母．砂粒	口縁部４か所に穿孔
15			1	SK18	28.67.75.77 SX23 一括	弥生土器	甕	25.0	30.2	22.5	—	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目	石英．角閃石．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線
16			1	SK18	67.95 96.98	弥生土器	甕	(23.2)	27.4	(21.6)	—	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	ナデ．ハケ目	ナデ	石英．角閃石．雲母．砂粒	
17	14	7	1	SK20	29	弥生土器	甕	(21.6)	6.0	—	—	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	ナデ．指ナデ	石英．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線
18			1	SK20	18	弥生土器	甕	(27.0)	6.4	—	—	橙 7.5YR7/6	黄橙 7.5YR7/8	ナデ．ハケ目	ナデ	石英．雲母．砂粒	摩滅が著しい
19			1	SK20	1	弥生土器	甕	(30.0)	6.2	—	—	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	ナデ	ナデ	石英．雲母．砂粒	摩滅が著しい
20	15	7	1	SX23		弥生土器	高杯	23.6	7.0	—	—	浅黄 2.5Y7/4	浅黄 2.5Y7/4	ナデ．ヘラミガキ	ナデ．ヘラミガキ	石英．角閃石．雲母．砂粒	

第３表遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	種別	器種	法量(cm) 口径	残存高	最大胴径	底径	色調 外面	内面	調整 外器面	内器面	胎土	備考
21	15	7	1	SX23		弥生土器	壷	—	27.7	24.0	5.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	ヘラミガキ．ナデ	ナデ．ハケ目	長石．石英．雲母．砂粒	胴部に１条の突帯
22			1	SX23		弥生土器	甕	24.5	27.1	22.7	—	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄 2.5Y6/2	ナデ．ハケ目	ナデ．指ナデ	石英．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線
23			1	SX23		弥生土器	甕	29.6	36.0	27.2	—	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目	石英．雲母．砂粒	
24	16	8	1	SX25		弥生土器	高杯	—	18.9	—	15.8	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラケズリ．ナデ	石英．雲母．砂粒	
25			1	SX25		弥生土器	壷	(22.0)	8.9	—	—	にぶい黄橙 10YR5/3	黒 10YR2/1	ナデ	ナデ．ヘラミガキ	石英．雲母．砂粒	外器面にヘラでの暗文
26			1	SX25		弥生土器	壷	—	24.6	(33.9)	6.8	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	ヘラミガキ．ナデ	ナデ．指ナデ	長石．石英．雲母．砂粒	蓋に転用
27			1	SX25		弥生土器	甕	(32.0)	8.0	—	—	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	ナデ．工具痕	ナデ	石英．雲母．砂粒	外面胴部に工具による線状の圧痕
28			1	SX25		弥生土器	甕	—	11.3	—	8.8	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	ヘラミガキ	摩滅、剥離のため不明	石英．雲母．砂粒	底部外器面にヘラミガキ
29			1	SX25		弥生土器	甕	—	16.9	—	6.6	橙 5YR6/6	オリーブ黒 10YR3/1	ハケ目．ナデ	ナデ．指頭圧痕	長石．石英．雲母．砂粒	
30	17	7	1	P26	1	弥生土器	甕	(26.0)	17.7	(24.8)	—	褐 10YR4/4	暗褐 10YR3/3	ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目	長石．石英．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線 摩滅が著しい
31			1	P26	5	弥生土器	甕	—	13.5	—	7.0	にぶい橙 7.5YR7/3	黒褐 7.5YR3/1	ハケ目	ナデ．指ナデ	石英．角閃石．雲母．砂粒	
33	18	9	1	Ⅳ-2 層	6	弥生土器	器台	11.2	15.9	—	11.4	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ．ハケ目	ナデ．ヘラケズリ後ナデ	石英．雲母．砂粒	
34			1	Ⅳ-2 層		弥生土器	器台	12.0	15.9	—	12.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	ナデ．ハケ目	ナデ．ヘラケズリ後ナデ	長石．石英．雲母．砂粒	
35			1	Ⅳ-2 層		弥生土器	高杯	(26.9)	16.2	—	—	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	長石．石英．雲母．砂粒	杯部内外面、脚部外面に赤彩
36	19		1	Ⅳ-2 層	3	弥生土器	壷	—	19.2	(23.5)	(5.4)	褐 10YR4/6	明褐 10YR5/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ．ナデ	石英．雲母．砂粒	胴部上位に線刻 胴部に１条の線刻後刻み目
37			1	Ⅳ-2 層		弥生土器	壷	28.2	17.9	(27.6)	—	橙 7.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	ヘラミガキ	ヘラミガキ．ナデ	石英．雲母．砂粒．赤色酸化粒	頸部にヘラミガキによる暗文 胴部に３条の押点文
38			1	Ⅳ-2 層		弥生土器	壷	20.3	34.2	(24.0)	9.0	明黄褐 2.5Y6/6	明黄褐 2.5Y6/6	ナデ．ハケ目 ヘラミガキ	ナデ	石英．雲母．砂粒．赤色酸化粒	胴部に１条の突帯
39			1	Ⅳ-2 層		弥生土器	甕	25.4	30.4	24.0	—	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR7/4	ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目	長石．石英．雲母．砂粒	胴部上位に１条の沈線

第４表　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	種別	器種	法量(cm) 口径	残存高	最大胴径	底径	色調 外面	内面	調整 外器面	内器面	胎土	備考
40	21	10	1	SI02		土師器	杯	—	1.8	—	(7.0)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	横ナデ	横ナデ	石英．雲母．輝石．砂粒	底部ヘラ切り
41			1	SI02		須恵器	杯	(15.0)	3.0	—	(7.6)	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	横ナデ	横ナデ	砂粒	底部ヘラ切り
42			1	SI02		須恵器	杯	(13.0)	4.1	—	8.3	にぶい赤褐 5YR6/4	にぶい赤褐 5YR6/4	横ナデ	横ナデ	砂粒．微細	底部回転ヘラ切り 内外面に火襷
43			1	SI02	1	須恵器	杯	—	2.1	—	(7.2)	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	横ナデ	横ナデ	輝石．砂粒	（高台付杯）
44			1	SI02	P3	須恵器	杯	—	1.5	—	(11.3)	灰 5Y6/1	灰白 5Y7/1	横ナデ	横ナデ	砂粒．微細	（高台付杯）
45			1	SI02	P3 2層	須恵器	壷	—	5.8	—	(9.0)	にぶい赤褐 2.5YR4/4	灰赤 2.5YR4/2	平行タタキ．横ナデ	横ナデ	石英．砂粒	底部外面に同心円文
46	23	10	1	混貝土層	17	土師器	杯	15.7	4.9	—	8.6	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	微細	（高台付杯）　灯明皿 内外面に赤彩　焼き歪み有り
47			1	混貝土層		須恵器	杯	(12.8)	3.3	—	6.8	灰 N5/	灰 N5/	横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	砂粒．微細	板状圧痕
48			1	混貝土層	1	須恵器	杯	(12.8)	3.6	—	7.5	灰白 2.5Y8/2	灰黄 2.5Y7/2	横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	砂粒．微細	底部回転ヘラ切り 内外面に火襷
49			1	混貝土層		須恵器	杯	(14.2)	3.3	—	(7.8)	褐灰 7.5YR6/1	にぶい黄褐 10YR5/3	横ナデ	横ナデ	砂粒．微細	
50			1	混貝土層	1	須恵器	椀	(14.8)	5.6	—	7.7	明褐灰 7.5YR7/1	褐灰 7.5YR6/1	横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	石英．輝石．砂粒．赤色酸化粒	（高台付椀）
51	24	11	1	SK04	1	須恵器	杯	—	1.9	—	(6.8)	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	横ナデ	横ナデ	砂粒．微細	底部ヘラ切り

石製品

報番	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	種類	石材	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
6	7	5	1	SI01 グリッド2 床下層		石包丁	安山岩	5.3	4.7	0.7	21.7	
32	17	7	1	P26	9	磨製石斧	安山岩	8.4	7.3	4.5	420	

鉄製品

報番	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	器種	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
52	24	11	1	SK04	4	不明	(4.4)	0.6	0.8	15.4	
53			1	SK04	5	不明	(3.1)	0.6	0.8	15.0	

2次調査出土遺物

報番	挿図番号	図版番号	区	出土地点	取上げNo.	種別	器種	法量(cm) 口径	残存高	最大胴径	底径	色調 外面	内面	調整 外器面	内器面	胎土	備考
54	29	12	6Tr	23層		土師器	甕	18.0	24.7	21.7	—	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	ハケ目	ナデ．指ナデ	長石．石英．雲母．赤色酸化粒	内器面頸部に指頭圧痕
55			6Tr	23層		土師器	壷	(14.8)	14.0	—	—	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/8	ハケ目	ハケ目．指ナデ	長石．石英．角閃石．雲母．砂粒	

第４章　自然科学分析

玉名平野遺跡群出土人骨の炭素・窒素安定同位体比測定および放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・三谷智広

1.　はじめに

熊本県玉名市に所在する玉名平野遺跡群より出土した人骨の年代を明らかにするため、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。同時に、海洋リザーバー効果の有無を確認するため、炭素と窒素の安定同位体比を測定し、食性の推定を行った。

2.　試料と方法

試料は、玉名平野遺跡群から出土した人骨である。同一個体の肋骨２点を測定対象とした。測定用として、肋骨からノコギリで骨片を切り出し、コラーゲンを抽出した。抽出したコラーゲンは、安定同位体比測定用と ^{14}C 年代測定用に分割した。測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44372	遺構：土坑墓 SK04 調査区：１区 試料 No.1	種類：骨（ヒト） 部位：肋骨 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出
PLD-44373	遺構：土坑墓 SK04 調査区：１区 試料 No.2	種類：骨（ヒト） 部位：肋骨 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出

コラーゲンの炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である Flash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。得られた炭素含有量と窒素含有量から C ／ N（モル比）を算出した。炭素安定同位体比（$\delta^{13}C$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N$）の測定には、EA に連結した質量分析計 DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。

炭素・窒素安定同位体比分析用コラーゲンは、スズコンテナに封入した試料を、EA で燃焼、ガス化させ、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、そのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

放射性炭素年代測定用のコラーゲンは、CO_2 ガス化し、CO_2 ガスの精製、グラファイト化を行った。グラファイトを、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

3-1.　炭素・窒素安定同位体比測定

処理前重量、コラーゲン回収量、コラーゲン回収率、炭素含有量、窒素含有量、C/N 比、安定同位体比、$\delta^{13}C$ に基づき海産物依存率を計算した値を表２に示す。

コラーゲン収率は、試料 No.1 で 4.3%、試料 No.2 で 2.9% と高い。C/N モル比は、試料 No.1 が 3.34、試料 No.2 が 3.41 で、正常値とされる 2.9 ～ 3.6（De Niro, 1985）の範囲内である。したがって、コラーゲンの変質や外部由来の炭素混入の可能性は考慮しなくてよいと考えられる。

表２　炭素・窒素安定同位体比測定結果

試料 No.	試料種	処理前重量 (mg)	コラーゲン回収量 (mg)	コラーゲン収率 (%)	炭素含有量 (mg)	窒素含有量 (mg)	C/N 比 (モル比)	安定同位対比 (‰)		海産物依存率 (%)
								$\delta^{13}C_{PDB}$	$\delta^{15}N_{AIR}$	
PLD-44372 試料 No. 1	人骨	776.48	33.36	4.3	13.5	4.70	3.34	-20.0	10.3	11.8
PLD-44373 試料 No. 2	人骨	855.47	25.07	2.9	9.9	3.38	3.41	-20.0	10.2	11.8

図１に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を示した。人骨中のコラーゲンについては、食物からコラーゲンが合成される際に、$\delta^{13}C$ が約 4.5‰、$\delta^{15}N$ が約 3.5‰上昇する (Ambrose, 1993)。図１では、この濃縮分を補正して、食物グループと人骨との比較が行えるよう、食物グループの値を高くシフトさせている。今回の試料２点は、草食動物や C_3 植物などの陸産物と、淡水魚（肉食）との中間にプロットされた。したがって、^{14}C 年代への海洋リザーバー効果の影響は少ないと考えられる

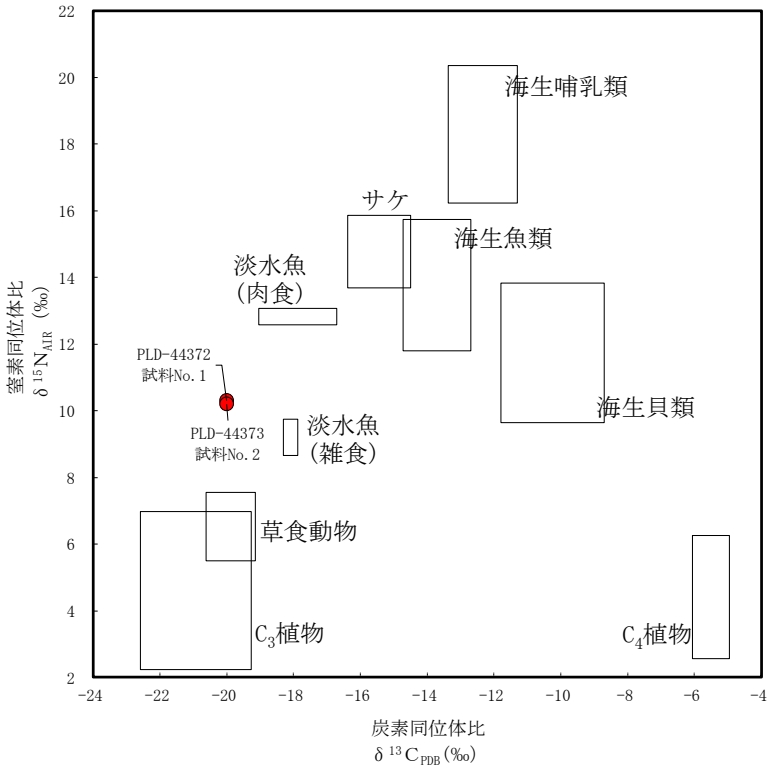


図1　人骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比と推定されるタンパク質源
（米田穣2014に基づき作成）

3-2. 放射性炭素年代測定

海産物依存率と、海洋リザーバー効果の海域差補正値（Δ R）を入力し補正した暦年代値を、表３に示す。表には、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）と、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、海洋リザーバー効果の補正を行った暦年較正結果を示し、図２に海洋リザーバー効果の補正を行った暦年較正結果をそれぞれ示した。

人骨コラーゲンの ^{14}C 年代は、人が摂取した海産物の割合に応じて、海洋リザーバー効果の影響を受けるため、海産物依存率を推定した上で、海洋リザーバー効果の補正が必要である。^{14}C 年代の較正には OxCal4.4 を用い、OxCal に付属する海洋リザーバー効果の補正機能を用いた。較正用データセットには陸産物用の IntCal20 と海産物用の Marine20 を混合させて用い、海産物依存率と、海洋リザーバー効果の海域差補正値（Δ R）を入力することで、海洋リザーバー効果を補正した暦年代を得た。

ΔＲには、韓半島南東岸の値 -296 ± 35 yr（Kong and Lee,2005）を用いて暦年較正を行った。また、海産物依存率は、米田の研究（米田，2005）に準じて、人が摂取したタンパク質が 100％陸産物由来だった場合のコラーゲンの δ^{13}C を -21.0‰、100％海産物由来だった場合を -12.5‰と仮定し、人骨コラーゲンの δ^{13}C から計算した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

４.考察

以下、２σ暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して、測定結果を整理する。

試料 No.1（PLD-44372）は、773-790 cal AD (7.22%) および 821-981 cal AD (88.23%) で、8 世紀後半～10 世紀後半の暦年代を示した。試料 No.2（PLD-44373）は、658-774 cal AD (95.45%) で、7 世紀中頃～ 8 世紀後半の暦年代を示した。試料 No.1 の暦年代は奈良時代～平安時代中期、試料 No.2 は飛鳥時代～奈良時代に相当し、測定結果に幅が見られる結果となった。

表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-44372 試料 No. 1	-19.43 ± 0.21	1185 ± 20	1185 ± 20	Atmospheric data from Reimer et al (2020) & Marine data from Heaton et al (2020):11.8 ± 10% (DeltaR=-296 ± 35 yr) 778-786 cal AD (4.40%) 830-858 cal AD (15.43%) 871-900 cal AD (23.17%) 918-955 cal AD (25.28%)	Atmospheric data from Reimer et al (2020) & Marine data from Heaton et al (2020):11.8 ± 10% (DeltaR=-296 ± 35 yr) 773-790 cal AD (7.22%) 821-981 cal AD (88.23%)
PLD-44373 試料 No. 2	-19.27 ± 0.22	1342 ± 20	1340 ± 20	Atmospheric data from Reimer et al (2020) & Marine data from Heaton et al (2020):11.8 ± 10% (DeltaR=-296 ± 35 yr) 664-701 cal AD (37.65%) 743-770 cal AD (30.62%)	Atmospheric data from Reimer et al (2020) & Marine data from Heaton et al (2020):11.8 ± 10% (DeltaR=-296 ± 35 yr) 658-774 cal AD (95.45%)

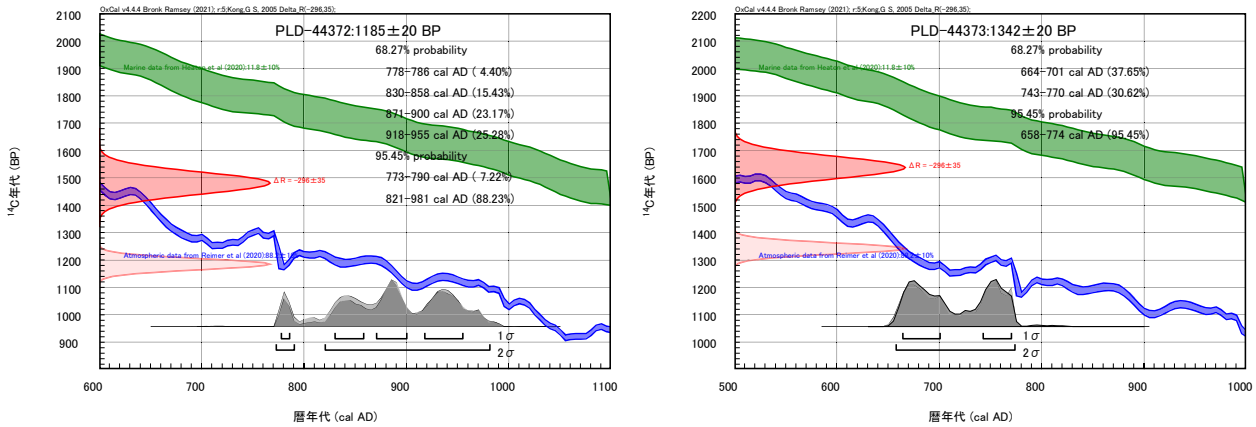


図２　暦年較正結果

引用・参考文献

Ambrose, S.H. (1993) Isotopic analysis of paleodiet: methodological and interpretive conciderations. Sandford, M.K. (ed.) Investigations of ancient human tissue: chemical analysis in anthropology: 59-130, Gordon and Breach Science Pub.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

DeNiro, M.J. (1985) Postmortem Preservation and Alteration of in Vivo Bone Collagen Isotope Ratios in Relation to Palaeodietary Reconstruction. Nature, 317, 806-809.

Heaton, T.J., Köhler, P., Butzin, M., Bard, E., Reimer, R.W., Austin, W.E.N., Bronk Ramsey, C., Grootes, P.M., Hughen, K.A., Kromer, B., Reimer, P.J., Adkins, J., Burke, A., Cook, M.S., Olsen, J. and Skinner, L.C. (2020) Marine20-the marine radiocarbon age calibration curve (0-55,000 cal BP). Radiocarbon, 62(4), 1-42, doi:10.1017/RDC.2020.68. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.68 (cited 12 August 2020)

Kong, G.S and Lee, C.W. (2005) Marine reservoir corrections (ΔR) for southern coastal waters of Korea. The Sea: Journal of the Korean Society of Oceanography, 10(2), 124-128.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 1-33, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

米田　穣 (2014) 炭素・窒素安定同位体比分析. 小竹貝塚発掘調査報告―北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 X― (第三分冊人骨分析編), 16-23, 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.

米田　穣(2005)有珠モシリ遺跡出土人骨における同位体分析.平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究（Ｂ）（２）) 研究成果報告書「北海道続縄文人の系譜論的・生活論的研究―有珠モシリ遺跡出土人骨を中心にして―」(研究代表者　百々幸雄)

Yoneda, M., Uno, H., Shibata, Y., Suzuki, R., Kumamoto, Y., Yoshida, K., Sasaki, T., Suzuki, A. and Kawahata, H. (2007) Radiocarbon Marine Reservoir Ages in the Western Pacific Estimated by Pre-bomb Molluscan Shells. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B: Beam Interactions with Materials and Atoms, 259, 432-437.

玉名平野遺跡群出土人骨の埋葬様態と形態的特徴

出見優人 1)・米元史織 2)3)・星野宙也 1)・松尾樹志郎 1)・足達悠紀 1)・舟橋京子 3)4)

1) 九州大学地球社会統合科学府

2) 九州大学総合研究博物館

3) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

4) 九州大学比較社会文化研究院

はじめに

熊本県玉名市玉名平野遺跡群の調査において弥生時代の甕棺墓と古代の土坑墓からそれぞれ人骨が出土し、調査を担当した熊本県教育委員会よりアジア埋蔵文化財研究センターへ人骨調査の依頼があった。そのため、舟橋京子・田尻義了（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、足達悠紀・蓮田賀子（九州大学地球社会統合科学府）が現地に赴き、人骨の調査および取り上げを行った。人骨はその後、熊本県教育委員会が取り上げを行った弥生時代の人骨と併せて、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院へと搬送され、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、成年人骨について恥骨結合面はBrooks and Suchy(1990)・Sakaue(2006)、耳状面はLovejoy(1985)、歯牙の咬耗は栃原（1957）を用い、乳児の年齢推定はUbelaker（1978)、Scheuer, Musgrave, and Evans（1980）で行った。性別の判定には、頭蓋・骨盤についてBuikstra and Ubelaker(1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第2講座編集の『日本民族・文化の生成2』(1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上(詳細は不明)とする。齲歯の観察基準は石川ほか(1986)に従った。

なお、人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

1. 出土状態

【SK04】

土坑からほぼ全身骨が出土している。頭蓋骨は土坑の北東から出土しており、頭頂部を上方に、顔面を南西側に向けた状態である。下顎骨は咬合面を顔面部側にオトガイを上に向けて出土している。

躯幹骨は、頭蓋骨の南西側から頸椎・胸椎・腰椎・仙骨がほぼ関節状態を保ち連なった状態で出土している。左右肋骨は椎骨の左右に解剖学的位置関係を保った状態で出土している。

上肢は、左鎖骨が近位を西側、遠位を東側に向け、下顎骨の南西側に骨体部を接した状態で出土している。左肩甲骨は左鎖骨の南東側から関節窩を上方に向けた状態で出土している。左肩甲骨の東側から肩甲骨外側縁に一部重なった状態で、左上腕骨が近位を北東に遠位を南西に、前面を上に向けて出土している。左上腕骨とほぼ相対的な位置関係を保って、左尺骨が遠位を西に向け、後面を上にした状態で出土している。左橈骨は近位を北西、遠位を南東に向け後面を上にし、左尺骨の下に重なるように出土している。左前腕は、回内した状態から尺骨遠位側がさらに体軸中心側に落ち込んだ状態である。左前腕の南西側より左手骨が出土している。左寛骨直上から左手根骨および中手骨が出土しており、寛骨の恥骨部に接した状態で第2―4基節骨が近位を上方に、遠位を下方に向けて出土している。したがって、埋葬時に左上腕は内旋し、左肘関節を若干屈曲、前腕を回内し、腰部に手をのせていたものが、軟部組織の腐朽に伴い、基節骨より先が下肢側に落下したと考えられる。

右鎖骨が近位を南側、遠位を北側に向け、下顎骨の西側から前面を上方に向けて出土している。右肩甲骨は下顎骨の西側から関節窩を上に向けた状態で出土している。右上腕骨が右肩甲骨と関節状態を保ち、肩甲骨の西側から近位を北東に、遠位を南西に向けて出土している。右上腕骨遠位南西側から右尺骨が近位を北東に遠位を南西に向けて出土しており、肘関節は関節状態を保ってはいないものの、尺骨と上腕骨との相対的な位置関係は正しい。右橈骨は近位を北西に、遠位を南東に向け、右尺骨と交差するような状態で出土した。右手根骨が右尺骨の南西側から出土している。右手骨は中手骨および手根骨が、右尺骨の南側からまとまっ

て出土している。手根骨と尺骨の位置関係から、右橈骨が軟部組織の腐朽と流入した土によって、西側に転じたものと考えられる。したがって、埋葬時右上腕は内旋し、肘関節を若干屈曲、前腕を回内し腰部付近に手を置いた状態であったと考えられる。

下肢の出土状況については、左右寛骨は右寛骨が仙骨の西、左寛骨が仙骨の東に位置し、それぞれ左右尺骨の遠位側下部から出土した。左右ともに寛骨と仙骨の相対的位置関係は概ね正しいが、仙腸関節は外れた状態である。左右股関節は関節状態を保っている。左大腿骨は左寛骨の南西側から近位を北東に、遠位を南西に向けて出土している。左大腿骨と関節した状態で左脛骨が、左脛骨と関節した状態で左腓骨が出土しているが、左腓骨の近位端が左脛骨の下に入り込んでいる。左脛骨の南西側から左踵骨が内面を上に向け、距骨と関節状態を保って出土している。左踵骨の直下南西側からは左中足骨が数点遠位を南西に向け、長軸を揃えた状態で出土している。右大腿骨は右寛骨の南西側から近位を北東に遠位を南西に向けて出土している。右大腿骨と関節した状態で右脛骨が、右脛骨と関節した状態で右腓骨が、遠位を南西に長軸を揃えて出土している。左右膝関節は関節状態を保っている。中足骨は遠位を南西、近位を北東に向けて出土している。右踵骨は本来の位置よりも東側に 10 ㎝離れた左右脛骨の間から踵部を南に向けて出土しており、右踵骨のさらに東側から右舟状骨・右距骨が出土している。踵骨の西側からは、右第 1 中足骨が遠位を南に、第 2 ないし第 4 中足骨が遠位を南西に向けて長軸を揃えて出土している。右中足骨の南西側から、第 1 基節骨が遠位を南に向けて出土しており、右中節骨も 3 本遠位を南西に向けて出土している。以上のように、中足骨および趾骨はそれぞれ長軸方向を揃えて出土しているものの、足根骨は関節状態を保っていない。

以上のことから、本個体は頭位を北東に向けた仰臥伸展葬と考えられる。加えて、頭は頭頂が上方を向き、上顎部が下顎内側に落ち込んでいること、足は足根骨が脛骨遠位上および一部近位側に大きく動いていることから、側板の長さの狭矮な埋葬施設に埋葬されたと考えられ、遺存しにくい埋葬施設である木棺の存在が想定される。加えて、左右鎖骨が身体の長軸にほぼ並行する形で出土しており、左右肩甲骨の関節窩もほぼ上方を向き上肢を躯体に密着させ肩をすくめたような姿勢で埋葬されていることから、棺幅自体も狭隘であった可能性が想起される。しかし、先述のように右尺骨・橈骨近位が右上腕骨よりも外側に転じており、棺のみを想定した場合棺外に右橈骨・尺骨の近位が出てしまうことになり矛盾が生じる。したがって、上半身を筵のようなもので強く緊縛した上で幅に若干余裕のある木棺に埋葬されていたものと推定される。また下肢に関しては、上半身のように明瞭に緊縛された痕跡は残っていないものの、左右下肢特に下腿部が近接した位置から出土しており、仙腸関節がやや外れていることと併せて考えると、上半身ほどではないものの下肢側も緊縛されていた可能性が考えられる。なお、本人骨の周辺からは木棺に伴うと推定される釘が 2 点出土している。1 点は左上腕骨近位北西側の上腕骨頭より 10 ㎝低い位置から出土しており、もう 1 点は左足根骨の南東側に 10 ㎝ほど離れた位置の、頭蓋上部と同じレベルから出土している。

本土坑は、多種の貝が含まれる貝層を覆土としており、人骨の際まで貝が入り込んでいる。しかし、頭蓋骨周辺および直下は粒度の低い土が占めていて貝はほとんど含まれず、同様に肋骨・胸骨の周辺および直下の土にも貝が含まれない。このことから、棺の存在を想定した場合、棺が腐朽して棺内に貝を含む土砂が流入した際、遺体の頭周辺および上半身付近には直接貝は流入しておらず、貝交じりの土砂は棺内の下半身側に流入したと推定されている。加えて、その際に筵などによる身体の緊縛が残っていたため頭蓋や躯体周辺には貝が流入していないものの、身体周辺部および身体外側部直下即ち上腕と寛骨下には貝が入り込んだと考えられる。なお、棺が腐朽し土砂が流入した段階に関しては、手足の指の骨や右前腕が一見大きく動いているものの、左距骨・踵骨、左中足骨・基節骨や左手の基節骨が関節状態を保ちながら、ある程度まとまった状態で動いていることから、一部軟部組織が遺存している段階であったと推定される。なお、同時期における木棺伸展葬の例として、太宰府市・太宰府史跡第 38 次発掘調査（九州歴史資料館 1977）、筑紫野市・堀池遺跡第 5 次発掘調査（筑紫野市教育委員会 2017）が挙げられる。筑紫野市・堀池遺跡では、鉄釘を使う木棺墓と使わない木棺墓の両方が報告されており、玉名平野遺跡群 SK04 でも木棺の使用を想定することは可能であろう。

須恵器片が右上腕骨の南東側から、土器片が左右大腿骨の間から出土している。

【SJ24】

合口甕棺の上甕および下甕口縁付近から人骨が出土している。頭蓋骨および四肢骨がまとまって出土し、下甕の口縁付近から右脛骨が出土している。頭位は北西であるが、保存状態が良好ではないため、顔面の向きは不明である。左大腿骨は、頭蓋骨の東側から出土し、近位を北東側、遠位を南西側に向けている。右大腿骨は、頭蓋骨南東側の上甕口縁付近から出土し、近位を北西側、遠位を南東側に向けている。左脛骨は頭蓋骨の南東側、右大腿骨の近位端付近から出土しており、近位を北西側、遠位を南東側に向けている。

詳細な埋葬姿勢は、下肢の近遠および位置関係がバラバラで、本来の位置関係を保っていないため不明である。なお、人骨以外に甕棺とは別の土器片や動物骨が頭蓋骨付近から出土している。

2. 保存状態

【SK04】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は極めて良好である。頭蓋骨はほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

							・	・	・						・
M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
	c														

（○歯槽解放、× 歯槽閉鎖、／欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c 齲歯　以下同様）

歯牙の咬耗度は栃原（栃原 1957）の 1°　a-2°　a である。

躯幹骨は、椎骨は完存しており、左肋骨 1 点・右肋骨 9 点その他肋骨片・胸骨片が遺存している。仙骨は第一仙椎から第 3 仙椎部分までと耳状面付近が残存している。

上肢骨の残存状態は以下の通りである。左右鎖骨、左右肩甲骨はほぼ完存している。左右上腕骨は完存している。左橈骨は茎状突起以外ほぼ完存し、右橈骨は完存している。左右尺骨は完存している。右手骨は第 1･2･3･5 中手骨、有頭骨、舟状骨、三角骨、大菱形骨、小菱形骨が遺存している。左手骨は第 1-5 中手骨、舟状骨、三角骨、小菱形骨、月状骨、有鈎骨が遺存している。その他左右不明の指骨が多数遺存している。

下肢骨の残存状態は以下の通りである。左右寛骨はほぼ完存している。左大腿骨は膝蓋面以外ほぼ完存し、右大腿骨は内側顆以外ほぼ完存している。左右膝蓋骨はほぼ完存している。

左脛骨は外側顆以外ほぼ完存し、右脛骨は完存している。左右腓骨はほぼ完存している。左足骨は踵骨、距骨、舟状骨、立方骨、内側楔状骨、中間楔状骨、外側楔状骨、種子骨 1 点、第 1･2･3･4・５中足骨、基節骨 2 点、が遺存している。右足骨は踵骨、距骨、舟状骨、立方骨、内側楔状骨、中間楔状骨、外側楔状骨、第 1･3･4･5 中足骨、第 1・2・3・4・5 基節骨、第 1 末節骨、が遺存している。その他左右不明の中足骨 1 点、末節骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・乳様突起が発達していること、恥骨下角や大坐骨切痕角が小さいことから男性と判定される。年齢は、恥骨結合面が Phase2(Sakaue　2006)、耳状面が Phase1(Lovejoy　1985)、鎖骨の近位端が未癒合であること、歯牙咬耗度が栃原（1957）の 1°　a-2°　a であることから成年前半（20 代前半）であると推定される。

〔特記事項〕

下顎右側第三大臼歯は齲蝕であり、齲蝕の進行度は C3 を示す。下顎の左右犬歯にエナメル質減形成が認められる。左右第 5 基節骨（趾）遠位関節面外側が潰れており、変形が認められる。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が 185mm、頭蓋最大幅が 148mm であり、比較群中で最大の値を示す一方、Ba-Br 高は 131

㎜と比較群中でも小さい値を示す。頭長幅示数は 80.0 で短頭であり、比較群中でも最大の値を示す。一方、頭長高示数は 70.8 で中頭、頭幅高示数は 88.5 で平頭であり、それぞれ比較群中において最小の値を示す。中顔幅は 105㎜ であり、比較群中でも大きい値を示す。頬骨弓幅は 138㎜ であり、比較群中でも小さい値を示す。顔高は 110㎜ であり、比較群中において最小の値を示す。上顔高は 62㎜ で比較群中でも最小の値をとる。ウィルヒョウ顔示数は、104.7 で西北九州弥生人骨と同じ値で、比較群中において最小の値をとり、過低顔を示す。ウィルヒョウ上顔示数は 59.0 で比較群中において最小の値をとり、過低上顔を示す。眼窩幅は 41㎜ で、比較群中で最小の値を示す。眼窩高は 34㎜ で、比較群中で高い値を示す。眼窩示数は 82.9 で中眼窩を示す。鼻幅は 25㎜ であり比較群中で最小の値を示し、鼻高は 49㎜ で平田遺跡弥生人骨と同じ値を示し、比較群中で最小の値をとる。鼻示数は 51 で広鼻であり、比較群中でも小さい値を示す。全側面角は 79° で突顎であり、比較群中において最小の値を示す。歯槽側面角は 81° で中顎であり、比較群中において中間の値を示す。鼻根最小幅は 7㎜ で、比較群中で最小の値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が 31㎜ であり、比較群中でも小さい値を示す。下顎枝高は、55㎜ であり、比較群中において中間の値を示す。下顎枝幅は 37㎜ であり、比較群中で最大の値を示す。

上腕骨は、最大長が 295㎜ で比較群中において小さい値を示す。骨体最小周が 66㎜ で、比較群中において最大の値を示す。

橈骨は、最小周が 44㎜、骨体横径が 18㎜、骨体矢状径が 13㎜ であり、最小周は津雲縄文人骨と同じ値、骨体横径と骨体矢状径は比較群中において最大の値を示す。骨体断面示数は 72.2 であり、比較群中において中間の値を示す。

尺骨は、最大長が 248㎜ で九州現代人骨に次いで 2 番目に小さい値を示す。最小周が 39㎜ であり、比較群中において最大の値を示す。尺骨矢状径が 14㎜ であり、比較群中において大友弥生人骨に次いで 2 番目に大きい値を示す。尺骨横径は 16㎜ で、比較群中において最小の値を示す。骨体断面示数は 87.5 で比較群中において大きい値を示す。

大腿骨は、最大長が 414㎜ で九州現代人骨に次いで 2 番目に小さい値を示す。骨体上横径が 33㎜、骨体上矢状径は 23㎜、骨体上断面示数は 92.5 で、骨体上横径は比較群中において最大の値を示すものの、骨体上矢状径と骨体上断面示数はそれぞれ最小の値を示す。骨体中央部横径は 27㎜、骨体中央部矢状径は 25㎜、骨体中央周は 84㎜ である。骨体中央部矢状径は比較群中において最小の値を示し、他の 2 つも比較群中では小さい値を示す。左右ともに大腿骨の粗線の突出は明瞭ではないため、柱状性は強くなく、大腿骨上部は扁平性が強い。

脛骨は、最大長が 345㎜ で比較群中において中間の値を示す。栄養孔位最大径は 34㎜ で比較群中において九州現代人骨に次いで 2 番目に小さい値を示す。栄養孔位横径は 26㎜ で比較群中において最大の値を示す。栄養孔位周は 95㎜ で比較群中において中間の値を示す。最小周は 75㎜ であり、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位断面示数は 76.5 で比較群中において九州現代人骨に次いで 2 番目に大きい値を示す。ヒラメ筋線の発達や鉛直線は不明瞭である。

【SJ24】

〔人骨所見〕

本人骨の遺存状態は良好ではない。頭蓋骨は右頬骨の一部・右の錐体部・下顎骨のオトガイ孔付近が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	m_2	/	/	/	/	/	/	/	/	m_2

（○歯槽解放、× 歯槽閉鎖、／欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c 齲歯　以下同様）

上肢骨は、左肩甲骨の関節窩から外側縁にかけての部分・左上腕骨・左右尺骨の骨幹部が遺存している。下肢骨は、左右大腿骨・左脛骨の骨幹部および右脛骨骨幹部の近位側 1/2 が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、下顎第 1 大臼歯の歯牙形成 (Ubelaker 1978)、大腿骨骨幹部の長さ (Scheuer et al 1980) から生後 6 か月から 9 か月の乳児であると想定される。

3. 形質的特徴の検討

▽比較分析

以下に、玉名平野遺跡 SK04 の形質的特徴の検討を行う。本遺跡から出土した人骨は 1 体のみであり、本来形質的特徴の比較分析は、集団を代表させるに足る個体数を用いて行うべきである。しかし、当該地域、さらには本個体の所属年代である 7-9 世紀の資料は極めて少なく、その形質的特徴を明らかにするために、この 1 個体を現時点でどのように位置づけることができるかを検討する意味はあると考える。したがって、以下本遺跡出土人骨と比較群の平均値との比較を行っていく。

1. 単変量解析

玉名平野遺跡群 SK04 人骨について、頭蓋骨と顔面部の形質的特徴を示す頭長幅示数・上顔示数・眼窩示数・鼻示数を用いて単変量解析を行った。

【SK04】

図 1 は縦軸に頭長幅示数、横軸に上顔示数を設定したものである。図 2 は縦軸に眼窩示数、横軸に上顔示数を設定したものである。図 3 は縦軸に眼窩示数、横軸に鼻示数を設定したものである。玉名平野遺跡は個体の測定値であるため比較群中においてやや外れた値を示すが、その特徴としては、上顔示数が低く、頭長幅示数が高い、すなわち顔は低く、頭蓋骨の形態は幅が広く縦に短いことがわかる。また、眼窩示数は大きく、鼻示数は小さいことから、眼窩は高く、鼻腔の幅もやや狭い。

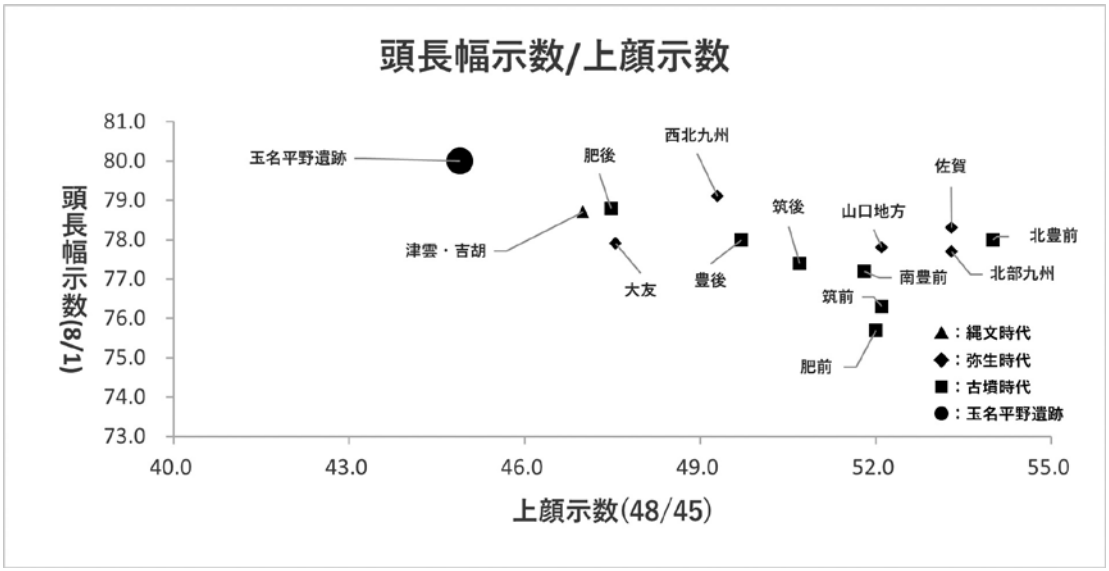


図 1　頭長幅示数 / 上顔示数

先述したように本遺跡と同時期の古人骨の検出例は少なく、比較に用いた資料は縄文・弥生・古墳時代の資料であるが、顔の低さにおいては縄文時代の人骨や西北九州の弥生時代人骨や肥後地域の古墳時代人に類似している。しかし、眼窩や鼻腔は幅が狭いため、これらの諸径を示数でみるといわゆる渡来的といわれるような顔の高い集団と類似する傾向を示す。いわゆる渡来的な形質と縄文的な形質のハイブリット的な様相を示し、顔面部の特徴に関してはこれまで報告されてきたような肥後地域の古墳時代人とは傾向がやや異なると言えよう。また、頭長幅示数に関しては幅径が大きく短頭傾向が強い。日本人の形質における時代変化の１つの特徴として、中世に著しく長頭化し、その前後の時期は中頭や短頭であることが知られている（鈴木 1983)。1 個体の計測値であるため極端な傾向を示している可能性はあるが、本個体の短頭化傾向は強く（頭長幅示数 80.0)、現代的ともいえる値を示している（鈴木 1983)。古墳時代以降近畿地方の人の短頭化傾向が強いこと（池田 1981、Doi and Tanaka1987）や、乳幼児期の栄養状態と関連する可能性が高いこと(Kouchi1983,1986）が知られており、このいずれかの要素と関連する可能性も考えられる。

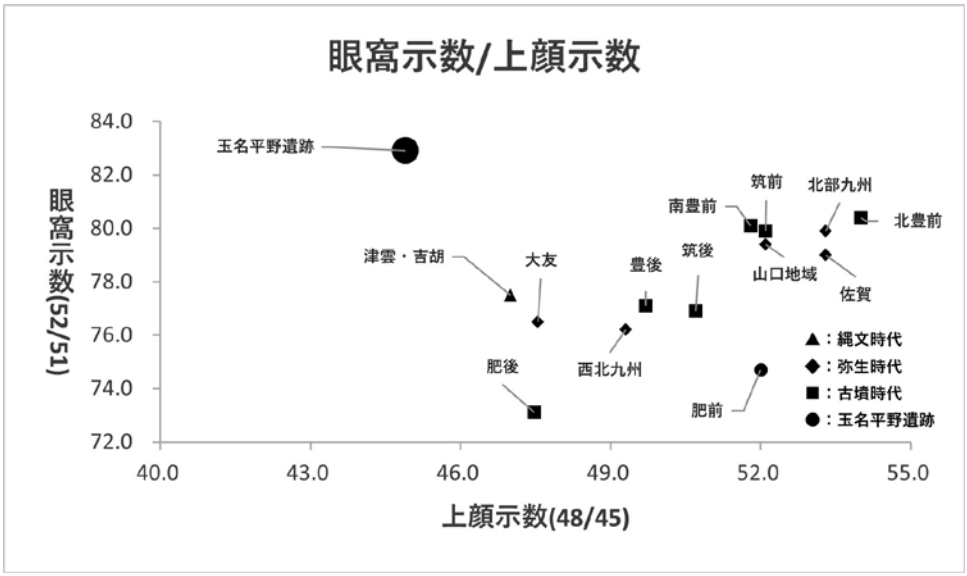


図２　眼窩示数 / 上顔示数

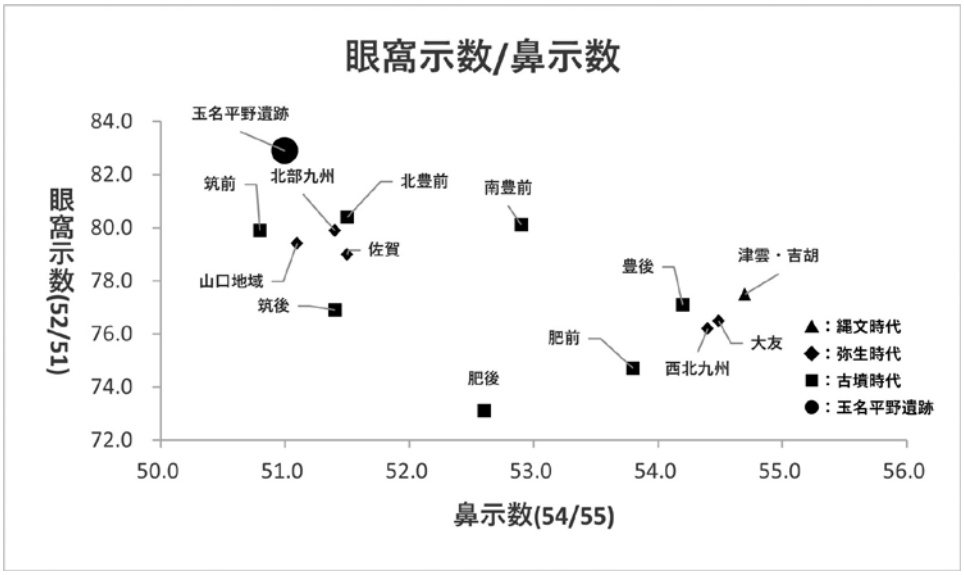


図３　眼窩示数 / 鼻示数

2.　主成分分析

玉名平野遺跡群 SK04 人骨について、頭蓋 9 項目（頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br 高・頬骨弓幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高）を用いて主成分分析を行った。

表 1　主成分負荷量

主成分負荷量			
	1	2	3
1. 頭蓋最大長	0.060	0.434	0.844
8. 頭蓋最大幅	-0.667	0.123	0.597
17.Ba-Br 高	0.876	-0.093	0.233
45. 頬骨弓幅	0.108	-0.672	0.623
48. 上顔高	0.903	0.274	-0.244
51. 目窩幅（左）	0.794	-0.496	0.169
52. 目窩高（左）	0.450	0.837	0.160
54. 鼻幅	0.664	-0.454	0.026
55. 鼻高	0.847	0.333	0.087
固有値	4.034	2.001	1.632
寄与率（%）	44.825	22.230	18.137

【SK04】

第一主成分（X 軸：固有値 4.034, 寄与率 44.824%）は頭蓋最大幅と負の相関を、それ以外の項目と正の相関を示す。特に頭蓋最大幅と強い負の相関を示し、Ba-Br 高や上顔高、鼻高と強い正の相関を示す。概ね第一主成分は、値がプラスになるほど頭蓋骨全体のサイズが大きい、サイズファクターを示すが、中でも最大幅の値が大きいとマイナスの値が大きくなり、Ba-Br 高や上顔高、鼻高の値が大きいとプラスの値が大きくなる。

第二主成分（Y 軸：固有値 2.001, 寄与率 22.230%）は Ba-Br 高・頬骨弓幅・眼窩幅・鼻幅と負の相関を、それ以外の項目と正の相関を示す。特に眼窩高と強く正の相関を、頬骨弓幅とは強い負の相関を示すので、図の上方に位置するほど高眼窩であることを示している。

図 1 をみると、第一象限にいわゆる渡来的形質の弥生時代各集団と、古墳時代にもその影響を引きついだとされる（Doi and Tanaka1987）豊前や筑前地域の古墳時代人が位置し、第 3 象限に縄文時代と弥生時代の全体的に低くて幅広い顔面部の形質（中橋 1996）をもつ集団が位置する。その中で、本個体は第 2 象限に位置し、単変量解析と同様の結果ではあるが、頭蓋最大幅が大きく上顔高が低く、眼窩幅と鼻幅が小さいため相対的に眼窩高や鼻高の径が大きくなるという特徴を示し、比較集団のいずれにも完全に近似した傾向は示さないことがわかる。

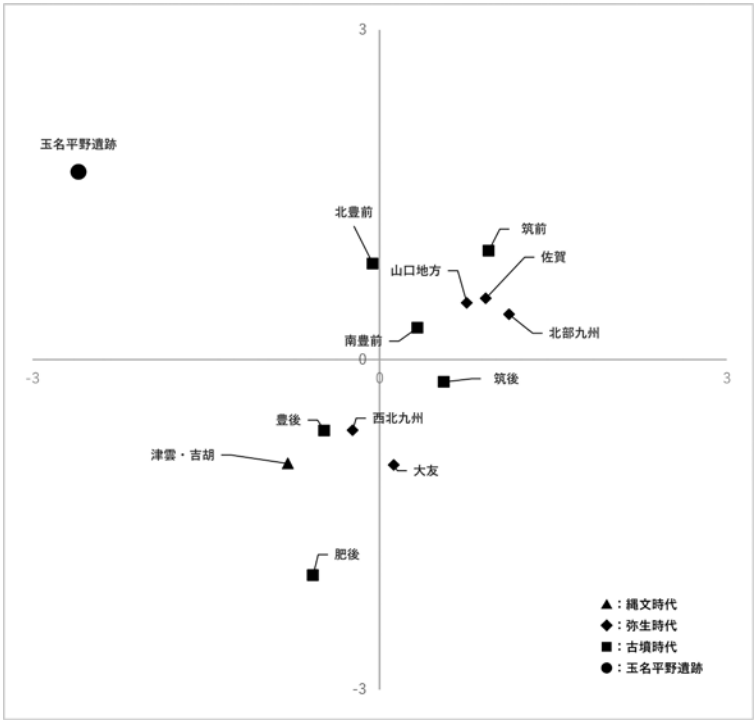


図 4　主成分分析（X 軸：第一主成分 , Y 軸：第二主成分

単変量と多変量解析の結果を総合すると、頭径の特徴としては短頭傾向が強く、顔面形態は顔が低い一方で、眼窩や鼻は相対的に高いという、いわゆる渡来的な形質と縄文的な形質のハイブリット的な様相を示す。これは、同時代の比較資料がない、という点も大きな要因であるが、西日本の古墳時代のように人骨形質の地域性が弥生時代の混血効果の濃淡の延長線上にあるような様態（田中 2014）の範囲内に収まらなくなっているともいえよう。また、本個体に強くみられる短頭傾向は、古墳時代以降近畿地方を中心として広がる形質的特徴でもあり、玉名地方は郡衙が造営されるなど地域の政治的拠点であったという点も、上記のような形質的特徴を有する人の存在と関連する可能性がある。

3.　身長の比較

大腿骨最大長にPearsonの身長推定式を適用して身長を算出した。算出できたのは男性一体（SK04人骨）のみであり、計測可能な左大腿骨最大長の値を示している。推定身長は159.1cmであり、他の集団と比較したところ、津雲・吉胡などの縄文時代人骨、吉母浜・材木座などの中世人骨と近い値を示し、北部九州・山口地域の弥生時代人よりも低い。単変量解析の項で先述した、短頭化傾向と栄養状態の関連は、短頭化と高身長化に相関があることから指摘されたことであり（Kouchi 1983、1986）、玉名平野SK04は高身長とは言えないことから、本分析個体の短頭化に関しては、栄養状態の影響は低い可能性がある。

表２　身長の比較（男性）

		*: 藤井の式より算出 /**: 右大腿骨平均最大長より計算		男性	（資料数）	女性	（資料数）
玉名平野遺跡群			Pearson	159.1	1	-	-
		*	藤井	157.1	1	-	-
（縄文）	津雲・吉胡			159.3	35	147.5	34
	津雲	**	[清野・平井 1928]	159.9	13	147.3	16
	吉胡	**	[石沢 1931]	158.9	22	147.7	18
	北部九州			159.2	8	150.5	7
	関東	*	[平本 1972]	159.1	11	148.1	9
	中・後・晩期		[小片 1981]	159.6	33	149.2	25
（弥生）	北部九州・山口			162.6	129	151.3	87
	北部九州			162.1	80	151.2	52
	山口			163.3	49	151.4	35
	西北九州		[内藤 1971]	158.8	16	147.9	8
	大友		[松下 1981]	159.1	15	149	2
	広田・鳥ノ峯		[九州大学 1988]	154	14	142.8	10
（古墳）	北九州・山口			162.8	40	150.2	15
	南九州			158.3	7	146.8	2
	中国			159.1	14	148.7	8
	近畿			160.8	17	146.7	4
	関東・東北			162.1	28	149.7	9
（中世）	吉母浜		[中橋・永井 1985]	159.7	18	146.5	22
	材木座		[鈴木 1956]	159.7	10	146.9	3
（江戸）	天福寺		中橋 1987]	159.4	24	146.5	20
	深川		[遠藤ほか 1967]	159.1	95	146.4	45
（近代）	北九州			157.7	37	146.3	10
	関東	**	[平本 1972]	158	43	145.6	43
（現代）	1970年日本		[平本 1972]	166.7	771	154.6	832

4.　まとめ

玉名平野遺跡群出土人骨の特徴は以下の通りである。

・　本遺跡出土人骨は全部で 2 体であり、成年男性 1 体 (SK04)、性別不明の乳児 1 体 (SJ24) である。

・　埋葬姿勢に関しては、SK04 号人骨（成年男性）は木棺に少なくとも上半身は筵などで緊縛された仰臥伸展葬が埋葬されたものと考えられる。SJ24 号人骨（乳児）が合口甕棺に埋葬され、埋葬姿勢は不明である。

・　SK04 号人骨（成年男性）は身長が 159.1 ㎝程度である。下顎右側第三大臼歯は C3 度の齲蝕であり、下顎の左右犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、左右第 5 基節骨（趾）遠位関節面外側が潰れており、変形が認められる。

・　今回形質的特徴の検討を行った SK04 号人骨（成年男性）は、頭径の特徴としては短頭傾向が強く、近畿地方の影響を受けたような要素もみられる一方で顔面形態は顔が低く、眼窩や鼻は幅径が小さいために相対的に高くなるという、いわゆる渡来的な形質と縄文的な形質のハイブリット的な様相を示す。同時期の比較資料が少なく本個体の形質的特徴がどのように位置づけられるのかは今後資料の増加を待ちたい。しかし、当該時期においては、郡衙の造営にみられるような政治的な人の移動や交流が頻出しており、人骨形質の地域性が弥生時代の混血効果の濃淡の延長線上にあるような様態（田中 2014）の範囲内に収まらなくなっていると考えることが可能であろう。

【謝辞】

末筆ながら、人骨調査の機会を与えていただいた熊本県教育委員会諸氏に深謝の意を表します。また、九州大学共創学部の学生である、有尾緒美・上杉まり・小高蒼大・佐々木真子・田代魁斗・筒井優菜・吉村篤哉には、今回の調査にあたって人骨のクリーニング作業に従事していただきました。ここに感謝の意を表します。

《文献》

阿部英世　1955 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2

鑄鍋命達　1955 「九州人下肢骨の研究」『人類学研究』2

池田次郎　1981 「異説　弥生人考」『季刊人類学』 12：3-63

石川梧・小椋秀亮・塩田重利・砂田今男ほか　1986 『新歯学大辞典ポケット版』 永末書店

大堀正俊　1958 「山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨について」 人類学研究 5

金高勘次　1928 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』43

九州大学医学部解剖学第 2 講座編　1988 『日本民族・文化の生成 2』

九州歴史資料館 1977『大宰府史跡　昭和 51 年度発掘調査概報』

清野謙次・宮本博人　1926 「津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第 2 部　頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41

鈴木尚　1983 『骨から見た日本人のルーツ』岩波新書

専頭時義　1957 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4

竹中正巳　2001 「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨」『えびの市埋蔵文化財調査報告書第 29 集　島内地下式横穴墓群』 pp. 1-75

竹中正巳　2010 「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨―100 号墓～ 112 号墓、116 号墓、125 ～ 127 号墓から出土した人骨―」『えびの市埋蔵文化財調査報告書第 49 集　島内地下式横穴墓群Ⅱ』 pp. 121-156

田島達也　1990 「第 6 章 前腕と手 .」『神中整形外科学各論』 南山堂

田中良之　2014 「いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像」下條信之編 『列島初期稲作の担い手は誰か』すいれん舎　pp.3-48
筑紫野市教育委員会 2017『筑紫野市文化財調査報告書 112：堀池遺跡第 3・5・6 次発掘調査』
栃原博 1957 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31
土肥直美　1996 「人骨の骨格案内―骨が語る人間の履歴」『人間史をたどる―自然人類学入門―』 朝倉書店
内藤芳篤・栄田和行　1967 「埋葬・人骨．深掘遺跡．」『人類学考古学研究報告』
内藤芳篤　1971 「西北九州出土の弥生人骨」『人類学雑誌』79
中橋孝博　1993 「福岡県筑紫野市、隈・西小田地区遺跡群出土の弥生人骨」『筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第 38 集』 筑紫野市教育委員会
中橋孝博　1996 「第 4 章　古人骨から探る日本人のルーツ―日本列島人 50 万年の歩み―」片山一道編 『人類史をたどる―自然人類学入門―』朝倉書店 pp.100-143
中橋孝博・永井昌文　1985 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」『吉母浜遺跡』 下関教育委員会
中橋孝博・永井昌文　1989 「弥生人の形質、男女差、寿命」『弥生文化の研究 1』
雄山閣出版
原田忠昭　1954 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」『人類学研究』1
松下孝幸　1981 「佐賀県大友遺跡出土の弥生人骨」『大友遺跡』 呼子町郷土史研究会
Brooks S. and Suchey J.M. 1990. Skeletal age determination based on the os pubis: Acomparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. Human Evolution 5.
Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
Doi N., and Tanaka Y., 1987 A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun skulls from Western Japan. Journal of Anthropological Science, Nippon 93:325-343
Kouchi M. 1983 Geographic variation in modern Japanese somatometric data and its interpretation. Bulletin the University Museum, the University of Tokyo 22:1-102
Kouchi M. 1986 Geographic variation in modern Japanese somatometric data: A secular change hypothesis. Bulletin the University Museum, the University of Tokyo 27:93-106
Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. 1985. Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68.
Sakaue K. 2006. Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. Anthropological Science 114
Scheuer, J.L., Musgrave, J.H. and Evans, S.P. (1980). The estimation of late fetal and perinatal age from limb bone length by linear and logarithmic regression. Annals of Human Biology 7: 257-265
Ubelaker, D.H. (1978). Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis and Interpretation. Washington,DC：Smithsonian Institute Press

表３　主要頭蓋計測項目の平均値比較（男性）

♂		玉名平野遺跡群		平田遺跡		筑前 1)		筑後 1)		肥前 1)		北豊前 1)		南豊前 1)		豊後 1)		肥後 2)	
				（弥生）		（古墳）		（古墳）		（古墳）		（古墳）		（古墳）		（古墳）		（古墳）	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	1	185	1	185	16	186.2	14	184.4	4	184.3	18	180.2	9	182	13	180.4	6	179.83
8	頭蓋最大幅	1	148	1	137	18	142	14	142.5	5	139.8	21	141.4	9	140.3	16	140.4	6	143.17
17	Ba-Br 高	1	131	1	139	13	136.8	11	136.4	6	132.3	13	135.2	6	136	12	132.6	7	135.29
8/1	頭長幅示数	1	80	1	74.1	14	76.3	13	77.4	3	75.7	18	78	9	77.2	13	78	4	78.793
17/1	頭長高示数	1	70.8	1	75.1	10	73.6	10	73.9	4	72.3	11	74.5	6	74.8	11	73.4	5	76.645
17/8	頭幅示数	1	88.5	1	101	12	95.3	11	95.7	5	94.6	13	96	6	95.4	12	95	5	94.669
45	頬骨弓幅	1	138	-	-	17	139.4	6	140.3	7	139.4	11	136.9	5	137.8	10	138.5	5	141.4
46	中顔幅	1	105	-	-	21	105.2	9	104.1	9	104.4	18	104.6	6	104.7	16	101.8	8	103.63
47	顔高	1	110	-	-	12	121.3	5	120.6	5	118.6	7	124.7	3	122.3	11	118.3	7	113.86
48	上顔高	1	62	1	69	19	72.9	9	72.1	7	72.4	16	72.9	6	71.7	17	69.4	6	66.5
47/45	顔示数（K）	1	79.7	-	-	11	85.9	4	84.4	4	84.1	5	90.9	3	89.9	7	83.5	4	82.064
47/46	顔示数（V）	1	104.8	-	-	12	113.7	5	116.3	5	113.8	7	115.8	3	118.3	9	114.6	6	111.17
48/45	上顔示数（K）	1	44.9	-	-	16	52.1	6	50.7	6	52	10	54	5	51.8	10	49.7	4	47.472
48/46	上顔示数（V）	1	59	-	-	19	68.9	9	69.4	7	69.3	16	69.5	6	68.5	16	68.2	6	64.325
51	眼窩幅（左）	1	41	-	-	16	43.9	8	43.6	6	45.3	17	42.6	5	42.4	13	42.8	7	43.571
52	眼窩高（左）	1	34	1	32	17	34.9	8	33.5	6	33.8	17	34.2	6	33.8	13	33	6	32.167
52/51(L)	眼窩示数（左）	1	82.9	-	-	15	79.9	8	76.9	6	74.7	17	80.4	5	80.1	13	77.1	6	73.099
54	鼻幅	1	25	1	27	19	26.5	11	26.7	8	26.8	16	25.9	6	27	16	26.8	6	26.333
55	鼻高	1	49	1	49	19	52.5	10	52.1	9	51	16	50.5	6	51	18	49.7	8	49.75
54/55	鼻示数	1	51	1	55.1	19	50.8	10	51.4	8	53.8	15	51.5	6	52.9	16	54.2	6	52.6

♂		島内 3)		山口地方 4)		北部九州 4)		佐賀 1)		大友 5)		西北九州 6)		津雲・吉胡 7)		西南日本 8)	
				（弥生）		（弥生）		（弥生）		（弥生）		（弥生）		（縄文）		（現代）	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	20	181.8	61	182.9	118	183.7	26	183	24	183.7	21	182.8	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	22	143.9	66	142	117	142.4	22	143.6	24	143.3	20	144.9	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br 高	27	137.4	45	135.2	101	137.7	14	137.5	20	135.6	15	134.6	26	135.5	108	139.3
8/1	頭長幅示数	13	78.4	59	77.8	104	77.7	21	78.3	21	77.9	20	79.1	55	78.7	108	76.9
17/1	頭長高示数	17	75.8	43	74.3	91	75.3	14	75.1	18	94.4	15	74.1	25	73.3	108	76.9
17/8	頭幅示数	20	96.2	45	94.8	91	97	13	95.4	7	83.85	14	93.1	26	93.6	108	100.1
45	頬骨弓幅	10	139.8	44	139.2	103	140	14	138.4	9	140.7	12	138.4	16	141	106	134.5
46	中顔幅	20	101.1	46	104.2	114	104.7	24	105.2	24	101.8	17	105	31	103.8	107	99.9
47	顔高	24	116.8	27	121.4	80	123.8	5	126.6	18	118.7	14	117.1	25	115.7	66	122.2
48	上顔高	28	69.3	38	72.7	114	74.8	23	73.9	16	66.63	17	68.1	28	66.3	92	71.8
47/45	顔示数（K）	5	86.9	24	86.8	71	88.4	4	88.6	7	83.85	12	84.6	10	80.4	64	91.4
47/46	顔示数（V）	14	116.5	27	115.4	74	118.4	5	118.6	17	116.6	14	111.78	18	110.4	65	122.2
48/45	上顔示数（K）	6	51.2	34	52.1	95	53.3	13	53.3	7	47.55	12	49.3	10	47	90	53.5
48/46	上顔示数（V）	17	69.1	37	69.4	105	71.5	22	70.5	15	64.46	17	64.8	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	27	42.5	39	43.6	89	43.2	20	43.8	23	43.96	15	43.1	40	43.2	108	43
52	眼窩高（左）	26	33.7	41	34.6	93	34.5	20	34.5	24	33.54	15	32.8	38	33.2	108	34.4
52/51(L)	眼窩示数（左）	21	79.2	38	79.4	86	79.9	20	79	22	76.48	15	76.2	32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	28	27.3	43	26.9	117	27.1	20	27	25	27.36	16	27.7	36	26.5	108	25.9
55	鼻高	30	49.8	42	52.8	116	52.8	21	52.2	23	50.74	16	51	30	48.1	108	52.2
54/55	鼻示数	22	55	41	51.1	113	51.4	19	51.5	22	54.49	16	54.4	27	54.7	108	49.8

1) Doi and Tanaka(1987) 2) 九州大学医学部解剖学第２講座（1987）3) 竹中（2001、2010）　4) 中橋・永井（1989）5）松下（1981）6) 内藤（1971）　7) 清野・宮本（1926），金高（1928）
8) 原田（1954）

表４　四肢骨計測値の比較（男性、左）

♂		玉名平野遺跡群		北部九州（古墳）		南部九州（古墳）		1）北部九州（弥生）		2）山口（弥生）		3）大友（弥生）		4）津雲（縄文）		5）九州（現代）	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨																	
1	最大長	1	295	15	298.9	4	283.5	22	302.6	29	305	11	291	36	284.3	106	295.3
2	全長	1	291	12	291.8	3	280.3	17	296.8	23	300	8	286	35	280.6	106	290.6
5	中央最大径	1	24	33	23.2	20	22.3	76	23.3	61	23.1	34	23.4	50	24.1	106	21.9
6	中央最小径	1	20	33	17.5	20	17.1	76	17.4	61	17.6	33	17.6	50	17.8	106	16.9
7	骨体最小周	1	66	47	64	20	61.2	81	63.9	66	63.7	33	63.5	50	64	106	61.8
7 a	中央周	1	73	34	67.4	19	63.6	75	67.8	57	67.5	33	68.2	50	69.3	106	63.7
6/5	骨体断面示数	1	83.3	32	75.6	20	76.8	76	74.9	61	76.5	33	75	50	73.9	106	79.1
7/1	長厚示数	1	22.4	11	21.3	3	22.1	22	21.3	28	20.8	11	22.4	36	22.7	106	20.9
橈骨																	
1	最大長	-	-	12	226.6	7	224.6	37	236.5	27	237	6	232	27	230.6	64	219.9
2	機能長	1	217	11	216.4	7	210.6	28	220	24	222	9	216	28	217.4	64	208.2
3	最小周	1	44	30	41.6	29	41	78	43.1	51	42.5	15	44.7	38	44	63	40.1
4	骨体横径	1	18	35	17.1	33	16.1	79	17.2	51	17.4	25	17.1	42	17.1	63	16
4a	骨体中央横径	1	17	-	-	-	-	50	16	33	16	25	16.4	-	-	63	15.2
5	骨体矢状径	1	13	35	12.2	30	11.9	79	12.5	51	12	25	12.4	42	12	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	1	13	-	-	-	-	50	12.6	34	12.4	26	12.4	-	-	63	11.9
3/2	長厚示数	1	20.3	10	19.7	6	18.6	28	19.8	24	19.4	5	20.5	27	20.5	61	20.4
5/4	骨体断面示数	1	72.2	35	71.5	29	74.3	79	72.6	51	69.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4
5a/4a	中央断面示数	1	76.5	-	-	-	-	50	78.6	33	77.8	25	75.2	-	-	-	-
尺骨																	
1	最大長	1	248	5	250.2	-	-	12	253.2	26	259	9	250	19	249.1	62	236.2
2	機能長	1	216	7	226	8	210.5	15	224.7	21	226	13	223	25	219.7	64	209.2
3	最小周	1	39	17	35.8	19	35.1	63	37.4	35	38.2	22	37.2	34	37.7	65	35.8
11	尺骨矢状径	1	14	28	13.4	19	13.2	100	13.2	49	13.2	26	15	50	14.3	63	12.8
12	尺骨横径	1	16	28	17.1	19	16.2	100	17.6	49	17.2	26	17.2	50	16.3	64	16.5
3/2	長厚示数	1	18.1	6	16.7	8	16.5	15	16.8	21	17.2	13	16.8	25	17.4	63	17
11/12	骨体断面示数	1	87.5	27	78.1	18	81.1	100	75.4	49	77.2	26	88	50	88.5	63	74.9
大腿骨																	
1	最大長	1	414	37	429	18	414.7	60	430.9	37	434	15	420	19	414.1	59	406.5
2	自然位長	1	407	21	426.7	8	419.5	18	427.7	26	433	17	414	19	411	59	403.2
6	骨体中央部矢状径	1	25	94	28.8	59	27.7	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29	59	26.5
7	骨体中央部横径	1	27	95	27.4	60	25.1	166	28	72	27.2	42	26.4	47	26	59	25.6
8	骨体中央周	1	84	88	88.4	57	83.4	161	90.8	72	88.9	41	87	47	87.4	59	82.4
9	骨体上横径	1	33	75	32.1	31	29.9	115	32.6	74	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10	骨体上矢状径	1	23	75	25.6	28	24.2	115	26.2	74	26	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2	長厚示数	1	20.6	21	20.5	7	20.2	18	21.4	26	20.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7	骨体中央断面示数	1	92.6	94	105.3	57	110.9	162	106.4	72	108	41	109	47	111.8	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	1	69.7	74	79.7	28	80.9	115	80.5	74	80	39	80.1	43	83.1	58	82.8
脛骨																	
1	全長	1	334	16	336.3	4	322.5	27	345.6	19	351	10	345	20	340	61	320.3
1 a	最大長	1	345	20	341.6	7	333.7	52	350.5	21	357	11	355	22	343.6	60	326.9
8	中央最大径	1	30	40	29.7	30	29.2	74	32	36	30.6	43	31	46	32.3	61	27.8
8a	栄養孔位最大径	1	34	63	34.7	43	33.2	153	36.5	60	35.7	35	34.5	38	35.2	60	30.6
9	中央横径	1	21	41	21.7	32	20.8	72	22.9	36	22.3	43	21.4	46	20.4	61	21.1
9a	栄養孔位横径	1	26	63	24.1	43	22.4	153	25.3	59	25.1	36	23.3	38	22.2	61	23.7
10	骨体周	1	80	39	81.4	30	79.1	74	86.5	36	83.6	41	83.4	45	84.5	62	78.4
10a	栄養孔位周	1	95	63	94	43	88.1	151	96.9	58	95.5	34	92.6	38	92.8	61	88.9
10b	最小周	1	75	59	75.1	25	73	122	78.4	63	75.4	38	75.6	41	76.7	60	71.3
9/8	中央断面示数	1	70	40	73.4	30	71.6	74	72.2	36	73	43	69.1	46	63.3	61	76.1
9a/8a	栄養孔断面示数	1	76.5	63	69.9	42	67.8	152	69.5	59	70.5	35	67.7	38	63	60	77.5
10b/1	長厚示数	1	22.5	16	22.2	3	21.6	26	22.7	19	21.5	10	21.9	20	22.9	60	22.4
腓骨																	
1	最大長	1	333	2	332.5	-	-	8	347.9	14	344	-	-	13	329.5	58	322.9
2	中央最大径	1	15	9	16.6	1	15	46	17	34	16.8	-	-	44	17.8	59	14.5
3	中央最小径	1	13	8	11.4	1	12	46	11.6	34	11.4	-	-	44	12.2	59	10
4	中央周	1	46	9	46.2	1	46	47	47.2	34	47.2	-	-	44	51.3	59	41.5
4a	最小周	1	41	12	37	1	29	24	39.7	25	40.1	-	-	29	39.2	59	35.6
3/2	中央断面示数	1	86.7	8	67.6	1	80	46	68.3	34	67.9	-	-	44	68.6	59	69.5
4a/1	長厚示数	1	12.3	2	11.7	-	-	8	11	13	11.8	-	-	13	12	58	11.1

1）中橋・永井（1989）　2）松下（1981）　3）清野・平井（1928）　4）阿部（1955）・鑄鍋 (1955)、　5）専頭 (1957)・溝口 (1957)

表５　下顎骨計測値の比較（男性）

♂		玉名平野遺跡群		隈・西小田		北九州		土井ヶ浜 1)		深堀 2)		津雲		吉母浜 3)		西南日本	
				(弥生)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(中世)		(近代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
65	下顎頭間幅	1	125	18	135.3	49	132.9	35	131.2	3	127.3	30	131.2	18	122.7	85	123.7
66	下顎角幅	1	105	13	111.5	33	108.4	42	106.8	-	-	46	103.1	19	102.8	86	97.1
68	下顎長	1	74	16	75	44	75.1	42	76	3	75.3	46	75.9	19	73.3	86	65.2
69	オトガイ高	1	31	32	35.6	89	35.7	47	33.3	3	30.7	31	32.3	16	32.1	85	35.6
70	下顎枝高 (左)	1	55	18	64.1	26	64.5	45	62.2	3	61	38	62	15	59.9	87	59.6
71	下顎枝幅 (左)	1	37	26	36.5	46	37.4	54	36.4	3	34.3	53	33.8	19	35.9	87	34.7
71/70	下顎枝示数	1	67.3	18	56.7	25	59.7	44	58.5	3	56.4	38	54.9	15	61.2	86	58.5
79	下顎枝角	-	-	15	121.9	51	120.8	43	123.9	3	124	45	122.7	19	121.2	86	128.3

1) 中橋・永井 (1985)　2) 内藤 (1967)　3) 大堀 (1958)

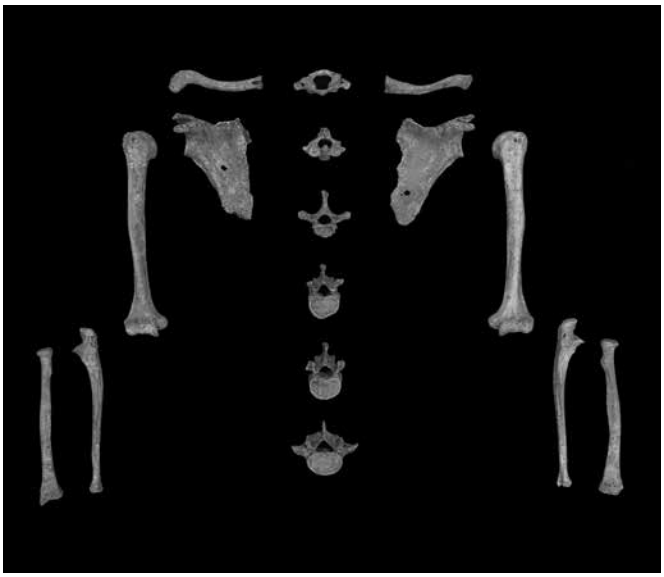
表６　鼻根部骨計測値の比較（男性）

♂		玉名平野遺跡		北部九州・山口						西部九州		広田		関東		吉母浜		西南日本		隈・西小田	
				(縄文)		(弥生)		(古墳)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(中世)		(現代)		(弥生)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
50	前眼窩間幅	-	-	4	21.3	152	18.9	50	18.6	14	18.8	8	19.6	37	20.8	18	18.8	89	17.7	55	19.5
F	鼻根横弧長	-	-	1	25	150	21.4	50	21	13	24.4	8	24.6	34	28.1	15	21.7	89	20.5	55	21.5
50/F	鼻根彎曲示数	-	-	1	80	150	88.5	50	88.6	13	76.7	8	79.8	34	74.1	15	86.6	89	86.2	55	90.6
57	鼻根最小幅	1	7	4	10.4	155	8.2	50	7.9	13	10.2	10	8.5	35	10.6	17	7.9	88	6.9	59	7.6

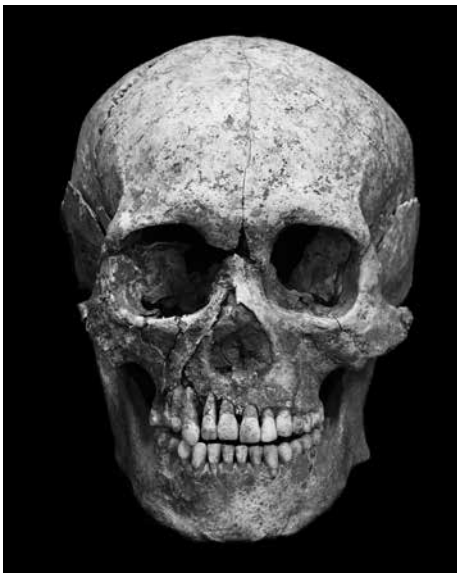
中橋・永井 (1989)

写真図版 1　SK04

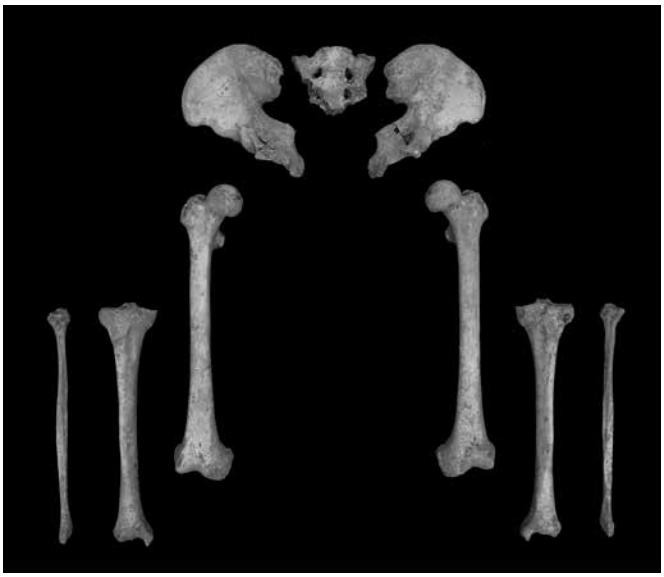
SK04　上面観



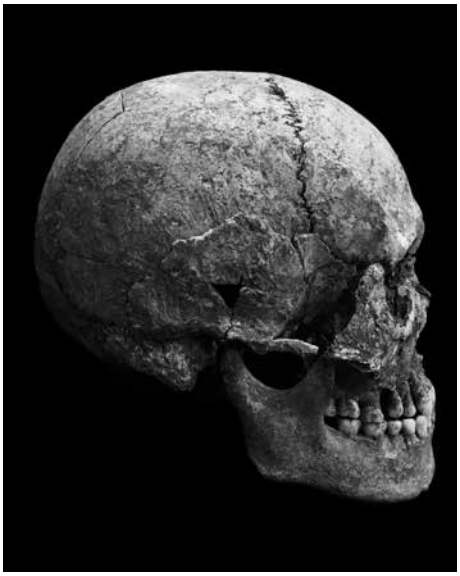
SK04　上肢観



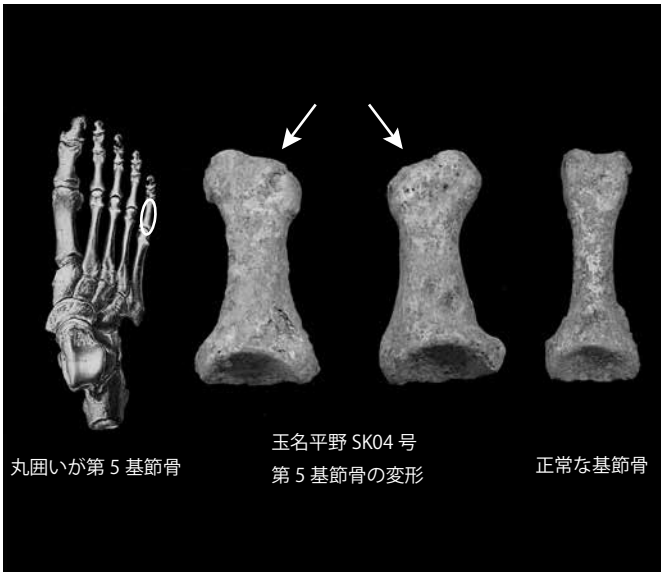
SK04　正面観



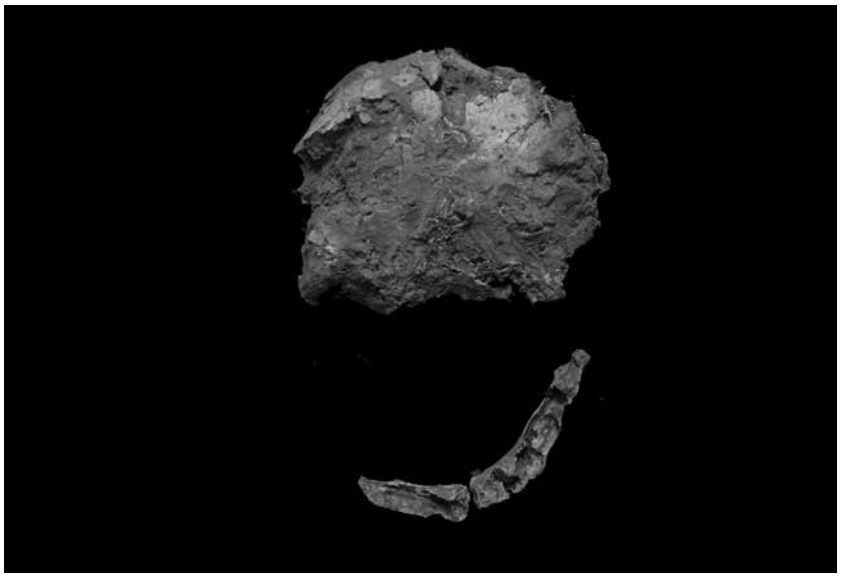
SK04　下肢観



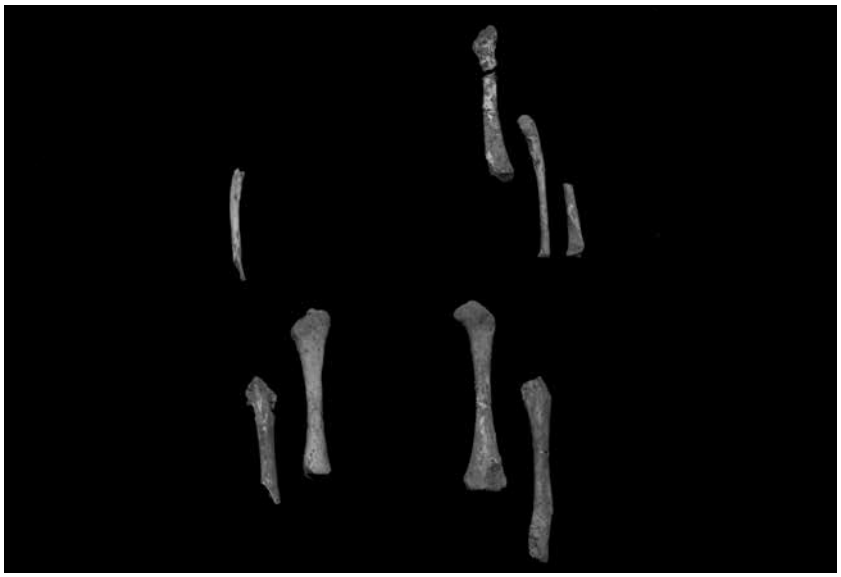
SK04　側面観



第 5 基節骨遠位端の変形



SJ24　頭蓋骨



SJ24　四肢骨

第５章　総括

１　竪穴建物及び墓地

今回の調査で、調査１区において弥生時代の竪穴建物（SI01）１棟と甕棺墓（SJ24）１基及び古代の竪穴建物（SI02）１棟と土坑墓（SK04）１基を確認した。

弥生時代の竪穴建物と甕棺墓から出土した甕は黒髪式土器で､弥生中期の土器である。また竪穴建物(SI01)と同じ標高で広がる土層（1 区Ⅳ-2 層）に黒髪式土器片が多量に含まれていた。他の器種では、高坏と器台が多いのが特徴である。高坏は丹塗りの高坏で、口縁部は鋤形である。

竪穴建物と甕棺墓が出土した１次調査１区は、菊池川に近く自然堤防の縁辺にある。今回の調査区の北側に位置する遺跡に玉名平野条里跡（古閑前地区）があり、弥生時代後期の集落を確認している。

菊池川は両迫間から秋丸にかけて東側に曲がって流れる。この屈曲部は中世以前ではさらに東側に大きく曲がって流れていたと考えられ、調査区の東側及び北側に陸地は広がっていたと考えられる。この菊池川が屈曲した内側に玉名平野遺跡群や玉名平野条里跡（古閑前地区）も位置する。確認した建物が１棟なので集落の広がりまでは確認できなかったが、Ⅳ-2 層には多量に弥生時代中期の遺物が含まれており、調査区１区から菊池川屈曲部の内側に弥生時代の中期の集落が存在し、後期には北側に移動したのではないかと想定している。

また、古代（７世紀中頃～ 10 世紀後半）の竪穴建物（SI02）と土坑墓（SK04）が１次調査１区で確認できることから古代には生活の跡が見られるようになる。1 区の中央部は中世以降も集落の範囲にあった可能性はあるが、遺構は見つかっていない。

２　水田の広がりと変遷

玉名平野遺跡群の調査範囲は、一般国道 208 号から南に延びる玉名立花線（県道６号）に沿った箇所になる。北から２次調査の１トレンチから４トレンチ、１次調査１区、１次調査２区、２次調査の５トレンチから 10 トレンチと順に並ぶ。この調査区で古代から近世にかけての水田を確認することができた。

調査で確認された水田で古い時期のものは古代の水田で、２次調査１トレンチと１次調査１区の北側の一部及び１次調査２区とで確認した。２次調査１トレンチは柳町遺跡の近くにあたり、１次調査１区は１トレンチから約 260 m南に行ったところにあたり、更に南に調査２区と続く。古代の水田は他の調査区で確認できていないので、局所的なものであったと考えられる。

中世の水田については、２次調査の１トレンチ～４トレンチ・６トレンチ及び１次調査の２区で確認している。1 次調査１区と２次調査５トレンチ以外で確認できている。1 次調査１区が建物を確認できた区域で、2 次調査５トレンチは流路が確認された区域である。建物が確認された区域及び流路以外の広い範囲に水田が広がっている。近世においても中世の水田が確認された調査区で確認されており、中世以降玉名平野遺跡群の河崎地区で水田が営まれるようになったと言えるだろう。

３　今後の課題

玉名平野遺跡群の調査で、古代から近世にかけての水田の広がりを確認できた。また、弥生時代の竪穴建物や甕棺墓、古代の竪穴建物や土坑墓を検出したことでそれぞれの時代の集落の存在を想定した。しかし、検出した数は少ないので、集落の存在まで確定はできない。今後の調査で集落の広がりまで確認できることを期待したい。

【参考文献】

美濃口雅朗　1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会　PP.119‐148

玉名市立歴史博物館こころピア編　2005 年『玉名市史』通史篇上巻

高谷和生編　2001 年『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 200 集　熊本県教育委員会

坂田和弘編　2004 年『柳町遺跡Ⅱ』熊本県教育文化財調査報告第 218 集　熊本県教育委員会

橋口達也　2005 年『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣

荒木隆宏・古閑敬士・兵谷有利・末永崇編 2009 年『両迫間日渡遺跡』玉名市文化財調査報告第 19 集　玉名市教育委員会

長谷部善一編　2011 年『玉名平野条里跡（古閑前地区）』熊本県文化財調査報告書第 261 集　熊本県教育委員会

長谷部善一・亀田学編　2012 年『長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 268 集　熊本県教育委員会

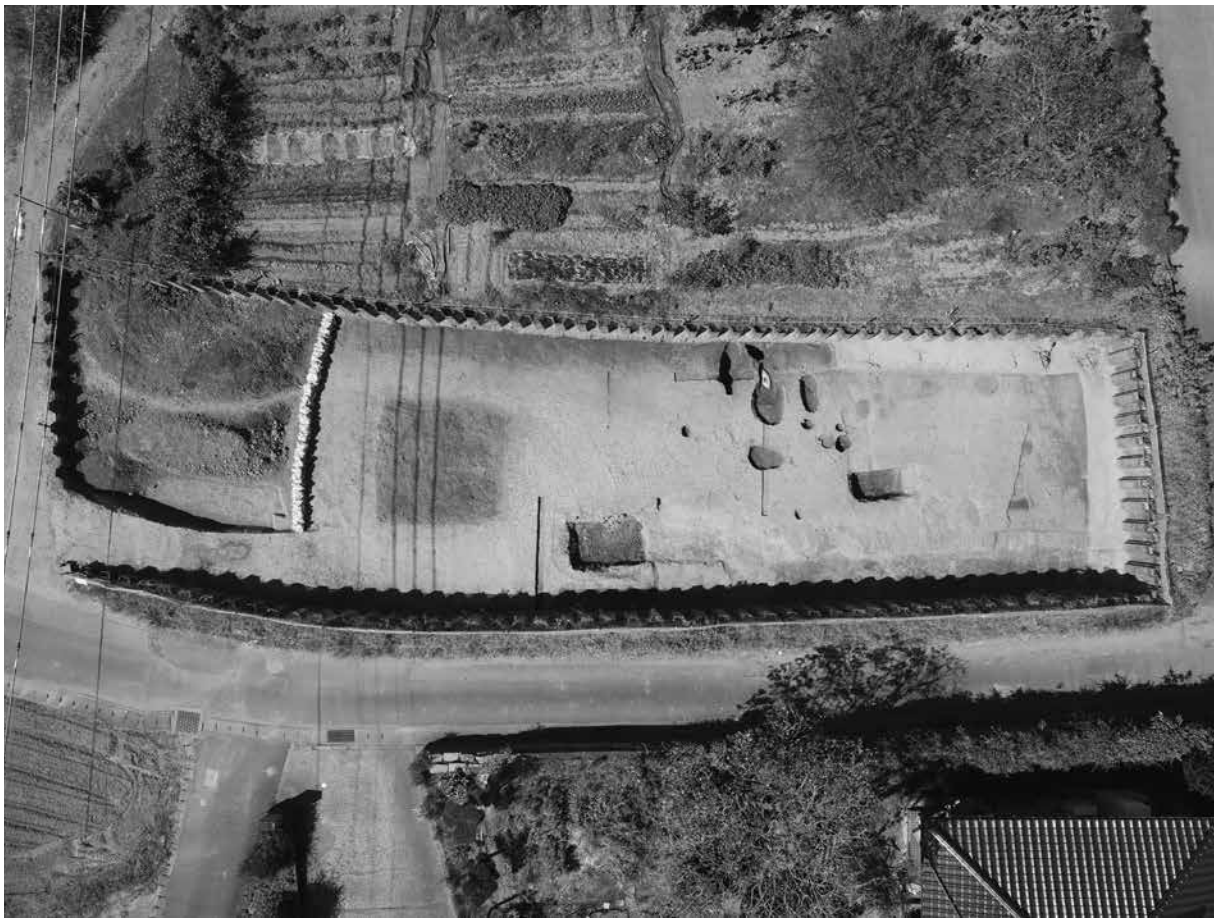
馬場正弘編　2011 年『北の崎遺跡　釼抜遺跡』熊本県文化財調査報告第 264 集　熊本県教育委員会

山下義満編 2014 年「玉名平野条里跡３・両迫間日渡遺跡２・玉名の平城跡」熊本県文化財調査報告第 299 集　熊本県教育委員会

宇田員将・田熊秀幸・石松直・菊池直樹・古森政次・古閑敬士・江見恵留 2021 年『玉名平野遺跡群』玉名市文化財調査報告第 48 集　玉名市教育委員会

写 真 図 版

図版 1

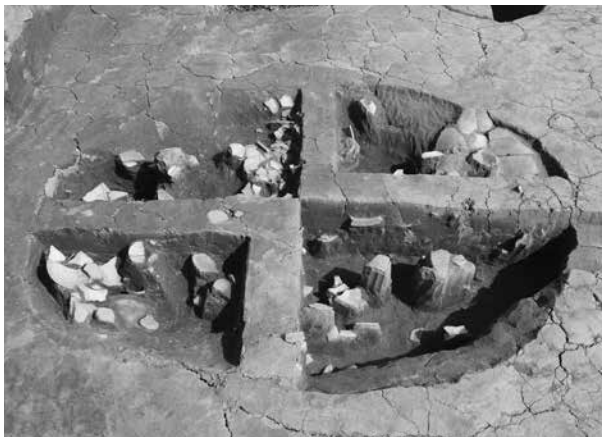


1 区全景

1 区竪穴建物 SI01 完掘状況

1 区甕棺墓 SJ24 検出状況

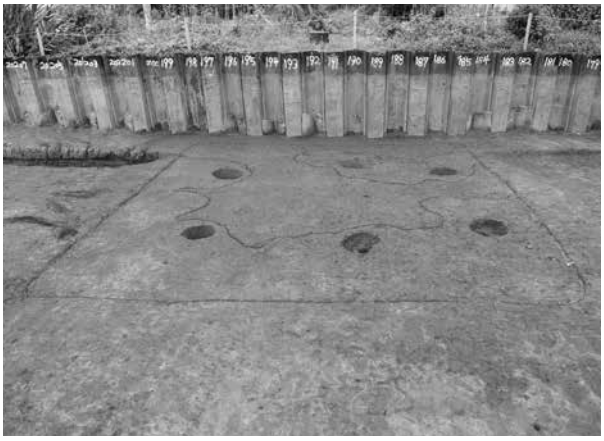
1 区甕棺墓 SJ24 人骨出土状況



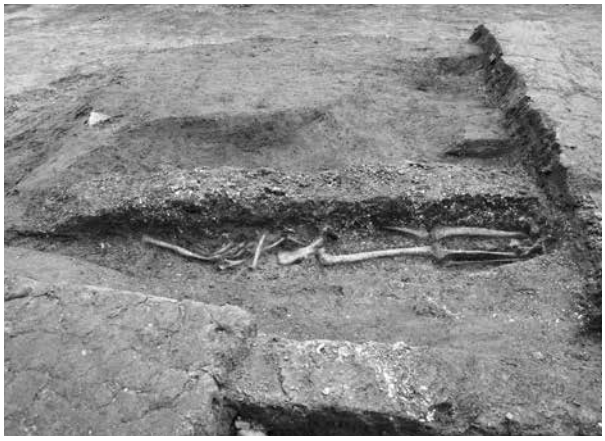
１区土坑 SK18 遺物出土状況

１区土坑 SK20 遺物出土状況

１区不明遺構 SX25 完掘状況

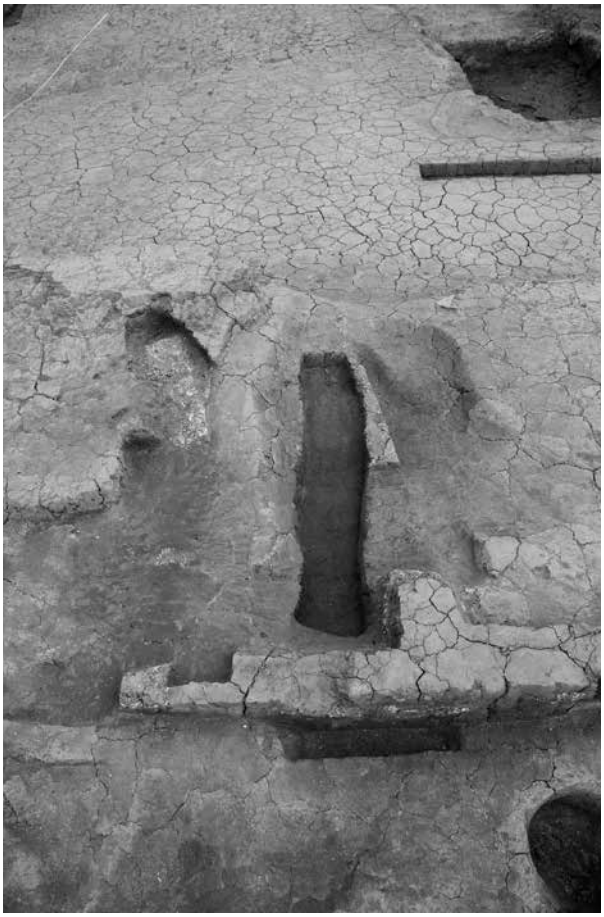


１区竪穴建物 SI02 完掘状況



１区土坑墓 SK04 土層断面

１区土坑墓 SK04 人骨出土状況



１区混貝土層及び土坑墓 SK04 完掘状況

図版３

２区完掘状況

２区畦畔状遺構検出状況

２区水田跡検出状況

２区溝 SD07 完掘状況

２次調査６トレンチ遺物出土状況

1 区甕棺墓 SJ24 出土遺物

図版５

１区竪穴建物 SI01 出土遺物

１区溝 SD07 層出土遺物

１区土坑 SK13 出土遺物

1 区土坑 SK18 出土遺物

図版 7

1 区土坑 SK20 出土遺物

1 区柱穴 P26 出土遺物

1 区不明遺構 SX23 出土遺物

１区不明遺構 SX25 出土遺物

図版９

１区Ⅳ－２層出土遺物

1 区竪穴建物 SI02 出土遺物

1 区混貝土層出土遺物 - ①

図版 11

1 区混貝土層出土遺物－②

1 区土坑墓 SK04 出土遺物

2 区溝 SD07 出土遺物

2 次調査 4 トレンチ出土遺物

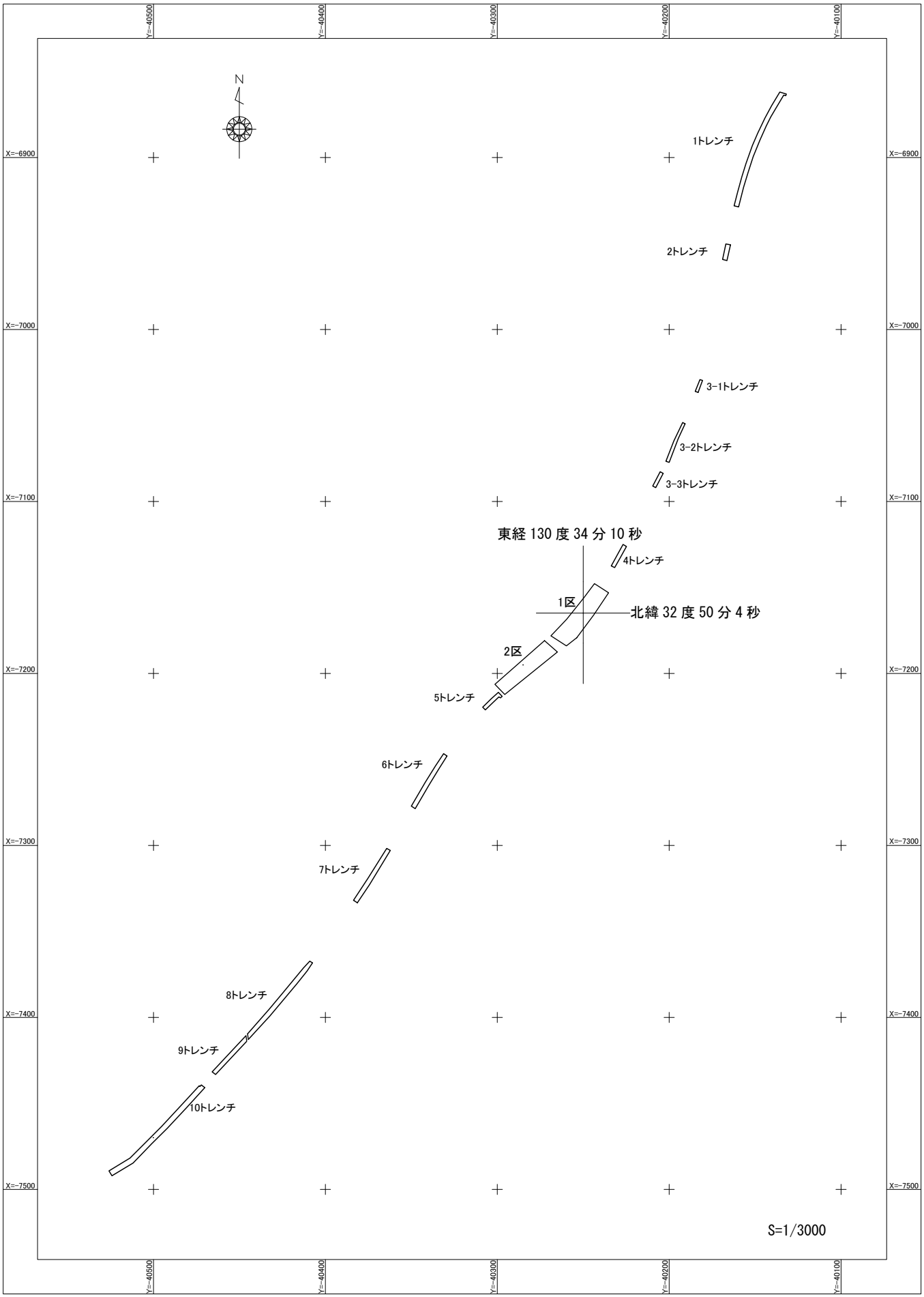
２次調査６トレンチ出土遺物－①

２次調査６トレンチ出土遺物－②

２次調査７トレンチ出土遺物

２次調査９トレンチ出土遺物

２次調査 10 トレンチ出土遺物


Y=-40500
Y=-40400
Y=-40300
Y=-40200
Y=-40100
X=-6900
X=-7000
X=-7100
X=-7200
X=-7300
X=-7400
X=-7500
N
1トレンチ
2トレンチ
3-1トレンチ
3-2トレンチ
3-3トレンチ
東経 130 度 34 分 10 秒
4トレンチ
1区
北緯 32 度 50 分 4 秒
2区
5トレンチ
6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
9トレンチ
10トレンチ
S=1/3000

第 41 図　座標測地点図

報告書抄録

ふりがな	たまなへいやいせきぐん　1
書名	玉名平野遺跡群１
副書名	玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第３４５集
編著者名	後藤克博
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒８６２－８６０９　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
発行年月日	2022 年令和４年３月 15 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たまなへいやいせきぐん 玉名平野遺跡群	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 あきまる　かわさき 秋丸、河崎	206	483	32 度 50 分 4 秒	130 度 34 分 10 秒	2020.07.07 ～ 2020.10.16 2020.12.09 ～ 2021.01.29	1,596 ㎡	道路 拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉名平野遺跡群	集落跡 水田跡	弥生 古代	甕棺墓 竪穴建物 土壙墓 水田	器台、高坏、 甕、 土師器、 須恵器	

要　約

玉名平野遺跡群では、調査１区で古代の竪穴建物１棟、土坑墓１基を検出した。土坑墓には１体の人骨が残存しており、20 歳代前半の男性である。伸展葬で木棺墓の可能性もある墓である。また１区では、弥生時代の竪穴建物１棟、甕棺墓１基、土器廃棄土坑３基、他を検出した。甕棺墓の棺体は、黒髪式の台付甕を合わせており、中にあった人骨は乳児であった。

建物と墓は菊池川の自然堤防上の微高地にあたり今回調査の平地では見られないことから、弥生時代と古代においては集落が菊池川右岸の彎曲部内側の自然堤防上に広がっていたものと考えられる。調査２区では、中世の水田及び古代の水田を確認した。

第２次調査においても中世及び近世の水田を確認している。古代、古墳、弥生時代の遺物包含層は確認できるものの、水田層が確認できていない。このことから、今回の調査範囲において広く稲作が営まれているのは中世以降で、古代は局所的に稲作が営まれていたと言えるだろう。

熊本県文化財調査報告　第３４５集

玉名平野遺跡群１

－玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

発行年月日　令和４年（2022 年）３月 15 日

発　　行　熊本県教育委員会

熊本県熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号

印　　刷　ホープ印刷株式会社

熊本県熊本市北区龍田弓削１丁目４番 12 号

見返し（白）

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：令和３年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３４５集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：玉名平野遺跡群１
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０２３年３月１日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/